

林宮原遺跡Ⅷ

－ 仮設ゲートボール場造成に伴う発掘調査報告書 －

2011

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



林宮原遺跡Ⅷ

— 仮設ゲートボール場造成に伴う発掘調査報告書 —

2011

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会





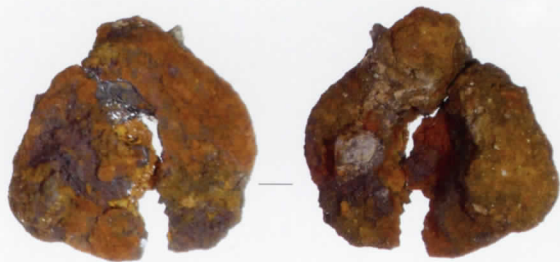
林地区航空写真(矢印が調査地点 平成8年10月撮影) 国土交通省ハツ場ダム工事事務所提供



SI04 葎引金具(第21図9)



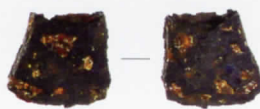
SI06 刀子(第29図7)



SI06 紡錘車(第29図9)



SI06 鉄斧袋部か(第29図8)



遺構外 袋状鉄斧(第48図7)



遺構外 鉄斧袋部か(第48図8)

林宮原遺跡VIII出土鉄製品



SI02 浅間粕川テフラ検出状況



SI02 東西セクション(浅間粕川テフラ堆積状況)

序 文

長野原町内には、縄文時代中期後半の拠点集落である長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡や天明3年の浅間山の大爆発により発生した泥流被災状況を伝える東宮遺跡・小林家屋敷跡に代表されるように、多数の貴重な遺跡の存在が知られています。

教育委員会では、文化財保護事業の一環として、町の貴重な文化遺産である遺跡を保護するとともに、失われていく遺跡の記録保存に努めています。

林宮原遺跡はこれまでの発掘調査で、本町でも稀少な古墳時代後期の住居跡が検出された他、平安時代の集落があることが知られています。今回報告する第8次調査は、仮設ゲートボール場造成に伴う調査であります。調査面積は僅かでしたが、平安時代の住居跡と土坑が発見され、住居内からは長野県との交流を示す貴重な資料を得ることができました。本書が町民の皆様をはじめより多くの方々に活用され、郷土長野原の歩んできた道のりを知る一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたって各方面から多大なるご指導・ご協力をいただき厚く御礼申し上げます。

平成23年12月

長野原町教育委員会

教育長 黒 岩 文 夫

例 言

1. 本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字林字宮原に所在する林宮原遺跡(8次)の発掘調査報告書である。
2. 調査は仮設ゲートボール場造成に伴う事前調査として、原因者の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は、町費が充てられた。
4. 調査は発掘調査を平成20年9月1日から9月19日迄、整理調査及び報告書作成を平成21年2月3日から平成23年11月30日迄の期間実施した。
5. 本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。
6. 本書は富田孝彦が編集・執筆した。各作業分担は以下の通りである。
編集・執筆：富田 遺構・遺物写真撮影：富田 遺物実測・トレース：富田・柿本・向出
図版および写真図版作成：柿本・向出
7. 本書中の遺跡名は調査が数次にわたっている場合はそれぞれを識別するために遺跡名の最後にローマ数字を表記してある。同一遺跡内の別地点と解釈していただきたい。
例) 林宮原遺跡 VIII (遺跡名) (第8次)
8. 調査において以下の項目の一部を委託した。
表土掘削・埋め戻し：東光建設株式会社
測 量：(株)測 研
9. 本書における石器の石質鑑定は飯島静男氏(群馬地質研究会)、灰釉陶器の窯式鑑定は神谷佳明氏((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)、墨書土器の判読は高島英之氏(群馬県教育委員会)の御教示を得た。
10. 発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。(五十音 順敬称略)
相京建史・麻生敏隆・飯島静男・飯田陽一・飯森康広・石田 真・井上慎也・小野和之・小川卓也・
神谷佳明・黒澤照弘・坂口 一・篠原正洋・鈴木徳雄・関 俊明・高橋政充・高林真人・津金澤吉茂・
堤 隆・中沢 悟・榎崎修一郎・巾 隆之・福田貫之・藤巻幸男・水田 稔・向出博之・山口逸弘・
吉田智哉
(株)歴史の杜・群馬県教育委員会・群馬県八ッ場ダム水源地域対策事務所・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・長野原町役場産業建設課・長野原町役場ダム対策課
11. 調査組織は次の通りである。
教 育 長 黒岩文夫
課 長 樋口 正(～平成21年3月31日)
山口伸行(平成21年4月～平成22年3月31日)
市村 敏(平成22年4月～)
社 会 教 育 GL 白石光男
" 副 GL 中村 剛(～平成22年3月31日)
調 査 担 当 者 富田孝彦
調 査 参 加 者 市村丑松・市村勝美・柿本六美・佐々木忍・長橋敏子・向出治恵

凡 例

1. 本書で使用した地図は1:2500「長野原都市計画図」(長野原町1994)、1:25000「長野原」(国土地理院1997)である。
2. 挿図の方位は磁北を示す。
3. 挿図の縮尺については下記の通りであり、各挿図中に示してある。
遺 構：住居跡・・・1/60 カマド・貯蔵穴・土坑・・・1/30
遺 物：復原土器・台石・・・1/4 土器片・礫石器類・・・1/3
 鉄製品・鉄滓・・・1/2
4. 遺構の略号については以下の通りである。 SI：住居跡 SK：土坑
5. 挿図に図示した遺物は、観察表にその内容を記してある。観察表における復原土器の法量は左側から器高、中央が口径、右側が底径を表し、計測数値は推定値を含む。()内の数値は現存値、< >内の数値は復原値を表す。
6. 土器の色調に関しては、「新版標準土色帖1995年後期版」(編・著小山正忠・竹原秀雄、監修農林 水産省農林水産技術会議事務局、色票監修財団法人日本色彩研究所)の色名を参考にした。観察表 において外面/内面の順で記した。
7. 挿図中のスクリントーン・記号は以下の通りである。

遺 構・土層図



焼土



地山



白色粘土 (山砂)

遺 物



磨面
黒色処理



炭化物



施釉

● 土器

△ 石器

□ 鉄器

※土器における欠損部に関しては点描で表現している。

断面塗りつぶしは須恵器・灰釉陶器を示している。

目 次

卷頭図版	
序 文	
例 言	
凡 例	
第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 遺跡の位置	4
第2節 周辺の遺跡	4
第3節 既応の調査	13
第4節 基本層序	14
第3章 検出された遺構と遺物	20
第1節 竪穴式住居	20
第2節 土 坑	43
第3節 遺構外出土遺物	48
第4章 調査の成果と課題	49

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺の河岸段丘面分布図 (S = 1/25,000)	5	第25図	SI06実測図(1/60)	36
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)	6	第26図	SI06焼土ピット実測図(1/30)	36
第3図	調査地点位置図 (S = 1/2,500)	14	第27図	SI06遺物出土状況図(1/60)	37
第4図	基本土層 (S = 1/20)	14	第28図	SI06出土遺物実測図1	37
第5図	調査区全体図(S=1/160)	19	第29図	SI06出土遺物実測図2	38
第6図	SI01実測図(1/60)	20	第30図	SI07実測図(1/30)	38
第7図	SI01掘り方実測図(1/60)	21	第31図	SI07遺物出土状況図(1/30)	39
第8図	SI01カマド実測図(1/30)	22	第32図	SI07出土遺物実測図	39
第9図	SI01貯蔵穴実測図(1/30)	23	第33図	SI08実測図(1/60)	40
第10図	SI01遺物出土状況図(1/60)	23	第34図	SI08カマド実測図(1/30)	41
第11図	SI01出土遺物実測図1	24	第35図	SI08遺物出土状況図(1/60)	41
第12図	SI01出土遺物実測図2	25	第36図	SI08出土遺物実測図1	42
第13図	SI02実測図(1/60)	26	第37図	SI08出土遺物実測図2	43
第14図	SI02カマド実測図(1/30)	27	第38図	SK01実測図(1/30)	43
第15図	SI02出土遺物実測図	28	第39図	SK01出土遺物実測図	44
第16図	SI03実測図(1/60)	29	第40図	SK02実測図(1/30)	44
第17図	SI03カマド実測図(1/30)	29	第41図	SK03実測図(1/30)	45
第18図	SI03出土遺物実測図	30	第42図	SK03遺物出土状況図(1/30)	45
第19図	SI04実測図(1/60)	30	第43図	SK03出土遺物実測図	46
第20図	SI04遺物出土状況図(1/60)	31	第44図	SK04実測図(1/30)	46
第21図	SI04出土遺物実測図1	32	第45図	SK04出土遺物実測図	46
第22図	SI04出土遺物実測図2	33	第46図	SK05実測図(1/30)	47
第23図	SI05実測図(1/60)	34	第47図	SK05出土遺物実測図	47
第24図	SI05出土遺物実測図	35	第48図	遺構外出土遺物実測図	48

挿 表 目 次

第1表	周辺の遺跡	7	第7表	SI06柱穴計測表	35
第2表	林宮原遺跡調査一覧	14	第8表	SI08柱穴計測表	42
第3表	SI01柱穴計測表	24	第9表	林宮原遺跡Ⅶ住居跡諸属性	50
第4表	SI02柱穴計測表	27	第10表	林宮原遺跡Ⅶ出土墨書土器一覧	50
第5表	SI04柱穴計測表	31	第11表	林宮原遺跡Ⅶ出土遺物観察表	53
第6表	SI05柱穴計測表	34			

図 版 目 次

- P L 1 1. 1区全景(西から)
2. 1区全景(東から)
3. 2区全景(東から)
- P L 2 1. 2区全景(西から)
2. 2区西側近景(南東から)
3. 2区中央近景(南から)
4. 2区東側近景(南西から)
5. 2区試掘調査風景(北西から)
- P L 3 1. SI01(南から)
2. SI01遺物出土状況(南から)
3. SI01貯蔵穴周辺遺物出土状況(南から)
4. SI01カマド(南から)
5. SI01カマド断ち割り状況(南から)
- P L 4 1. SI01カマド掘り方(南から)
2. SI01カマド遺物出土状況(南から)
3. SI01貯蔵穴(南から)
4. SI01貯蔵穴半截状況(南から)
5. SI01掘り方(南から)
6. SI01カマド掘り方ベルト設定状況(南から)
7. SI01床下土坑半截状況(南から)
8. SI01床下焼土(南から)
- P L 5 1. SI02(西から)
2. SI02(南から)
3. SI02検出状況[浅間粕川テフラ検出状況](南から)
4. SI02南北セクション(西から)
5. SI02東西セクション(南から)
- P L 6 1. SI02カマド(北西から)
2. SI02カマド検出状況1(南東から)
3. SI02カマド検出状況2(北西から)
4. SI02カマド掘り方(北西から)
5. SI03(西から)
6. SI03セクション(南から)
7. SI03カマド(西から)
- P L 7 1. SI04・05(西から)
2. SI04(北から)
3. SI04(西から)
4. SI04遺物出土状況1(北から)
5. SI04遺物出土状況2(北西から)
- P L 8 1. SI05(東から)
2. SI05南北セクション(東から)
3. SI06(西から)
4. SI06焼土ピットP1(南東から)
5. SI06焼土ピットP1半截状況(南東から)
- P L 9 1. SI06遺物出土状況[小刀](北東から)
2. SI06遺物出土状況[紡錘車](南から)
3. SI07(西から)
4. SI07カマド断ち割り状況(西から)
5. SI07カマド遺物出土状況(西から)
- P L 10 1. SI08(西から)
2. SI08カマド(西から)
3. SI08カマド断ち割り状況(西から)
4. SI08北ベルト(西から)
5. SI08南ベルト(西から)
- P L 11 1. SI08遺物出土状況1(西から)
2. SI08遺物出土状況3(西から)
3. SI08遺物出土状況4(西から)
4. SI08カマド遺物出土状況(西から)
5. SI08遺物出土状況2[鉄滓](東から)
6. SK01(南西から)
7. SK01柱痕跡検出状況(南東から)
8. SK01半截状況(南西から)
- P L 12 1. SK01遺物出土状況[羽釜](南から)
2. SK02(南から)
3. SK02半截状況(南から)
4. SK03(東から)
5. SK03セクション(東から)
6. SK03遺物出土状況(東から)
7. SK03遺物出土状況[滓付着礫](東から)
8. SK03遺物出土状況[羽口か](東から)
- P L 13 1. SK03遺物出土状況[鉄滓](東から)
2. SK04(東から)
3. SK04半截状況(東から)
4. SK05(西から)
5. SK05半截状況(西から)
6. SK05検出状況(北西から)
7. 調査前風景(北西から)
8. 調査前風景2(北東から)
- P L 14 SI01出土遺物
- P L 15 SI02・SI03・SI04・SI05出土遺物
- P L 16 SI06・SI07・SI08出土遺物
- P L 17 SI08・SK01出土遺物
- P L 18 SK03・SK04・SK05・遺構外出土遺物
- P L 19 墨書土器拡大写真
1. 第36図1「永隆」
2. 第36図3「由人」
3. 第24図1(底部外面)「□」
4. 第24図1(底部内面)「□」
5. 第11図7(体部内面)「□」

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

平成20年7月下旬に長野原町役場ダム対策課より林地区ゲートボール場の敷地内に町営住宅を建設する計画が策定され、対象地に仮設ゲートボール場を造成する計画が示されたことから、埋蔵文化財の取り扱いについて、長野原町教育委員会教育課社会教育グループに照会があった。対象地は周知の包蔵地「林宮原遺跡(No.48)」の範囲に含まれていることから試掘調査の必要がある旨を説明し、調査実施で合意を得た。文化財保護法第94条第1項の規定により、同年8月1日付けで関係書類(「発掘届」・「開発に伴う文化財調査願書」)が提出された。同年8月26・27日に教育委員会文化財担当の立会いのもと、対象地内のビニールハウス予定地とゲートボール場造成予定地の削平範囲を面的に表土をはぎ、遺構の有無および土層の堆積状況の事前調査を行った。その結果、表土下15~20cmで平安時代の住居跡3軒以上、土抗4基以上が存在することが判明したので、造成前に発掘調査(記録保存)する必要があると判断し、その旨を長野原町町長(ダム対策課)に伝えた。協議の結果、工事計画の変更が困難であるため、継続して発掘調査を実施することとなった。同年8月28日付け長教社第118号で長野原町教育委員会を経由して長野原町町長(ダム対策課)より群馬県教育委員会教育長へ「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。

第2節 調査の方法と経過

(1) 発掘調査

a. 表土除去

表土除去は重機(バックホー)を使用して行った。確認調査で調査区北側は表土から15cm、南側では1m程度で遺物が出土することが判明していたので、そのことを念頭に表土から遺構確認面まで少しずつ掘り下げていった。遺物の出土が確認されるまでを重機でそれ以下は人力で除去した。重機のバケットの爪に鉄板を装着して遺構を傷つけないように配慮した。

b. 遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に人力で行った。住居跡は確認面での覆土の識別に努め、平面形を確定していった。確認面が黒色土中ということもあり作業は困難な側面もあった。

c. 遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した上で土層観察用のベルトを設定し、遺構内の覆土の除去に着手した。住居跡の場合は長軸方向とその中心から長軸に対して直交方向に十字にベルトを設定し、配石遺構の場合は長軸に沿って半截して土層の観察を行った。

遺物の取り上げに関しては、単独と思われる破片は上層・下層・床面直上ごとに、個体もしくは遺物の集中している箇所は出土位置図(ドット図)を作成の上、取り上げ作業を行った。遺物出土位置図は1/10のスケールで作

成し、標高値の記録を一点ずつ行った。

d. 実測図の作成及び遺構の写真撮影

実測図は土層堆積状況図、遺物出土位置図及び完掘状況遺構平面図を作成した。土層堆積状況図は遺構が小規模であったので遺物出土位置図と同様に1/10のスケールで作成した。完掘状況遺構平面図は光波測距儀を用いて行った。完掘遺構の変化点を三次元記録し、その場でパーソナル・コンピューターにより現地での詳細な観察の上で結線し作成した。また、土層堆積状況図及び遺物出土状況(位置)図のポイントの位置も完掘状況遺構平面図作成時に記録した。測定したデータは公共座標値に変換後、加工・編集を行いCD-R等に保管した。

遺構の記録写真は土層断面、遺物出土状況、完掘状況の順で行った。カメラは一眼レフを用い、モノクロとカラーライドの2種類のフィルムを使用した。フィルムサイズはいずれも35mmである。またデジタルカメラも併用して撮影した。

(2) 調査経過

a. 発掘調査

発掘調査は平成20年9月1日から9月19日にわたって実施された。

9月1日、SI01ベルト設定、掘り下げ開始。SI02遺構確認面の粕川テフラ範囲確認・写真撮影。

南東側谷部に住居2軒(SI04・SI05)検出。

9月2日、SI01掘り下げ。SI02サブトレ、鉄滓出土。

9月3日、SI01ベルトセクション写真撮影・作図。ベルト外し、遺物出土状況写真。カマド断ち割り開始。

SI02サブトレ、テフラ分布範囲図・写真。SK01平断面図、仮SK02平面図・焼土分布範囲図作成。

9月4日、SI01カマド断ち割り・セクション写真。SI02掘り下げ。仮SK02断ち割り、カマドと判明。

仮SK02→SI03へ変更、範囲確認。SK03半截、写真。雨天のため午後4時で中止。

9月5日、SI01遺物出土状況図作成・遺物取り上げ(No.1～6)。ピット掘り下げ、カマドセクション図作成。

SI02掘り下げ、南東カマドと判明。またSI02東側にもカマドあり(SI07)。

SI03南側に住居確認(SI06)。SK01は柱痕跡が確認され、掘立柱建物跡の可能性あり。

9月8日、SI01カマド平面図付け足し、遺物取り上げ(No.1・2)。貯蔵穴半截・セクション写真。

周溝掘り下げ途中。SI02セクション図・写真、カマド断ち割りセクション図・写真。SK02平面写真。

SI06サブトレ途中。SK01セクション図・写真。SI07カマド平面図・写真。

9月9日、SI01カマド崩落石除去、焼き口写真。貯蔵穴完掘。周溝掘り下げ途中。

SI02ベルト除去、柱穴・周溝掘り下げ、カマド焼き口・SI02全景写真。

SI06サブトレ途中。SK01柱痕跡写真。SI04・05ベルト設定、掘り下げ開始。

9月10日、SI01カマド完掘途中、周溝掘り下げ途中。SI02カマド断ち割り追加、遺物取り上げ(No.1)。

SI06ベルト設定、掘り下げ。SI04・05掘り下げ完了。SI05→04の新旧関係判明。

SI05ベルトセクション図・写真。SI07カマド断ち割り途中、遺物取り上げ(No.1～3)。

SK01柱痕跡平面図。SK02礫出土平面図。

9月11日、SI01カマド完掘途中。SI02カマド断ち割り図面追加。

SI06ベルト残り掘り下げほぼ終了、ベルトセクション写真。

SI04・05セクション図・写真、ピット・周溝掘り下げほぼ終了。

SI07カマド断ち割り図。SK01・02完掘平面図。SI04・05の北側に住居確認(SI08)。

9月12日、SI06ベルトセクション図、完掘。鉄製品2点出土。

SI04・05完掘平断面図。SI08ベルト設定掘り下げ開始。

9月16日、SI02カマド断ち割り図面追加、完掘途中。SI03完掘平断面図。

SI06セクション図・平面図、鉄製品2点取り上げ。刀子と紡錘車か。SI07カマド完掘平面図・写真。

SI08ベルトセクション図・写真。

9月17日、SI01カマド完掘平面図・写真。SI02カマド完掘平面図・写真。SI03カマドセクション図・写真。

SI06焼土ピットセクション図・写真。SI08遺物出土状況図・写真、遺物取り上げ(No.1～6)、

カマド断ち割り途中。SK03セクション図・写真、遺物取り上げ(No.1～3)。

SK04セクション図・写真。SK05検出状況写真。その他、遺構確認および全体清掃開始。

9月18日、SI02カマド平面図補足。SI03カマド完掘平面図・写真。SI06焼土ピット完掘セクション図・写真。

SI08完掘平面図・写真、カマドセクション図・写真。SK03完掘平面図・写真。

SK04完掘平面図・写真。SK05平面図・セクション図・写真。全体清掃。全景撮影。

9月19日、SI08カマド遺物出土状況図・写真、完掘平面図・写真。SI01掘り方ベルトセクション図・写真。

完掘平面図・写真。道具撤収。

b. 整理調査・報告書作成

整理調査は平成21年2月3日～平成23年11月30日にわたって実施された。発掘調査によって得られた遺物はテンバコで8箱、現場で作成した図面類は52枚であった。整理調査は担当の他に作業員4名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。

遺物洗浄は平成21年2月3日～同年2月4日まで、注記作業は同年2月5日～2月13日までの間実施した。

遺物の接合作業は最小限のものを同年11月19日～11月24日まで行い、石膏による復原作業は同年11月25日～平成22年3月4日までに実施した。この復原作業により復原実測可能な個体が40点ほどあることが判明した。

遺物の実測・トレースは平成22年12月1日～平成23年3月31日までの調査や事業の合間に実施した。併せて写真撮影、遺物実測図版のデジタル編集を実施した。

遺構図版・写真図版のデジタル編集を平成23年4月5日～同年10月28日、併せて執筆作業は同年6月下旬～同年11月下旬にかけて行い、併せて保管用に資料・遺物の整理をして11月30日に全ての作業を完結した。

石器の石質鑑定は平成23年8月19日に飯島静男氏(群馬地質研究会)にお願いした。灰釉陶器の窯式同定は同年9月5日に神谷佳明氏(財群馬県埋蔵文化財調査事業団)に実見していただき、併せて編年観を御教示していただいた。墨書土器の判読は同年9月16日に高島英之氏(群馬県教育委員会)に、墨書部拡大写真を見ていただき、コメントをいただいた。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置

林宮原遺跡が所在する長野原町は群馬県の北西部、吾妻郡の南西隅に位置し、「鶴舞う形の群馬県」と上毛かるたに詠まれている鶴の尾部下端にあたる。北部は高間山(標高1,341m)・本白根山(標高2,171m)の両山系から成り吾妻川流域沿いに東西に延びている。南部は浅間山(標高2,568m)の裾野に広がる浅間高原地帯を経て長野県に接している。林中原Ⅰ遺跡は北部の吾妻川流域地帯に属し、吾妻川左岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の対岸には岩峰丸岩(標高1,124m)がそびえている。丸岩は南側を除く3方が100mにも達する垂直な岩崖に取り囲まれ、吾妻川方面から臨むと見事な節理とその巨大な円柱状の独特な景観は太古から当該地域のランドマークとしての要素を備えている。

本遺跡の立地する段丘は吾妻川から下位・中位・上位・最上位の4段からなる河岸段丘の最上位段丘に相当し、吾妻川からの比高差は約80mを測る(第1図)。この段丘は約21,000年前に噴出した応桑泥流堆積物を削って形成されている。この上に関東ローム層中には約11,000年前に噴出したと考えられる浅間-草津黄色軽石層(As-YPk)が厚く堆積している。調査地点の標高は626m位である。

第2節 周辺の遺跡

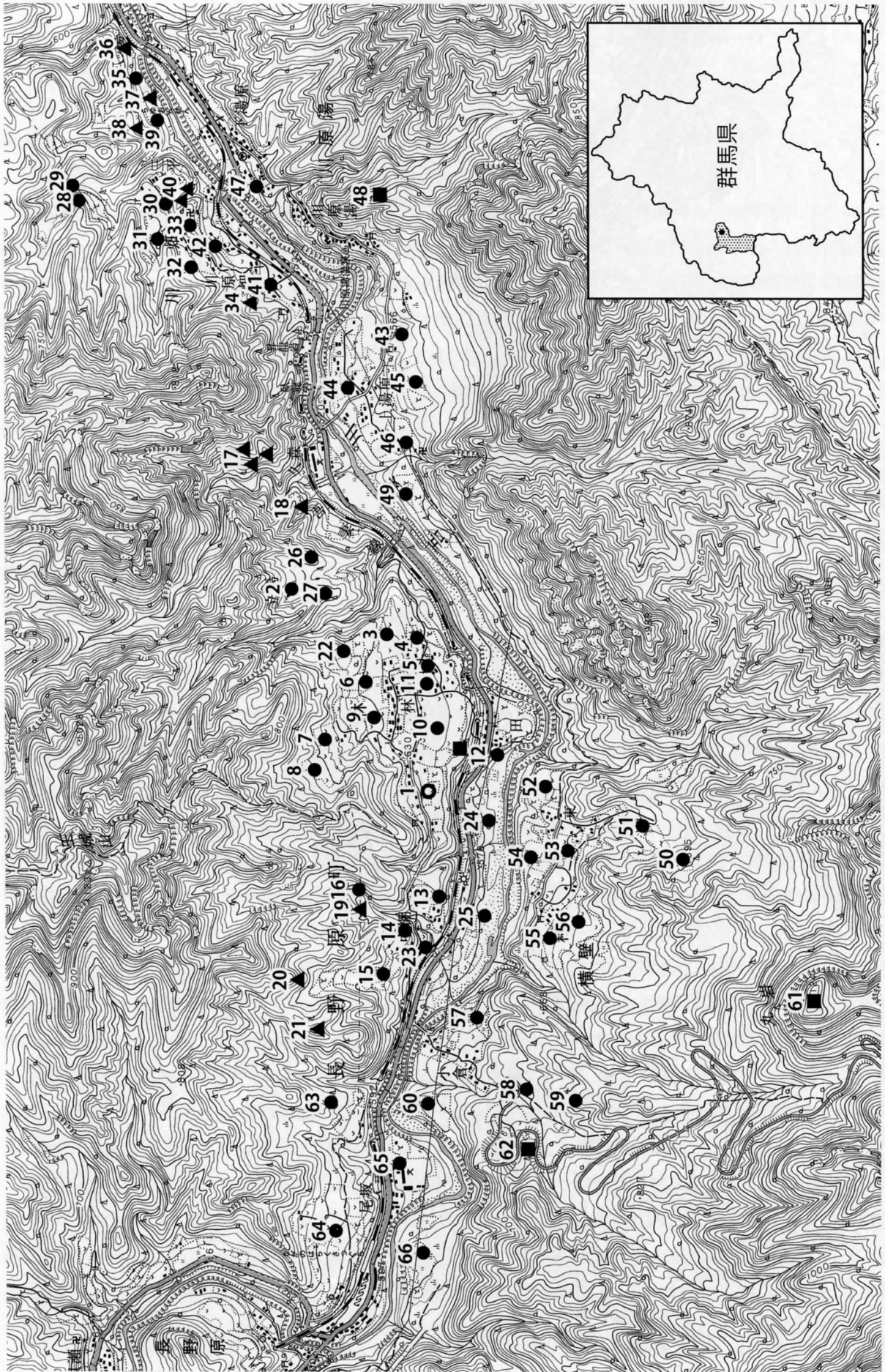
長野原町における遺跡分布状況は昭和48年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和62年度から3ヶ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199の遺跡包蔵地を確認した⁽¹⁾。また平成6年度から八ツ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が継続して調査を実施しており、新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成14年3月と平成16年4月に遺跡地図の改訂を実施した。その後も小さな変更を繰り返しているが、平成23年4月現在で218の包蔵地(指定史跡等を含む)が把握されている⁽²⁾。

本遺跡の位置する吾妻川流域地帯の東部地区はダム関連事業と直結している地域で、先述した(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が常時数カ所の発掘調査を継続している。近年多かった水没地域住民による非水没地域への移転が一段落してきて、町教育委員会で実施している町内遺跡調査の調査原因のうち水源地域対策特別措置法(以下、水特法)関連事業がかなりの割合を占めるようになってきている⁽³⁾。その矢先の政権交代による所謂「ダム本体中止声明」であった。具体的な方策は未確定であるが、水没地区住民の生活再建事業は継続的に行う意向から、今後も埋蔵文化財に係わる調整が重点的に必要な地域であることに変わりはない。

本遺跡を含む吾妻流域地帯東部地区には多くの遺跡が分布している(第1・2図・第1表)。遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占地しているが近年丘陵上にも遺跡が発見されはじめ、これまで空白だった時期を埋める遺構も検出されている。ここでは調査を実施した遺跡を中心に当該地域の遺跡を概観したい。なお、長野原町の現時点での歴史観をなるべく記載する立場から、筆者が実見したり、調査担当者に聞き取った未報告の情報を多分に含んでいる。従って本報告時には多少異なる見解になるかもしれないのでご注意願いたい。



第1図 遺跡周辺の河岸段丘面分布図 (S = 1/25,000)



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	町No.	種別	時代	概要	備考
1	林宮原遺跡	48	集落跡	縄文・古墳・平安	本遺跡	文献1,2,6~13 『県遺跡地図』No.3127 旧宮原遺跡(神社前遺跡)
2	立馬Ⅰ遺跡	37	集落跡 墓その他	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成13・14・17年度調査(事) 縄文時代早期前半住居跡2軒、包含層遺物多数、晩期住居跡1軒。弥生時代中期住居跡2軒、甕棺墓。平安時代住居跡3軒のほか、縄文時代～平安時代の陥し穴を多数検出。	文献1,2,31,55,56,59 旧立馬遺跡
3	東原Ⅰ遺跡	38	散布地	縄文・平安・近世	平成17・18年度調査(町)、20年度調査(事) 縄文時代前期～中期後半の陥穴、土坑。平安時代住居跡。	文献2,10,11,62
4	東原Ⅱ遺跡	39	散布地	縄文	平成20年度調査(事) 縄文後期土器片、黒曜石片出土。	文献2,22,62
5	東原Ⅲ遺跡	40	散布地	平安・近世	平成15・18年度調査(町)、20・21年度調査(事) 近世屋敷跡1カ所、土坑、ピット検出。	文献2,7,11,62
6	上原Ⅰ遺跡	41	散布地	縄文・平安・近世	平成18年度調査(町)、9年度調査(事) 縄文時代前期包含層、中期後半住居跡を検出。	文献2,11,22,51
7	上原Ⅱ遺跡	42	散布地	平安	平成18年度調査(町)、16年度調査(事) 縄文時代中期前半包含層。	文献2,11,58
8	上原Ⅲ遺跡	43	散布地	平安	平成18年度調査(町) 平安時代土坑、製鉄関連遺構。	文献2,11
9	上原Ⅳ遺跡	44	散布地	縄文・近世	平成14・18・20年度調査(町)、15年度調査(事) 縄文時代後期敷石住居跡、配石遺構、晩期包含層。近世溝。下駄、曲物の底、農具、石鉢、陶磁器が出土。	文献2,6,11,13,36,57
10	林中原Ⅰ遺跡	45	集落跡 城館跡	縄文・平安・中世・近世	昭和37年度(群大)、平成14～22年度(町)、16・20・21年度調査(事) 縄文時代中期後半～後期の拠点集落。縄文時代前期後葉住居・土坑、中近世「林城」。竪穴状遺構・区画溝・掘立柱建物群。	文献1,2,6,7,9,13,19,58,61,62 旧中原Ⅰ遺跡
11	林中原Ⅱ遺跡	46	散布地	縄文・弥生・中世近世	平成15～19・21年度(町)、16・20・21年度調査(事) 縄文時代中期後半～後期の拠点集落。墓坑8基。弥生時代前期末～中期前半土坑・再葬墓。中期前半住居跡4軒。中近世掘立柱建物群。	文献2,7～12,58,62 旧中原Ⅰ遺跡
12	下田遺跡	47	集落跡 その他	縄文・近世	平成6・7・9年度調査(事) 天明泥流に埋没した民家、畑跡。	文献2,22,48,49,51 『県遺跡地図』No.3126 旧下原(下田)遺跡
13	中棚Ⅰ遺跡	49	散布地	縄文・平安	平成18年度調査(町)、11年度調査(事) 縄文時代早期包含層。平安時代住居跡?黒曜石片、チャート片出土。	文献2,11,22,53 旧中棚遺跡
14	榎木Ⅰ遺跡	50	散布地	縄文・平安	平成21年度調査(事) 平安時代住居跡4軒、かまど屋1軒、土坑62基、ピット264基、溝4条、焼土2基、集石4基。江戸時代礎石建物跡1棟等。	文献2
15	榎木Ⅱ遺跡	51	集落跡	縄文・平安・中世・近世	平成12年度調査(町)、12・13・16・17年度調査(事) 縄文時代早期前半(撚糸系)住居跡31軒、前期住居跡3軒、中期初頭住居跡2軒。平安時代住居跡38軒。「三家」の墨書土器、刻字「称」をもつ石製紡錘車出土。中世の掘立柱建物群検出。	文献2,4,22,37,44,54,55,58,59
16	二反沢遺跡	52	社寺 その他	中世・近世	平成12年度調査(事)中世の石垣を伴う土坑ほか、鍛冶関連遺物。近世の畑跡を検出。	文献2,29,54 旧大乘院堂跡
17	久森沢Ⅰ岩陰群	53	その他	不明	岩陰遺跡。	文献2
18	久森沢Ⅱ岩陰群	54	その他	不明	岩陰遺跡。	文献2
19	滝沢観音岩陰	55	その他	不明	岩陰遺跡。「滝沢観音」の堂宇と石仏群。	文献2
20	蜂ッ沢岩陰	56	その他	縄文	岩陰遺跡。打製石斧出土。	文献2
21	御嶽山岩陰	57	その他	不明		文献2
22	花畑遺跡	205	集落跡	縄文・平安	平成10年～12年度調査(事) 平安時代住居跡3軒、陥し穴多数検出。	文献2,22,52～54
23	榎木Ⅲ遺跡	202	散布地	縄文・弥生・平安・中世	平成10年度調査(事) 縄文前～後期、弥生中期:包含層。	文献22
24	下原遺跡	204	集落跡 その他	縄文・弥生・古墳・平安・中近世	平成12・13・15・16年度調査(事) 古墳時代住居跡1軒、平安時代住居跡1軒、中世の屋敷跡1カ所。中世から近世の畑跡3面を検出。	文献2,22,23,32,54,55,57,58
25	中棚Ⅱ遺跡	203	その他	近世	平成11～13・15年度調査(事) 天明泥流で埋没した畑跡、および安永九年と考えられる埋没畑跡。	文献2,23,24,53～55,57
26	立馬Ⅱ遺跡	213	集落跡	縄文・弥生・平安	平成14年度調査(事) 縄文時代中期初頭～後半住居跡11軒。縄文時代早期包含層遺物。縄文時代～平安時代の陥し穴多数検出。	文献28,56
27	立馬Ⅲ遺跡	215	集落跡	縄文・平安	平成19年度調査(事) 縄文時代早期を中心とする集落跡。縄文時代住居跡5軒、竪穴状遺構2基のほか集石、土坑など。平安時代の土坑、陥し穴多数。中近世の土坑、溝。	文献43,61
28	温井Ⅰ遺跡	1	散布地	縄文・平安	縄文後期。	文献2
29	温井Ⅱ遺跡	2	散布地	縄文	中期。	文献2
30	三平Ⅰ遺跡	3	集落跡	縄文・弥生・平安・近世	平成20年度調査(町)、10・16・17年度調査(事) 縄文時代早期土坑、前期住居跡。弥生時代前期末～中期土坑。平安時代住居跡、掘立柱建物跡、土坑、陥し穴等検出。	文献2,13,22,33,52,58,59
31	三平Ⅱ遺跡	4	集落跡	縄文・平安	平成16年度調査(事)縄文時代草創期～前期の土器・石器を多量に出土。掘立柱建物跡7棟ほかを含む中世屋敷跡1カ所。	文献2,33,58

No.	遺跡名	町No.	種別	時代	概要	備考
32	上ノ平Ⅰ遺跡	5	集落跡	平安	平成18・19年度調査(事) 縄文時代中期中葉～後期初頭住居跡16軒、陥し穴134基、平安時代住居跡20軒を検出。県内2例目となる皇朝十二銭の「貞観永寶」が出土。	文献2.41.60.61
33	上ノ平Ⅱ遺跡	6	散布地	不明	チャート片出土。	文献2
34	西宮岩陰	13	その他	不明	岩陰遺跡。	文献2
35	石畑遺跡	210	散布地 その他	縄文・弥生・ 近世	平成7・9・10年度調査(事) 縄文時代前期包含層。弥生時代中期土坑。近世畑。	文献2.22.49.51.52
36	石畑Ⅰ岩陰	9	墓その他	縄文	昭和53年度調査(県) 縄文草創期～晩期：土器片、獣骨、人骨などを出土。	文献2.16.17
37	石畑Ⅱ岩陰	10	その他	不明	岩陰遺跡。	文献2
38	二社平岩陰	11	その他	不明	岩陰遺跡。	文献2
39	二社平遺跡	209	散布地	縄文・弥生・ 平安・近世	平成8・10年度調査(事) 弥生後期土器片。近世畑。	文献22.50.52
40	三ツ堂岩陰	12	その他	不明	岩陰遺跡。堂宇・石仏群は平成20年度に本移設。	文献2
41	西宮遺跡	7	散布地	縄文・近世	平成20年度調査(事) 泥流埋没畑5区画以上、復旧溝10数本、ヤックラ、小屋と屋敷1棟を検出。	文献2.62
42	東宮遺跡	208	その他	近世	平成12年度調査(町)、7～9・19～21年度調査(事) 天明泥流で埋没した民家、それに伴う建物跡、畑跡等を検出。	文献4.22.49～51.61.62
43	川原湯中原Ⅰ遺跡	16	散布地	縄文	平成19年度調査(町) チャート片出土。	文献2.12 旧中原Ⅰ遺跡
44	石川原遺跡	17	散布地	縄文	平成20年度調査(事) 縄文時代中期後半～後期を中心とする拠点集落跡。	文献2.62 北入遺跡(No.20)と統合
45	川原湯中原Ⅱ遺跡	18	散布地	縄文	平成17年度調査(町)	文献2.10 旧中原Ⅱ遺跡
46	川原湯中原Ⅲ遺跡	19	散布地	縄文・平安	縄文中期：チャート片出土。	文献2 旧中原Ⅲ遺跡
47	西ノ上遺跡	212	その他	近世	平成18年度調査(町)、14年度調査(事)天明泥流に埋没した畑跡・道を検出。	文献11.24.56
48	金花山砦跡	207	城館跡	中世	平成12年度踏査(町・事) 明治期の「川原湯真図」に「トリデアト」の記載あり。	
49	川原湯勝沼遺跡	206	散布地 その他	縄文・平安・ 近世	平成9・15・16年度調査(事) 縄文時代晩期の埋蔵2基。平安時代住居跡3軒。天明泥流に埋没した畑跡。	文献24.26.51.57.58
50	上野Ⅰ遺跡	21	散布地	縄文・平安		文献2
51	上野Ⅱ遺跡	22	散布地	縄文・平安		文献2
52	横壁勝沼遺跡	23	集落跡 墓その他	縄文・弥生・ 平安・中世・ 近世	平成6・7年度調査(事) 縄文時代土坑数基。槍先形尖頭器1点表探。平安時代住居跡1軒検出。	文献1.2.22.48.49 『県遺跡地図』No.3118 旧勝沼遺跡(東平遺跡)
53	山根Ⅰ遺跡	26	散布地	平安		文献1.2 『県遺跡地図』No.3118 旧山根Ⅰ遺跡(中村遺跡)
54	横壁中村遺跡	24	集落跡 墓その他 その他	縄文・弥生・ 平安・中世・ 近世	平成8～18年度調査(事) 縄文時代中期後半～後期を中心とした拠点集落跡。平安時代住居跡も含めて250軒以上を検出。中近世掘立柱建物、礎石建物、土坑墓、塚など多数検出。	文献2.5.27.30.34.39.40. 46.47.50～60 旧上野Ⅲ遺跡
55	山根Ⅲ遺跡	29	集落跡	縄文・弥生・ 平安・近世	平成16・17年度調査(町)、10・13・18年度調査(事) 縄文時代中期後半住居跡3軒、土坑39基、中近世の溝1条ほか検出。	文献2.9.10.22.36.52.55.60
56	山根Ⅳ遺跡	30	散布地	縄文・平安	平成19年度調査(町) 縄文中期：チャート片出土。	文献2.12
57	西久保Ⅰ遺跡	31	集落跡	縄文・弥生・ 平安・中世・ 近世	平成6・10・12年度調査(事) 縄文時代中期末葉の敷石住居跡、水場遺構等を検出。	文献2.22.48.52.54
58	西久保Ⅱ遺跡	32	散布地	平安		文献2
59	西久保Ⅲ遺跡	33	散布地	不明		文献2
60	西久保Ⅳ遺跡	216	その他	近世	平成17年度調査(町)、12・21年度調査(事) 天明泥流に埋没した畑跡。泥流の天端を確認。	文献10.54
61	丸岩城跡	34	城館跡	中世	土塁や水場が遺存。	文献1.2.14.15
62	柳沢城跡	35	城館跡	旧石器・縄 文・中世	平成4・5年度調査(町) 中世：郭跡、堀切、土居、礎石、腰曲輪、石組遺構、溝、陶磁器、鉄製品、銅製品、石臼等を検出。	文献1.2.3.14.15.18
63	幸神遺跡	62	集落跡 その他	縄文・平安・ 近世	平成21年度調査(町)、8・9・14・17年度調査(事) 縄文時代中期中葉住居2軒、土坑、陥し穴。古代の可能性のある畑跡。	文献2.36.50.51.56.59
64	長野原一本松遺跡	63	集落跡	縄文・弥生・ 古墳・平安・ 中世・近世	平成6～20年度調査(事) 縄文中期後半～後期の住居跡を中心とする拠点集落跡。平安時代住居跡、中世掘立柱建物跡等多数検出。	文献1.2.21.35.38.42.45.48～ 62 旧一本松遺跡
65	尾坂遺跡	201	その他	近世	平成6・7・11・18～22年度調査(事) 天明泥流で埋没した民家と麻畑、溝等を検出。畑下から縄文時代後期土坑や平安時代住居跡検出。	文献22.48.49.53.60～62
66	久々戸遺跡	200	その他	縄文・近世	平成19年度調査(町)、9～12・14・15年度調査(事) 天明泥流で埋没した畑跡、建物跡を検出。縄文土器包含層。	文献12.20.23.24.48～ 54.56.57

(1) 旧石器時代

これまでのところ長野原町では旧石器時代に遡る遺跡は確認されていない。柳沢城跡(62)で遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが出土しているのみである。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間-草津黄色軽石層(As-YPk)が厚く堆積しており、発掘調査では発見されにくい状況がある。西吾妻地域はもとより吾妻郡内でも旧石器時代は高山村に所在する新田西沢遺跡(4)でしか確認されていないのが現状である。

(2) 縄文時代

縄文時代になると遺跡数も膨大となる。吾妻川沿岸の下位段丘面は低調だが主として中・上・最上位河岸段丘および丘陵部に集落が展開する。

①草創期～早期

現在のところ、長野原町で人々の生活が確認されているのは草創期末～早期初頭からである。該期の遺跡として石畑Ⅰ岩陰(36)がある。昭和53年に群馬県教育委員会により一部調査され、中期を除く草創期～晩期の土器片・獣骨・人骨などが出土している。特に草創期～早期の土器片には表裏縄文・押型文・撚糸文が認められる⁽⁵⁾。横壁勝沼遺跡(52)では草創期の槍形尖頭器が表採されている。近年、丘陵上での調査機会も増え、楡木Ⅱ遺跡(15)、立馬Ⅰ遺跡(2)、立馬Ⅲ遺跡(27)で早期の集落が検出されている。楡木Ⅱ遺跡では早期前半撚糸文期の住居跡が31軒検出され、遺構外で表裏縄文・押型文・沈線文・条痕文土器片も出土している。該期の住居跡検出数では県はもとより全国的にも有数である。また立馬Ⅰ遺跡では撚糸文期の住居跡の他、沈線文(田戸下層式)期の住居跡も検出され、遺構外では押型文・条痕文をはじめ晩期までの土器片が連綿と出土している。立馬Ⅲ遺跡では子母口式や稲荷台式、沈線文土器などの住居跡が検出されている。さらに同時期の遺物は、三平Ⅰ遺跡(30)、三平Ⅱ遺跡(31)、花畑遺跡(22)、幸神遺跡(63)、長野原一本松遺跡(64)、坪井遺跡などでも確認されている。それまでの岩陰での生活から早期前半撚糸文期になると丘陵上のオープンサイトでの集落に移行していくようである。また石畑Ⅰ岩陰に代表される岩陰遺跡は丘陵部の自然に迫り出した岩場を利用して居住・墓域とするものであるため、県内では分布・遺跡数ともに限定される。吾妻川流域はそのほとんどが河川や溪沢に沿う山岳傾斜地帯であることから岩陰遺跡の立地する条件を満たしているといえよう。岩陰遺跡は長野原町域で21ヶ所確認されており、その大半がこの東部地区に集中している。この岩陰遺跡の多さは本町の縄文時代遺跡の大きな特徴の一つでもある。

②前期

前期の遺跡も少ないが漸増の傾向にある。立地は丘陵上が多いが、河岸段丘へも集落が広がる傾向が見受けられる。前期前半の遺跡は東部地区より西部地区で顕著である。坪井遺跡で前期初頭(花積下層式期)の住居跡と土坑が検出され、土坑内で花積下層式と長野県で主体的な塚田式との共伴が確認された⁽⁶⁾。暮坪遺跡では前期前葉(二ツ木式期)の住居跡⁽⁷⁾、長畝Ⅱ遺跡では前期前葉(関山式期)の土坑と前期前葉(黒浜式期)の住居跡・土坑が検出されている⁽⁸⁾。東部地区では楡木Ⅱ遺跡(15)で前期前葉(黒浜式期)の住居跡が検出されている他、横壁中村遺跡(52)では遺構外で少量の破片が認められている。前期後半は楡木Ⅱ遺跡(15)と本遺跡で前期後葉(諸磯式期)の住居跡が、川原湯勝沼遺跡(49)と三平Ⅰ遺跡(30)で同時期土坑、立馬Ⅰ遺跡(2)で集石遺構が検出されている以外は遺構外の出土である。

③中期

中期の遺跡は他時期に比して最も多い。前半は未だ少なく、丘陵上に占地しているようである。後半になると河岸段丘の平場を中心として積極的な居住区域を展開している。中期前半の集落は近年丘陵上の遺跡で発見されはじめている。中期初頭(五領ヶ台式期)の遺跡は楡木Ⅱ遺跡(15)で住居跡3軒が確認されているのみである。中期前葉(阿玉台式期)の遺跡は立馬Ⅱ遺跡(26)で住居跡12軒・竪穴遺構7基、林中原Ⅰ遺跡(10)で住居跡が1軒、幸神遺跡(62)で土坑が検出されている。横壁中村遺跡では中期中葉(勝坂式期)の住居跡、西久保Ⅰ遺跡(57)では同時期の土坑が確認されている。中期中葉(焼町類型期)の遺跡は幸神遺跡(63)で焼町土器の深鉢を炉体土器とした住居跡、林中原Ⅱ遺跡(11)と横壁中村遺跡(54)では焼町土器を主体とする住居跡がそれぞれ1軒ずつ確認されている他、最近調査された上ノ平Ⅰ遺跡(32)では同時期の住居跡が12軒検出された。中期前半はその立地からか現時点では東部地区のみの検出である。中期後半になると列石を伴う拠点集落が吾妻川流域地帯に分布を広げて出現する。長野原一本松遺跡(64)、横壁中村遺跡(54)を筆頭として近年の調査により石川原遺跡(44)、林中原Ⅰ遺跡(10)、林中原Ⅱ遺跡(11)が新たに加わり、西部地区では坪井遺跡に代表される。遺跡を大規模に調査している前5者に共通するのは中期後半に引き続き、後期前半(～加曾利B式期)まで継続して集落が営まれていることである。また坪井遺跡は前2者に比して規模は小さいが、弧状石列1基、住居跡19軒(拡張住居含む)、土坑49基が検出されている⁽⁹⁾。土器は大きく4系統(①加曾利E式土器<北関東系>、②曾利・唐草文系土器<信州系>、③「郷土」式土器<①と②の融合型式>、④栃倉Ⅱ式土器<越後系>)が認められ、特に③の「郷土」式土器が該期の主体となる時期であり、環浅間山地域に分布し、小文化圏を形成していることが最近分かってきている⁽¹⁰⁾。この坪井遺跡出土土器の傾向は前4者出土土器、さらに県指定史跡「勘場木石器時代住居跡」出土土器にも看取される⁽¹¹⁾。その他、向原遺跡では中期末～後期初頭の敷石住居跡が検出されており、立地から拠点集落のひとつになる可能性が高い⁽¹²⁾。

④後期

後期の遺跡は規模は縮小するものの吾妻川流域の比較的広い範囲に分布する。ただし遺構の検出は後期前半までで後半は不明である。上記の中期後半の遺跡の他、西部地区では本町で初めて敷石住居跡を検出したクヌギⅡ遺跡⁽¹³⁾・向原遺跡⁽¹⁴⁾、滝原Ⅲ遺跡⁽¹⁵⁾、古屋敷遺跡⁽¹⁶⁾、東部地区では上原Ⅳ遺跡(9)、上ノ平Ⅰ遺跡(32)、林中原Ⅰ遺跡(10)に代表される。後期初頭(称名寺式期)～後期中葉(加曾利B式期)までの敷石住居跡、掘立柱建物跡は長野原一本松遺跡(64)、横壁中村遺跡(54)で多く検出されている。長野原一本松遺跡では壁に板材の痕跡を遺す柄鏡形敷石住居跡や方形周礫を明瞭に遺す柄鏡形敷石住居跡が確認されている。また横壁中村遺跡では主軸全長9mにも及ぶ大形の柄鏡形敷石住居跡や配石墓群が検出されている。その他、林中原Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡でも後期初頭～前葉(称名寺式期～堀之内式期)の敷石住居跡等が検出されている。後期後葉(高井東式期)の住居跡は横壁中村遺跡で3軒検出されているのみである。後期終末(安行Ⅰ・Ⅱ式期)に関しては横壁中村遺跡や立馬Ⅰ遺跡(2)で土器片が出土しているがいずれも遺構外である。

⑤晩期

晩期に関してはこれまで石畑Ⅰ岩陰(35)で土器片が出土している他、横壁中村遺跡(54)で晩期末葉(千網式併行)の包含層が確認されているだけであった。遺構の検出は晩期前半は依然ないものの後半(特に末葉～弥生中期)に関しては最近の調査で増えつつある。立馬Ⅰ遺跡(2)では晩期末葉の住居跡1軒、横壁中村遺跡(54)では晩期末葉の住居跡2軒、埋甕1基、上原Ⅳ遺跡(9)では土坑1基が検出されている。立馬Ⅰ遺跡では南信松本盆地に分布する女鳥羽川式土器が出土している。さらに川原湯勝沼遺跡(49)からは該期の土坑が数基検出され、その

中の1基は壺棺再葬墓であることが判明している。同一土坑に2個体が埋置されており、ひとつが中沢氏のいう「氷式突帯壺」⁽¹⁷⁾の上半部が逆位に、もう一方は浮線文系の半精製甕が正位の状態で出土している。この壺棺再葬墓は東日本でも最古級として注目されよう。その他、遺構外ではあるが久々戸遺跡(66)で氷式土器の浅鉢、向原遺跡で大洞A'式まで遡ると考えられる土器片も確認されている。

(3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は分布調査の時点で後期に属する3遺跡のみであったが、縄文時代晩期末葉から弥生中期前半までの資料が増えてきている。遺跡は丘陵上に立地する傾向が強く、縄文時代早期や中期前半と共通しているようである。立馬I遺跡(2)で中期後半の住居跡2軒と土器棺墓2基を含む土坑が数基、長野原一本松遺跡(63)では中期前半までと考えられる土坑1基、横壁中村遺跡(54)では埋甕(再葬墓か)1基が検出され、東海地方に分布する檜王式土器の甕が出土している。近年の調査で林中原II遺跡(11)では中期前半と考えられる住居跡4軒の他、前期末に遡る土坑墓(再葬墓か)が検出されている⁽¹⁸⁾。また遺物出土量が少なく、時期が判然としないものが多いが、坪井遺跡でも中期と考えられる土坑が1基、向原遺跡では前期に遡るものも含めて中期前半までの土坑が7基、三平I遺跡では前期末～中期前半の土坑が数基確認されている。下原遺跡(24)では集石遺構から中期前半を中心とした遺物が認められた。遺構外では外輪原I遺跡、上ノ平遺跡で中期前半までの資料が比較的まとまっている⁽¹⁹⁾。後期に関しては未だ少なく、石畑遺跡(34)で土坑1基が確認されているのみである。分布調査時に居家以岩陰群、寺久保遺跡、新田原I遺跡で土器片が表採されている他、立馬I遺跡(2)では遺構外で、二社平遺跡(38)周辺で後期～古墳時代前期に比定される土器片が表採されている。

(4) 古墳時代

これまで遺構外では他時期の遺物に混入するかたちで5世紀後半の土器片は坪井遺跡、長野原一本松遺跡(63)、二社平遺跡(38)などで確認されてきたが、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。平成15年度に最上位段丘面に立地する本遺跡で5世紀末～6世紀初頭の住居跡が1軒検出されたのが初例である。これに続いて平成16年度の調査で川原湯勝沼遺跡(49)で焼土を伴う土坑から同時期の土師器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡(24)でも同時期の住居跡1軒の他、土師器(片)がまとまって出土している。ともに吾妻川に直面した中位・下位段丘面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構の可能性が高い。これら3遺跡で検出された遺構は時期的にほぼ合致しており注目される。

また昭和13年に刊行された『上毛古墳綜覧』によれば、大津地区の「鉄塚」、与喜屋地区の「五輪塚」が前方後円墳と報告されている。また昭和11年刊行の『群馬県吾妻郡誌』では林地区の「御塚」が古墳とされ、合計3基が古墳とされている。「五輪塚」は現況で畑としてならされているが、「鉄塚」と「御塚」は円形の形状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、「てつか(てづか)」や林地区中棚にある「砂塚」に関しては『長野原町誌』で「宮内地区の「てづか」は鉄塚の訛音ではあるまいか。鉄塚の地名には城跡や屋敷跡などに多いといわれ、砂塚との対照がおもしろい」とあり、古墳という認識ではないが同じ林地区に少なくとも「塚」と付くものが3基あるということが注目される。いずれも古墳とするには根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

(5) 奈良・平安時代

奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾II遺跡のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。調査した遺跡を挙げれば、西部地区では、坪井遺跡、向原遺跡、長畝I遺跡、東部地区では本遺跡のほか立馬I遺跡(2)、東原I遺

跡(3)、楡木Ⅰ遺跡(14)、楡木Ⅱ遺跡(15)、花畑遺跡(22)、下原遺跡(24)、三平Ⅰ遺跡(30)、上ノ平Ⅰ遺跡(32)、川原湯勝沼遺跡(49)、横壁勝沼遺跡(52)、横壁中村遺跡(54)、長野原一本松遺跡(64)、尾坂遺跡(65)などから住居跡や掘立柱建物跡が検出され、該期集落として把握されている。この中で楡木Ⅱ遺跡では9世紀後半～10世紀前半の住居跡が38軒、竪穴遺構3基が検出され、「長」・「三家」の墨書土器と刻字「称」をもつ石製紡錘車、上ノ平Ⅰ遺跡では住居跡が20軒検出され、県内2例目となる皇朝十二銭「貞観永寶」が出土しており注目される。この他、試掘調査ではあるが、上原Ⅲ遺跡(8)では土坑が確認されたほか、羽口や鉄サイが出土しており製鉄関連遺構が存在することが想定される⁽²⁰⁾。

(6) 中世

吾妻流域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡、長野原城跡、丸岩城跡(60)、柳沢城跡(61)、金光山砦跡(48)などがあり、その他に林城跡、林の烽火台などといわれている箇所も存在する。これらはいずれも山城である。この中で丸岩城は「丸屋の要害」として『加沢記』にも記され、節理の発達した岩山の山頂に立地している。この丸岩城跡の北西麓に里城としての柳沢城跡が位置し、山城部と丘城部から成る本城を構えている。この柳沢城跡の一部が発掘調査されており、郭跡・堀切・土居・礎石建物・腰曲輪・石組遺構・溝・柵列などが検出されている。遺物のほとんどが礎石建物から出土しておりかつ豊富である。陶器・鉄製品・銅製品・石臼などが出土しており、特に陶器類は常滑系大甕・古瀬戸三耳壺・古瀬戸菊皿・珠洲系陶器甕の他、輸入陶磁器である景德鎮窯梅瓶などが準完形で出土している⁽²¹⁾。また近年林中原Ⅰ遺跡範囲内に林城跡が確認され、その範囲や構造が明らかになりつつある⁽²²⁾。金光山砦跡は明治期の絵図『川原湯真図』に「トリデアト」の記載があったことから平成12年度に町教委と事業団で踏査して堀切などを確認した。

近年は河岸段丘面の遺跡でも該期の遺構が検出されはじめており、集落として把握されるようになってきている。それらを列挙すると立馬Ⅰ遺跡(2)、楡木Ⅱ遺跡(15)、二反沢遺跡(16)、下原遺跡(24)、横壁中村遺跡(54)、西久保Ⅰ遺跡(57)、長野原一本松遺跡(64)となる。このうち、横壁中村遺跡と下原遺跡では石垣で区画された屋敷跡がそれぞれ1棟、長野原一本松遺跡では掘立柱建物群と竪穴状遺構、楡木Ⅱ遺跡でも掘立柱建物群、二反沢遺跡では区画跡のほか羽口や鉄サイなど製鉄関連遺構などが検出されており注目される。

(7) 近世

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも窺える。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに9万年前には黒斑山は活動をはじめており、2.4～2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は仏岩火山の活動期で浅間板鼻黄色軽石(As-YP)降下をもたらした。1万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により縄文時代中期の浅間D軽石(As-D)、4世紀の浅間C軽石(As-C)、天仁元(1108)年の浅間B軽石(As-B)、天明3(1783)年の浅間A軽石(As-A)という4つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古代の指標にもなっている。その中でも天明3(1783)年の噴火は軽石降下後に襲った泥流(鎌原火砕流)により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらした、有史以来の記録的火山災害として知られている。この泥流によって埋没した嬭恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺観音堂の石段」、「十日ノ窪」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが⁽²³⁾、翌年に本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるグランド造成中に日待供養塔・石臼・農具などが出土し、旧新井村跡の痕跡が確認された⁽²⁴⁾。平成14年度には町

立中央小学校の屋内体育館・プールの新築に伴って、当時の分限者小林助右衛門屋敷の一部が発見され、石垣・土蔵・礎石建物跡が調査されている⁽²⁵⁾。また平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・薬缶・鉄釜・石臼の他、「青面金剛塔」が泥流中から出土しており、旧長野原村が壊滅的状况であった一端を垣間見る発見があった⁽²⁶⁾。

近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを列挙すると、嶋木Ⅰ遺跡、下田遺跡(12)、下原遺跡(24)、中棚Ⅱ遺跡(25)、西宮遺跡(41)、東宮遺跡(42)、石川原遺跡(44)、西ノ上遺跡(47)、川原湯勝沼遺跡(49)、横壁勝沼遺跡(52)、横壁中村遺跡(54)、西久保Ⅳ遺跡(60)、尾坂遺跡(65)、久々戸遺跡(66)などがあり、現在も継続調査中である。これらの遺跡では主として畑跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物などが検出されている。現時点での成果として天明泥流に埋まった畑景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位畑」の構造、さらには泥流とその逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている⁽²⁷⁾。また東宮遺跡、西宮遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡などでは民家跡も検出されている。特に東宮遺跡は泥流に埋没した川原畑村を面的に調査した貴重な発見である。建物跡が14棟のほか畑20区画・道3条・溝6条・石垣10基・集石1基・土坑8基を検出した。通常遺存しない建築部材や漆器など植物遺存体の検出例が多く、当時の川原畑村の景観復原はもとより、近世建築学、民俗学など多角的な分析に寄与する部分が大きいと考えられる⁽²⁸⁾。さらに隣接する西宮遺跡では埋没畑とともに南北方向に10数本の復旧溝が検出され、被災後の復旧の痕跡が本町ではじめて確認された。

また推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。上原Ⅳ遺跡(9)、二反沢遺跡(16)、幸神遺跡(63)、長野原一本松遺跡(64)が該当する。このうち上原Ⅳ遺跡では溝(旧河川流路)を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。

第3節 既応の調査

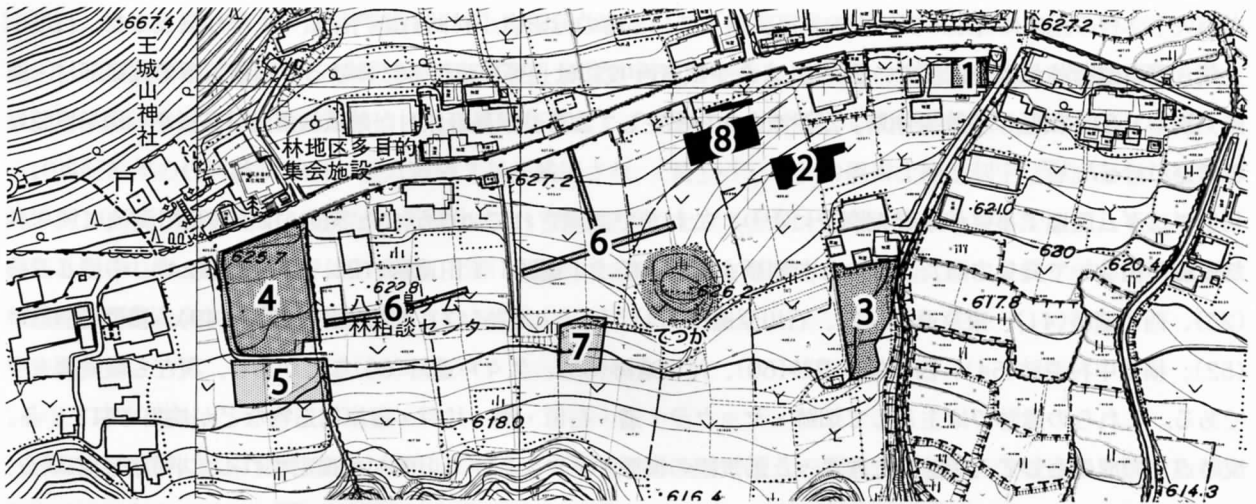
今回の調査は林宮原遺跡の第8次調査にあたる。本遺跡は長野原町教育委員会だけで平成23年4月現在で8次にわたる調査が実施されている(第3図・第2表)。

第1次調査は平成14年度に個人専用住宅建設に先立って実施された。トレンチ調査により縄文包含層が検出されたが、遺構を確認するには至らなかった。包含層中から磨製石斧が1点出土している。

第2次調査は平成15年度に個人専用住宅建設に先立って本調査が実施された。僅か205㎡の調査面積であったが、古墳時代後期の住居跡1軒、平安時代住居跡6軒(建て替え1軒含む)、土坑6基(陥し穴2基含む)が検出された。それまで古墳時代後期の遺物は遺構外出土遺物では散見されたが、住居跡の検出はこの調査が初めてであった。

第3次・第4次調査は平成16年度に個人住宅建設に先立って実施された。第3次調査ではトレンチ調査によりカマドの用材と考えられる平石が検出され、付近から土師器杯片が出土した。表土下90~100cmでの検出だったことから現状保存という措置をとった。第4次調査は同じくトレンチ調査であったが遺構・遺物を検出するには至らなかった。

第5次・第6次調査は平成18年度に実施された。第5次調査は林地区園芸施設整備事業(水特法事業)に先立って、第6次調査は町営土地改良事業(水特法事業)の事業選択前の埋蔵文化財の取り扱いを決定するために実施された。第5次調査はトレンチ調査により遺構・遺物を検出するには至らなかったが、第6次調査は同じくトレンチ調査により平安時代住居跡2軒のほか溝状遺構1条が検出され、農道を敷設する計画が確定した場合は本調査が必要と判断された。



第3図 調査地点位置図 (S = 1/2,500)

第2表 林宮原遺跡調査一覧

番号	調査年度	調査機関	原因種類	調査面積 (開発面積)	概要	備考
1	平成14年度	長野原町教育委員会	個人専用住宅 試掘調査	20㎡ (90.26㎡)	縄文包含層 遺構なし	文献6
2	平成15年度	"	個人専用住宅 本調査	205㎡ (452㎡)	古墳後期住居1・平安住居6・土坑6	文献7・8
3	平成16年度	"	個人専用住宅 試掘調査	41㎡ (398㎡)	平安住居?・土坑 現状保存	文献9
4	"	"	個人専用住宅 試掘調査	16.7㎡ (276.89㎡)	遺構なし	文献9
5	平成18年度	"	園芸施設 試掘調査	21㎡ (1331㎡)	遺構なし	文献11 未報告 水特法
6	"	"	土地改良事業 試掘調査	204㎡ (2210㎡)	平安住居2・溝1	文献11 未報告 水特法
7	平成19年度	"	個人墓地 試掘調査	20㎡ (162㎡)	遺構なし	文献12
8	平成20年度	"	仮設ゲートボール場 本調査	274㎡ (1576㎡)	平安住居8・土坑5	文献13 本報告

第7次調査は平成19年度に個人墓地造成に先立って実施されたが、トレンチ調査により顕著な遺構・遺物を検出するには至らなかった。

第4節 基本層序

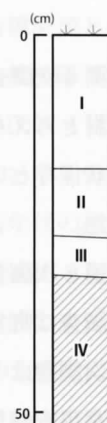
本遺跡の基本層序は第5図のA地点で確認した。発掘調査での所見と併せると以下ようになる。

第I層 暗灰褐色土

いわゆる表土で、上位は畑の耕作土である。拳大の礫を多く含むが、調査区東側では礫の混入は少ない。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

第II層 黒褐色土

黄褐色軽石を多く含んでおり、平安時代の遺構はこの層中を掘り込んで構築されている。締まりは強い。全体的に茶褐色を呈しているが上位は黒色味が強い。



第4図 基本土層 (S = 1/20)

第Ⅲ層 暗褐色土

いわゆる漸移層で、締まりは強い。

第Ⅳ層 暗黄褐色土

いわゆる関東ローム層でスコリアを少量含んでいる。粘性・締まりともに強い。

註

1. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
2. 主に下位・中位段丘で発見された天明泥流に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細については「群馬県文化財情報システム」Web版(<http://www2.wagamachi-guide.com/gunma/index.html>)で参照願いたい。本書では第2表および本章にできるだけ最新情報を記載した。
3. 長野原町教育委員会 2000~2011『町内遺跡Ⅰ~Ⅹ』
4. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『新田西沢遺跡 新田平林遺跡』
5. 中隆之 1979『石畑遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
笠懸野岩宿文化資料館 2000『第30回企画展 利根川流域の縄文草創期』
原田昌幸2007『日本の美術 No495 縄文土器 草創期 早期』至文堂
6. 長野原町教育委員会 2000『坪井遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第7集
笠懸野岩宿文化資料館 2004『第39回企画展 底の尖った土器』
7. 長野原町教育委員会 2001『暮坪遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第8集
8. 長野原町教育委員会 1992『長畝Ⅱ遺跡 坪井遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第3集
9. 註6と同じ。
10. この傾向は中期中葉(焼町土器)から強く窺うことができる。註6で触れているがそれ以後も何度か取り上げられている。
長野原町教育委員会 2003『町内遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第10集
群馬県立博物館 2004『第77回企画展 新発見考古速報展 群馬発掘情報 石室の入り口を通り抜けると・・・』
関根慎二 2008『浅間山を廻る縄文土器』『研究紀要26』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
11. 群馬県 1988『群馬県史』資料編1
長野原町教育委員会 1989『長野原町の文化財』
上毛新聞社 1999『群馬県遺跡大辞典』
群馬県教育委員会 2001『群馬の史跡(原始古代編)』
12. 長野原町教育委員会 1995『向原遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第5集
13. 長野原町教育委員会 1990『クスギⅡ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第2集
笠懸野岩宿文化資料館 1999『第25回企画展 群馬の注口土器展』
14. 註12と同じ。
15. 長野原町教育委員会 1998『滝原Ⅲ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第6集
16. 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
17. 中沢道彦 1998『「氷1式」の細分と構造に関する試論』『長野県小諸市氷遺跡発掘調査資料図譜』第三冊 氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
18. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による平成21年度の調査で検出された。また同じ時期に長野原町教育委員会でも隣接地を調査した際、弥生時代中期前半を中心とした竪穴状遺構1基のほか数基の土坑が検出された。
長野原町教育委員会 2011『町内遺跡Ⅹ』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集
19. 富田孝彦 2000『外輪原Ⅰ遺跡出土の弥生中期土器』『群馬県考古学手帳』10
20. 平成18年度に実施した町営林土地改良事業に伴う試掘調査で、この試掘結果をもとにほ区内の埋蔵文化財の取り扱いや発掘調査区域を確定していった。平成23年度~26年度の4年間で発掘調査を実施中である。
21. 長野原町教育委員会 1995『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
かみつけの里博物館 2000『第6回特別展 鍋について考える』
22. 未報告。概要は以下に詳しい。
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『遺跡は今』第16号
2010『遺跡は今』第18号

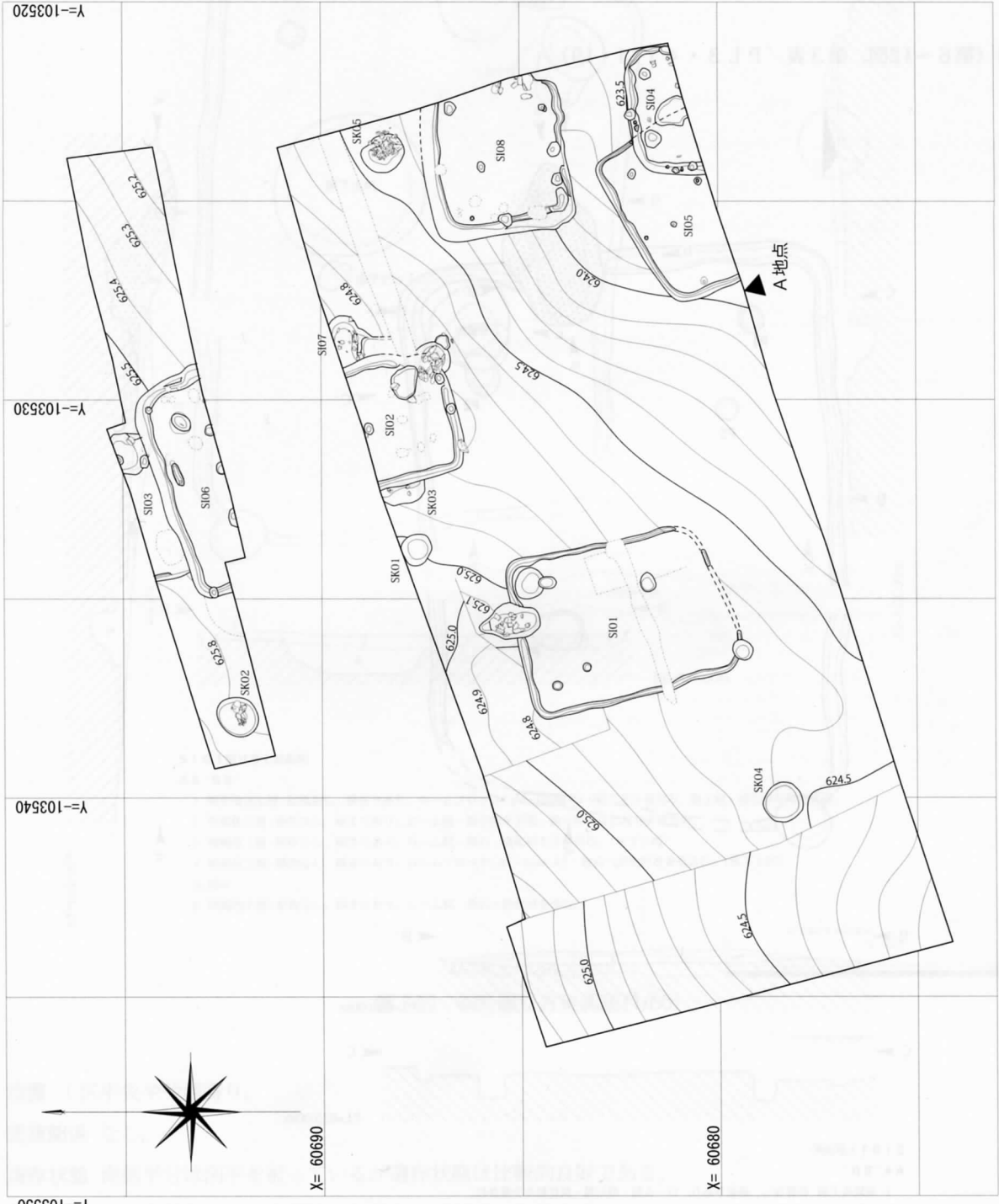
23. 嬭恋村教育委員会 1981『鎌原遺跡発掘調査概報 浅間山噴火による埋没村落の研究』
1994『埋没村落 鎌原遺跡発掘調査概報(よみがえる延命寺)』
24. 長野原町教育委員会 1989『長野原町の文化財』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
群馬県立歴史博物館 1995『第52回特別展 天明の浅間焼け』
25. 長野原町教育委員会 2005『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第12集
かみつけの里博物館 2007『第16回特別展 江戸時代、浅間山大噴火』
黒澤照弘・大西雅広 2009「茨城県、栃木県、群馬県内の江戸後期における生産と流通」『第19回九州陶磁器学会 江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 (関東・東北・北海道編)』
26. 未報告。水特法関連事業に関しては別稿により報告する予定である。なお、「青面金剛塔」は雲林寺参道に安置してある。
27. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2003『久々戸遺跡・中棚遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
28. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『遺跡は今』第17号
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2011『東宮遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第34集

参考文献 (第1・2表の文献番号に対応)

1. 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
2. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡-町内遺跡詳細分布調査-』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
3. 長野原町教育委員会 1995『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
4. 長野原町教育委員会 2002『町内遺跡Ⅰ』長野原町埋蔵文化財調査報告第9集
5. 長野原町教育委員会 2003『町内遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第10集
6. 長野原町教育委員会 2003『町内遺跡Ⅲ』長野原町埋蔵文化財調査報告第11集
7. 長野原町教育委員会 2004『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
8. 長野原町教育委員会 2004『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
9. 長野原町教育委員会 2005『町内遺跡Ⅴ』長野原町埋蔵文化財調査報告第15集
10. 長野原町教育委員会 2006『町内遺跡Ⅵ』長野原町埋蔵文化財調査報告第16集
11. 長野原町教育委員会 2007『町内遺跡Ⅶ』長野原町埋蔵文化財調査報告第17集
12. 長野原町教育委員会 2009『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集
13. 長野原町教育委員会 2010『町内遺跡Ⅸ』長野原町埋蔵文化財調査報告第19集
14. 長野原町教育委員会 2010『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第20集
15. 長野原町教育委員会 2011『町内遺跡Ⅹ』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集
16. 小池富治郎編 1936『吾妻郡誌』吾妻教育学会
17. 山崎一・山口武夫 1972『吾妻郡城史』
18. 巾隆之 1979『石畑遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
19. 群馬県 1988『群馬県史』資料編1
20. 上毛新聞社 1999『群馬県遺跡大辞典』
21. 群馬大学教育学部編 2004『尾崎喜左雄博士 調査収集考古遺物・調査資料目録』雄山閣
22. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『長野原久々戸遺跡』
23. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002『長野原一本松遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
24. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
25. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
26. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2004『久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

27. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005 『横壁中村遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
28. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005 『川原湯勝沼遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
29. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 『横壁中村遺跡(3)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
30. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 『立馬Ⅱ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
31. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 『上郷B遺跡 廣石A遺跡 二反沢遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
32. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 『横壁中村遺跡(4)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
33. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 『立馬Ⅰ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
34. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007 『下原遺跡Ⅱ』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
35. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007 『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
36. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007 『横壁中村遺跡(5)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
37. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007 『長野原一本松遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
38. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 『幸神遺跡・上原Ⅳ遺跡・山根Ⅲ遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
39. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 『榎木Ⅱ遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
40. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 『長野原一本松遺跡(3)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第19集
41. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 『横壁中村遺跡(6)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第20集
42. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 『横壁中村遺跡(7)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
43. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 『上ノ平Ⅰ遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第23集
44. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 『長野原一本松遺跡(4)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
45. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009 『立馬Ⅲ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第26集
46. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009 『榎木Ⅱ遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27集
47. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009 『長野原一本松遺跡(5)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第28集
48. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009 『横壁中村遺跡(8)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第29集
49. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009 『横壁中村遺跡(9)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第30集
50. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2010 『横壁中村遺跡(10)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第31集

51. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2010『横壁中村遺跡(11)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第32集
52. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2010『東原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第33集
53. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2011『東宮遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
54. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995『年報14』
55. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996『年報15』
56. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『年報16』
57. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『年報17』
58. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『年報18』
59. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000『年報19』
60. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001『年報20』
61. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『年報21』
62. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『年報22』
63. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『年報23』
64. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005『年報24』
65. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006『年報25』
66. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『年報26』
67. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『年報27』
68. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『年報28』
69. (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『年報29』

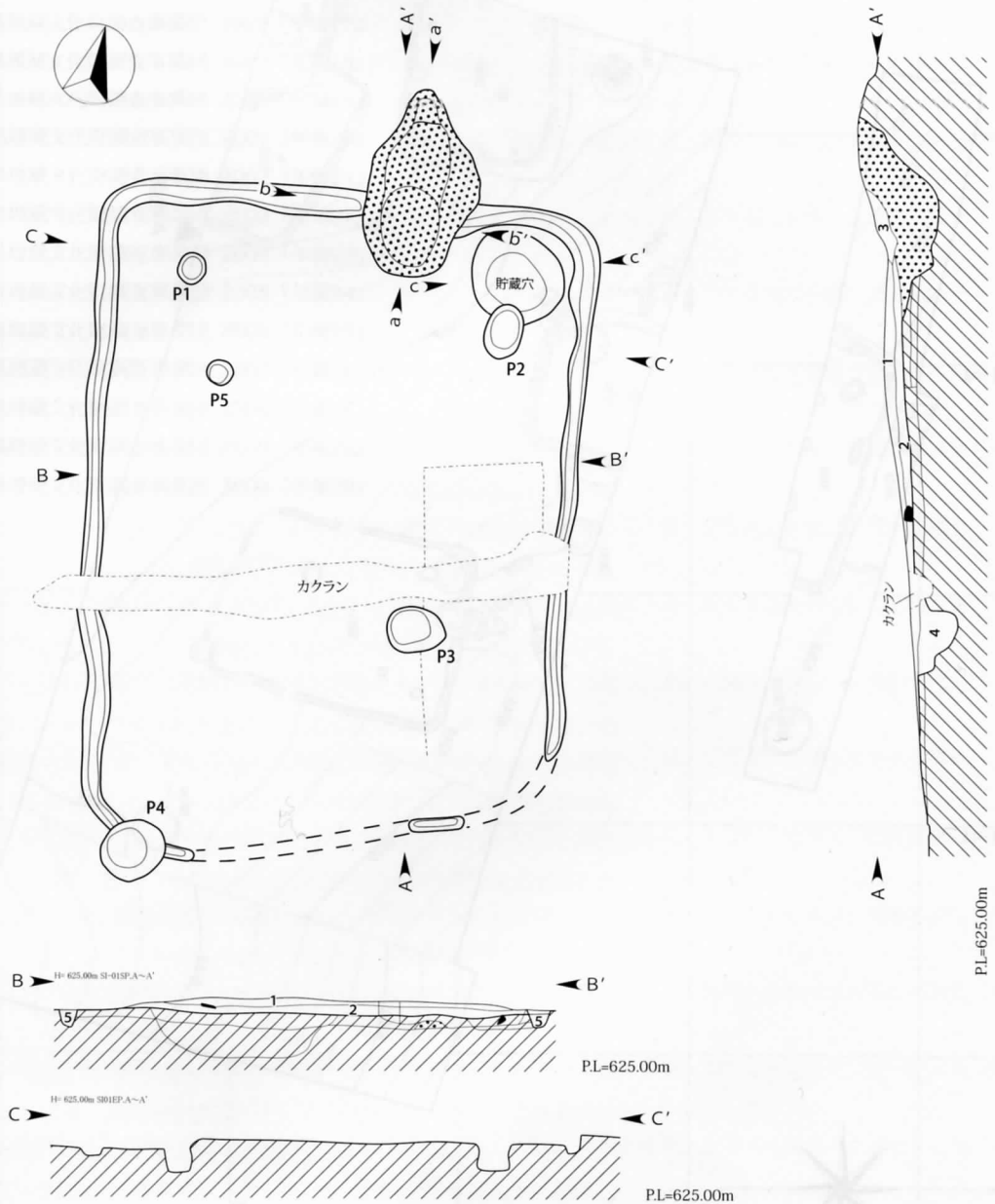


第5図 調査区全体図 (S=1/160)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 竪穴式住居

SI01 (第6~12図、第3表/PL 3・4・14・19)

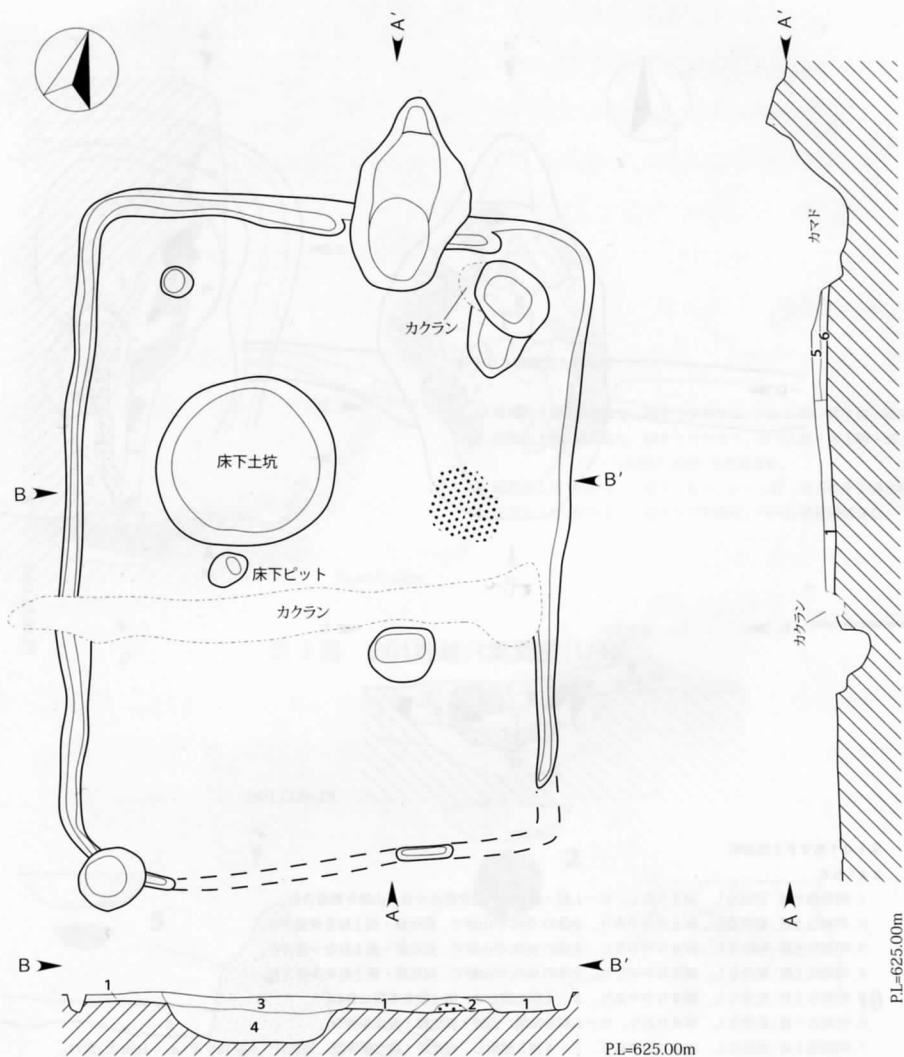


SI01土層説明

AA'BB'

1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒・炭化粒を少量含む。
2. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒・焼土粒・炭化粒を微量含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒・軽石粒を微量、炭化粒・焼土粒を含む。
3. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒・ロームブロック(φ~3cm大)を多量、軽石粒を少量含む。
4. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒・ロームブロック(φ~1cm大)を含み、軽石粒を少量含む。P3覆土。
5. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒・ロームブロック(φ~1cm大)・軽石粒を少量含む。

第6図 SI01実測図(1/60)



SI01掘り方土層説明

AA'BB'

1. 暗茶褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ロームブロック(φ~1mm大)・軽石を少量含み、焼土粒・炭化材を微量含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を少量、焼土粒・炭化材を多量含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石・炭化材を少量含む。(床下土坑)
4. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ロームブロック(φ~3cm大)・軽石・炭化材を多量含む。(床下土坑)
5. 貼床
6. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石・炭化材を含む。

第7図 SI01掘り方実測図(1/60)

位置 1区中央やや西寄り。

重複関係 なし。

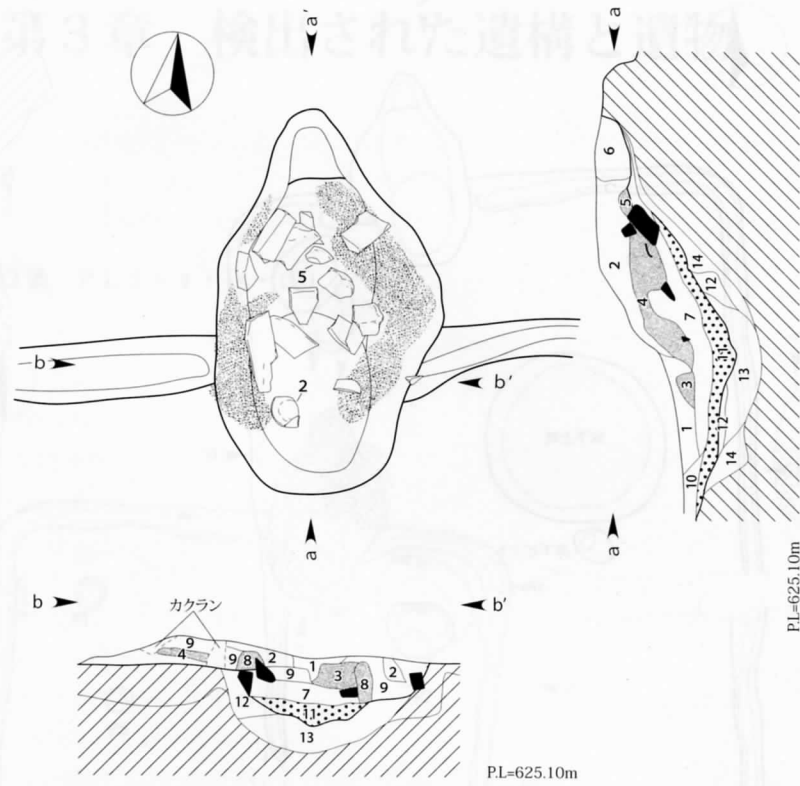
遺存状態 南側半分は削平を被っているが遺存状態は比較的良好である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 隅丸長方形を呈しているが南辺は北辺に平行ではない。規模は主軸5.58m、副軸4.1m、確認面からの深さは最深28cm、床面積18.1㎡を測る。

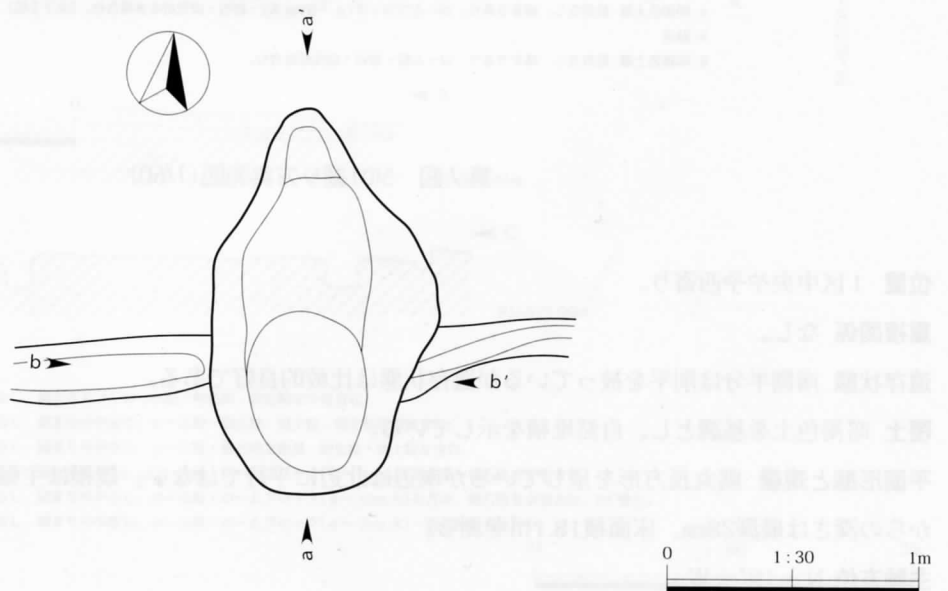
主軸方位 N-19°-W。

床面 貼床式で北側から南側へ傾斜している。特にカマドの前面で強く締まっている。

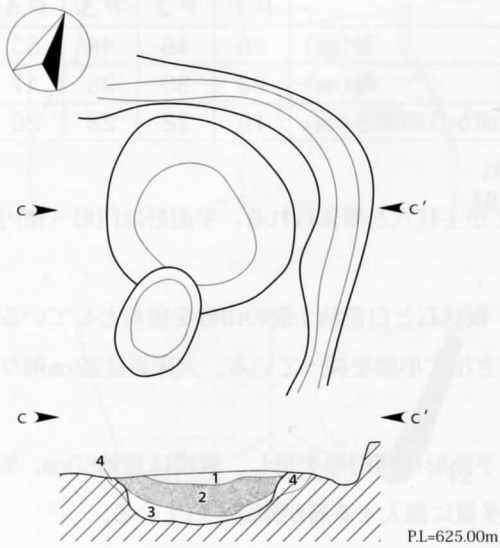


S101カマド土層説明
aa' bb'

1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりなし。ローム粒・焼土粒・炭化粒を少量、山砂を微量含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。全体の50%が山砂で、炭化粒・焼土粒を微量含む。
3. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。全体の80%が山砂で、炭化粒・焼土粒を少量含む。
4. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。全体の90%が山砂で、炭化粒・焼土粒を少量含む。
5. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。3・4層と同じで、焼土粒を多量に含む。
6. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を微量、山砂・炭化粒・焼土を含む。
7. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。3・4層と類似し、炭化粒・焼土を少量、被熱ロームブロック(φ~1cm大)含む。
8. 白色粘土層: 粘性なし、締まりあり。カマド袖部。
9. 明褐色土層: 粘性なし、締まりなし。山砂を多量、炭化粒を含み、焼土を少量含む。
10. 粘土
11. 焼土層: 粘性なし、締まりややあり。
12. 黒褐色土層: 粘性なし、締まりあり。焼土・被熱ロームブロックを微量含む。
13. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・ブロック(φ~1cm大)からなる。焼土を少量含む砂っぽい層。
14. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒・ブロック(φ~1cm大)を多量含む。



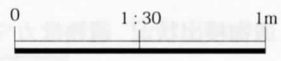
第8図 S101カマド実測図(1/30)



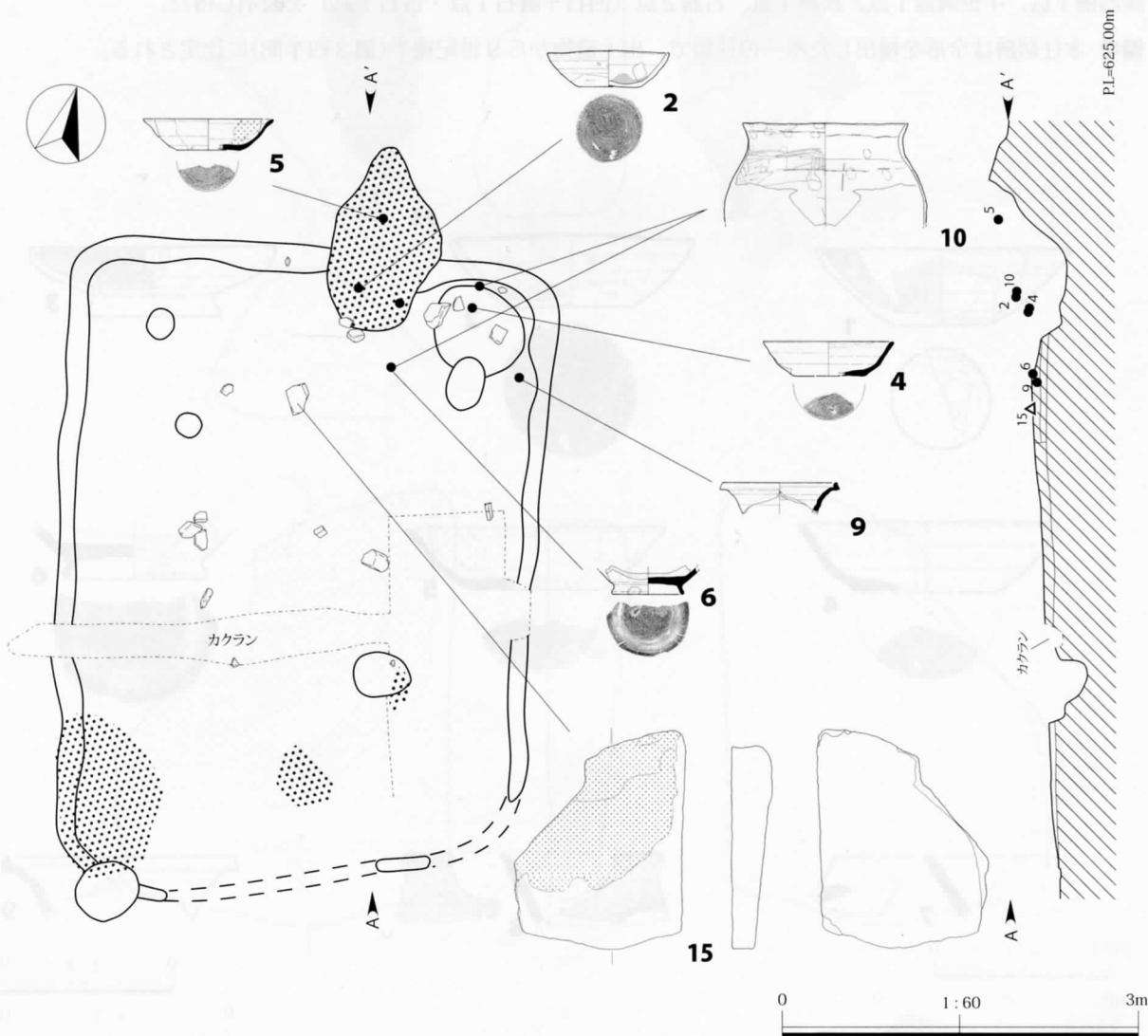
SI01貯蔵穴土層説明

c c'

1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒・焼土粒・焼土ブロックを少量含む
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・焼土粒・焼土ブロック(φ~1cm大)・白色粒土(山砂)を多量含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を少量含む。
4. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を微量含む。



第9図 SI01貯蔵穴実測図(1/30)



第10図 SI01遺物出土状況図(1/60)

壁・壁溝 壁は北壁東側半分および東壁北側半分で遺存しており、壁高は北壁で20cm、東壁で10cmを測り、やや外傾して立ち上がっている。壁溝は削平されている南辺で途切れるがほぼ全周して認められている。溝幅は12~25cm、床面からの深さ4~13cmを測る。

第3表 SI01柱穴計測表

		P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
長	軸(cm)	26	46	48	55	22
短	軸(cm)	23	30	36	47	20
	床面からの深さ(cm)	19	22	28	26	16

柱穴 全体でP 1~P 5まで検出されているが、P 1・P 2が主柱穴と考えられる。平面形は円形~楕円形を基調とする。それぞれの規模を以下に示す。

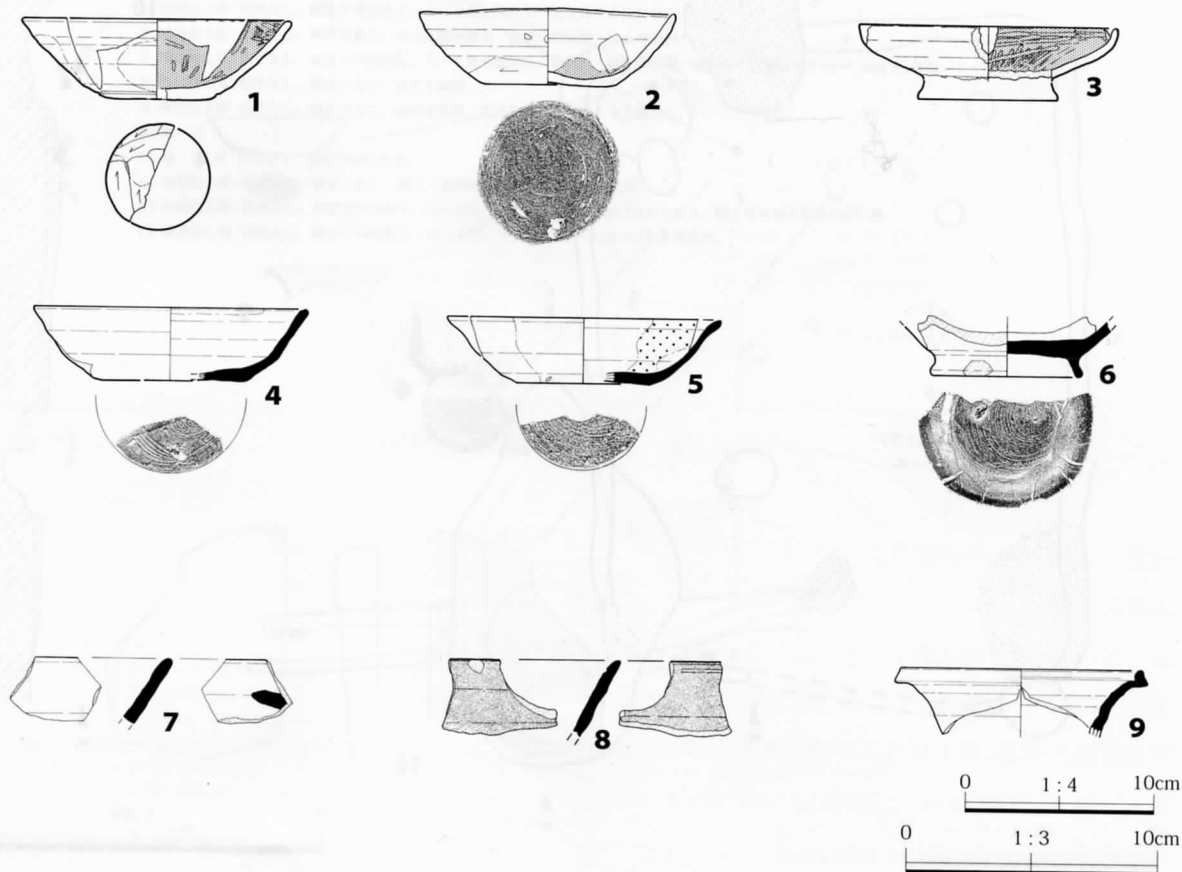
カマド 北壁中央東寄りに位置し、遺存状態は良好である。板状石と白色粘土混の山砂を用材としている。規模は全長156cm、最大幅94cmを測る。煙道部は壁面から88cm突き出す形態を採っている。火床面は22cm掘り込まれ約10cmの厚さを有している。

その他の施設 北東コーナーに貯蔵穴が確認されている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸80cm、短軸75cm、床面からの深さ42cmを測る。覆土に山砂や焼土ブロックを多量に混入する層が確認されている。

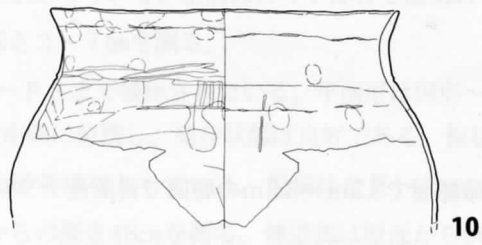
遺物検出状況 遺物はカマドおよび貯蔵穴付近で集中して検出された。また床下から土抗およびピットが1基ずつ検出された。

遺物 土師器4点(内黒杯2点・内黒皿1点・甕1点)、須恵器6点(杯3点・碗1点・壺1点・甌?1点)、灰釉陶器碗1点、中世陶器1点、鉄滓1点、石器2点(凹石+磨石1点・台石1点)を図示し得た。

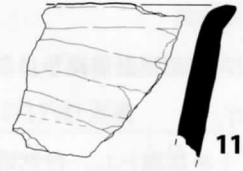
備考 本住居跡は全形を検出した唯一の住居で、出土遺物から9世紀後半(第3四半期)に比定される。



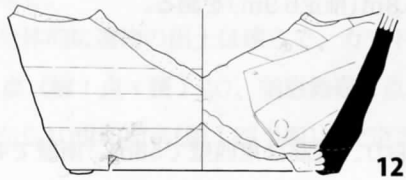
第11図 SI01出土遺物実測図1



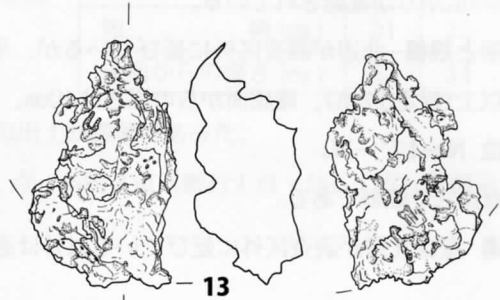
10



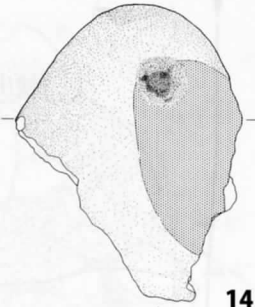
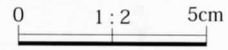
11



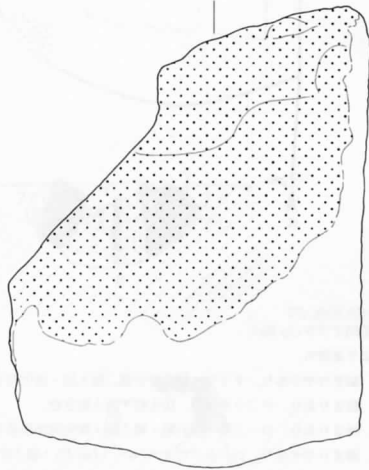
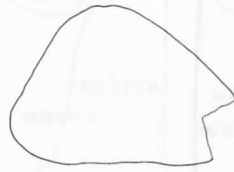
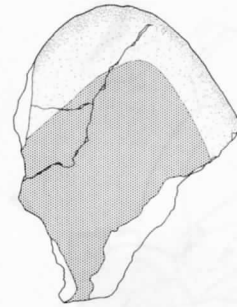
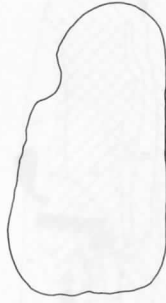
12



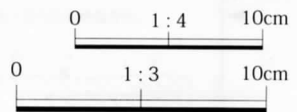
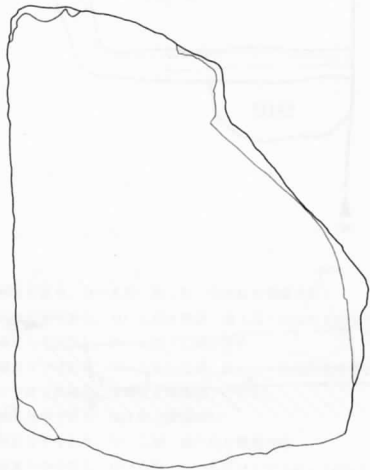
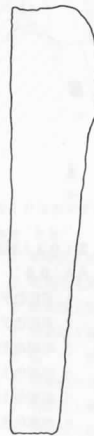
13



14



15



第 12 図 SI01 出土遺物実測図 2

SI02 (第13~15図、第4表/PL5・6・15)

位置 2区中央北側

重複関係 SI07・SK03と重複し、これを切っている。

遺存状態 良好。

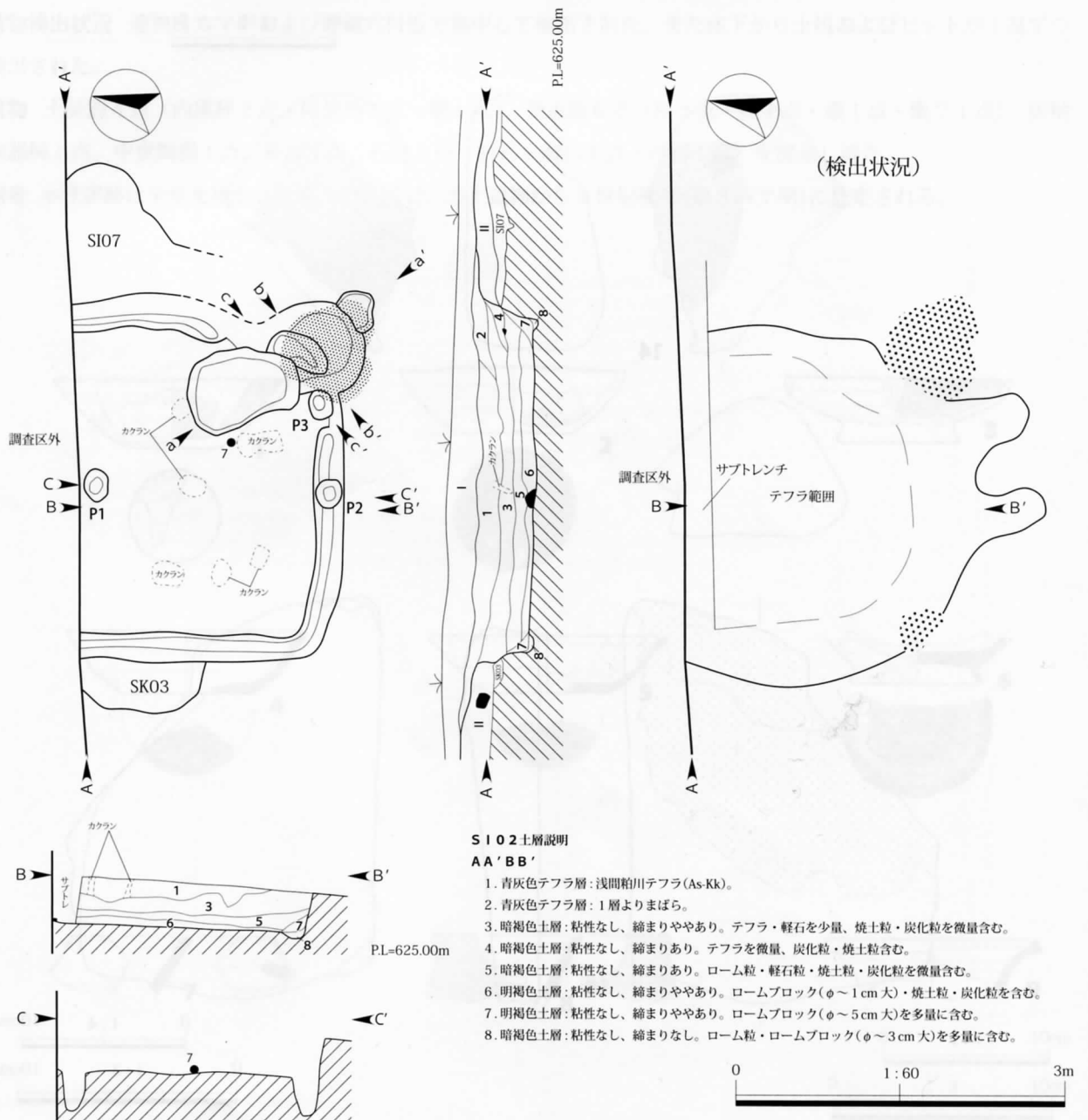
覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。遺構確認面で3.3m×3.3mの範囲で青灰色テフラ(浅間粕川テフラ)の広がり確認されている。

平面形態と規模 北辺が調査区外に伸びているが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。主軸3.42m、副軸2.44m以上(推定3.2m)、確認面からの深さは40cm、床面積5.8㎡(推定6.9㎡)を測る。

主軸方位 N-17°-W。

床面 直床式で軟弱である。

壁・壁溝 壁は北壁が調査区外に伸びている以外は遺存しており、壁高は東西壁で58cm、南壁で40cmを測り、外



第13図 SI02実測図(1/60)

傾して立ち上がっている。壁溝はカマド部分で途切れるが、未検出の北壁以外では認められ、溝幅12~22cm、床面からの深さ3~7cmを測る。

柱穴 P1~P3まで検出されている。平面形は円形~楕円形を基調とする。それぞれの規模を以下に示す。

カマド 東南隅に位置し、遺存状態は良好である。板状石と白色粘土混の山砂を用材としている。規模は全長142cm、最大幅98cm、床面からの深さ48cmを測る。煙道部は壁面から90cm突き出す形態を採っている。火床面は10cmの厚さを有している。

その他の施設 なし。

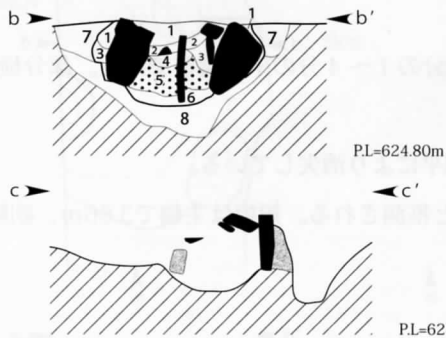
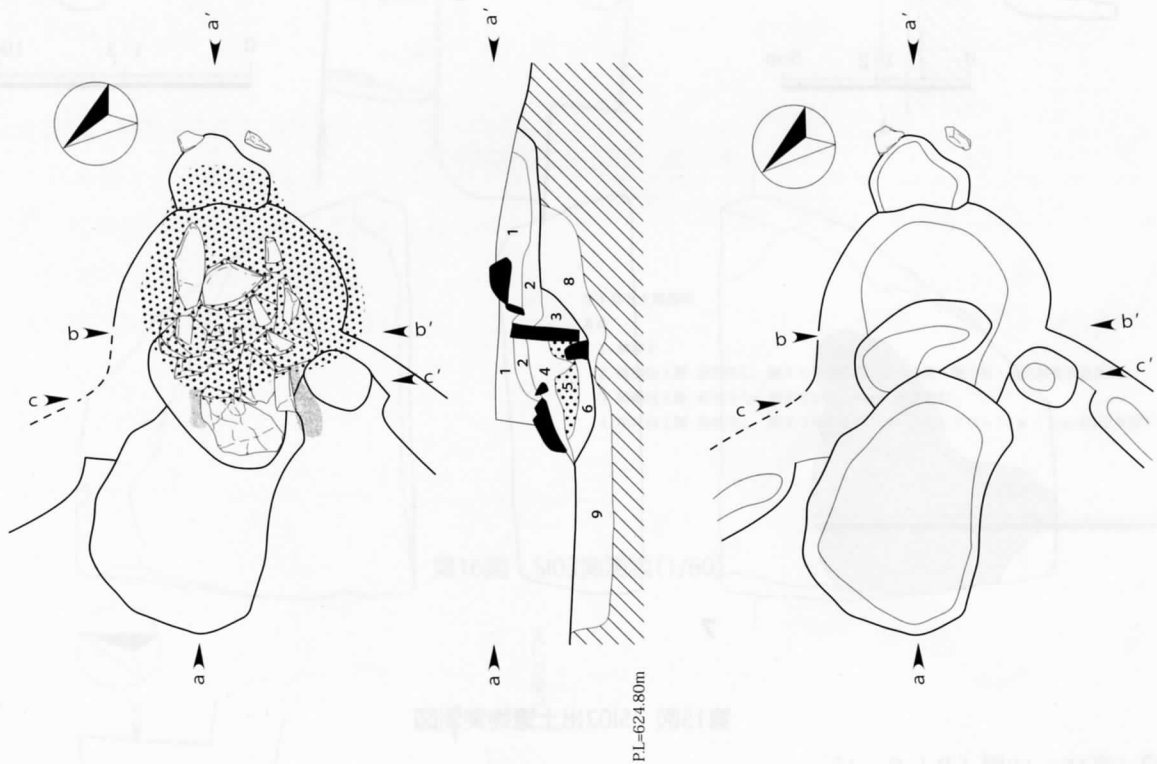
遺物検出状況 全体的に遺物の出土は疎らで、カマド付近での出土が顕著であった。

遺物 土師器2点(椀1点・甕1点)、須恵器壺2点、鉄滓1点、石器2点(磨石1点・台石1点)を図示し得た。

備考 出土遺物から10世紀前半(第1四半期)に比定される。

第4表 SI02柱穴計測表

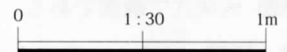
	P1	P2	P3
長軸 (cm)	30	27	27
短軸 (cm)	21	22	25
床面からの深さ (cm)	27	34	14



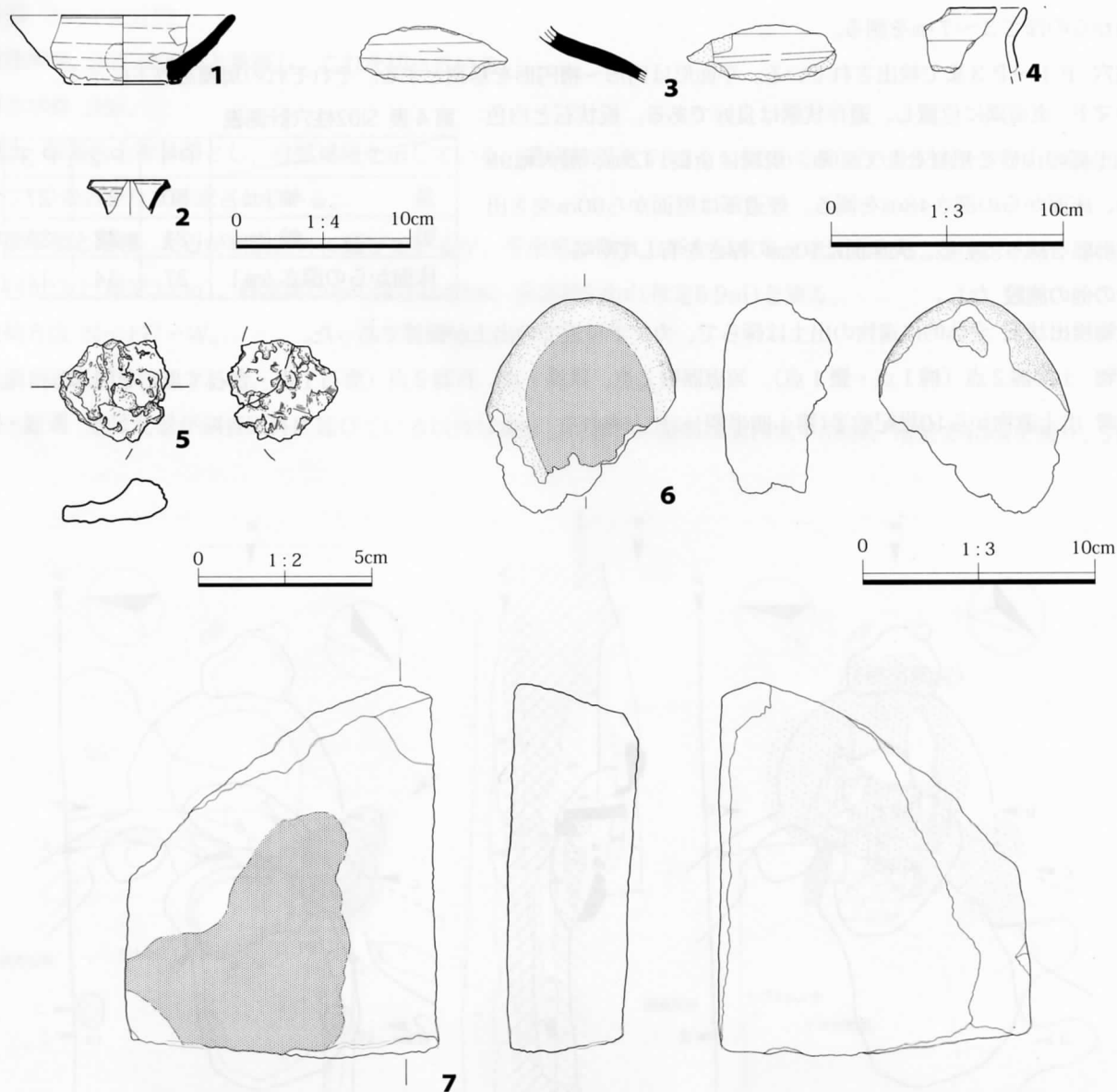
SI02カマド土層説明

aa' bb'

1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・焼土粒・炭化粒を微量含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を微量、焼土粒・炭化粒を少量含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒・山砂を含む。
4. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒を少量、焼土粒・炭化粒を多量含む。
5. 焼土層: 上層は山砂が主体で黄褐色。下層ほど暗褐色土を含む。
6. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。焼土粒を微量含む。
7. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・焼土粒を微量含む。
8. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒・ロームブロック(φ~1cm大)を少量含む。
9. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。ローム粒・炭化粒を微量含む。



第14図 SI02カマド実測図(1/30)



第15図 SI02出土遺物実測図

SI03 (第16~18図/P L 6・15)

位置 1区中央。

重複関係 SI06と重複し、これに切られている。

遺存状態 北側は調査区外、南側はSI06に切られていて全体の3分の1~4分の1の遺存である。部分検出で遺存状態は不良であるがカマド部分が遺存している。

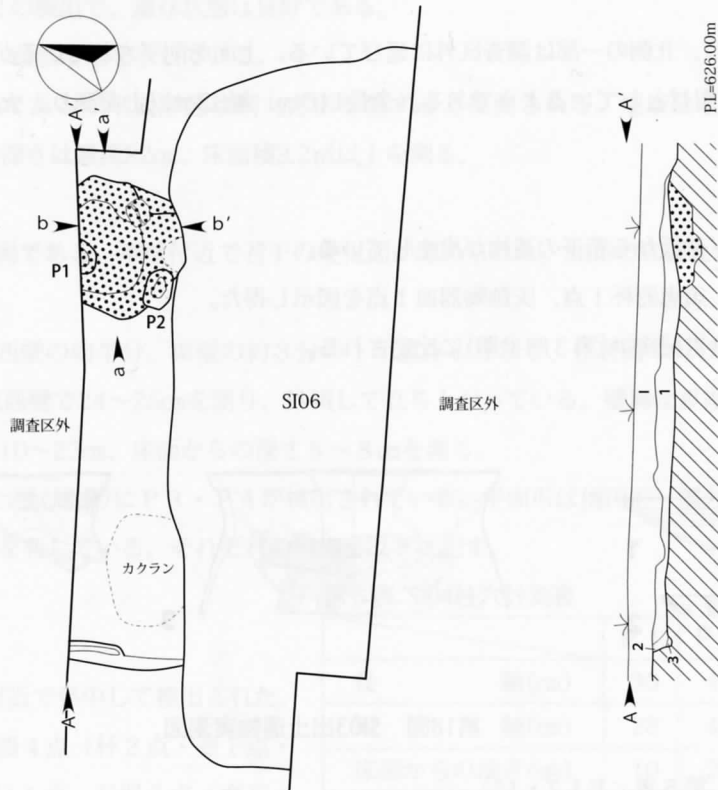
覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示しているが覆土上面は削平により消失している。

平面形態と規模 部分検出であるが平面形態は隅丸方形を呈すると推測される。規模は主軸で3.66m、副軸で0.7~0.9m、確認面からの深さは32cm、床面積2.6㎡以上を測る。

主軸方位 N-72°-E。

床面 直床式で軟弱である。SI06の床面との比高差は+35~39cmを測る。

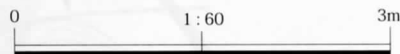
壁・壁溝 西壁の一部とカマド煙道部が遺存しているのみである。壁高は西壁で15cmを測り、外傾して立ち上がっている。壁溝は西壁の一部に認められ、溝幅8cm、床面からの深さ3~4cmを測る。



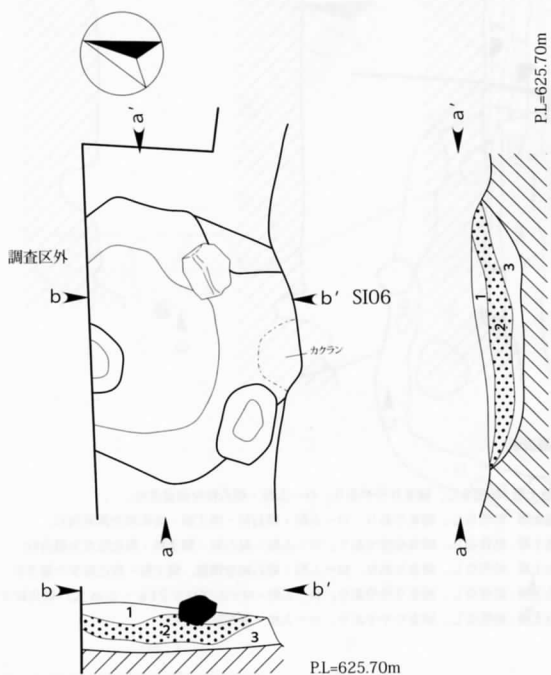
SI03 土層説明

AA'

1. 耕作土
2. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・焼土粒・炭化材を少量含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒を含む。
4. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒とブロック(φ~1cm大)を多量に含む。



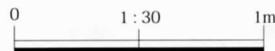
第16図 SI03実測図(1/60)



SI03カマド土層説明

aa' bb'

1. 明褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・焼土粒・炭化材・山砂を少量含む。
2. 焼土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・炭化材・山砂・焼土粒を多量に含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。焼土粒・山砂を微量含む。



第17図 SI03カマド実測図(1/30)

柱穴 不明。

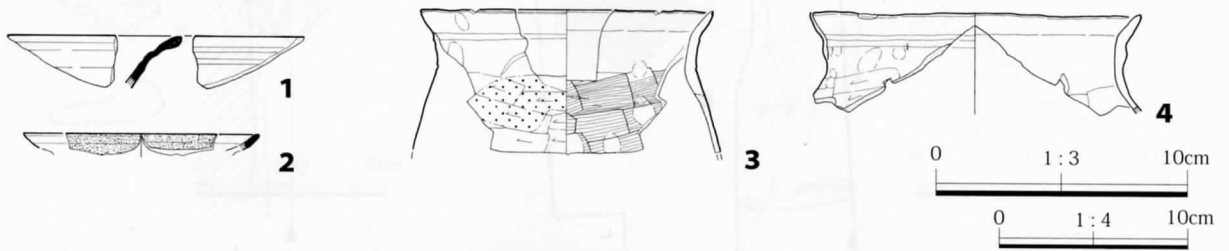
カマド 東壁に位置し、北側の一部は調査区外に延びている。上面を削平されているが他の住居と同様に板状石と白色粘土混の山砂を用材としているようである。全長110cm、幅82cm以上を測り、火床面は10cmの厚さを有している。

その他の施設 なし。

遺物検出状況 カマド付近から若干の遺物が出土している。

遺物 土師器甕2点、須恵器杯1点、灰釉陶器皿1点を図示し得た。

備考 出土遺物から9世紀後半(第3四半期)に比定される。

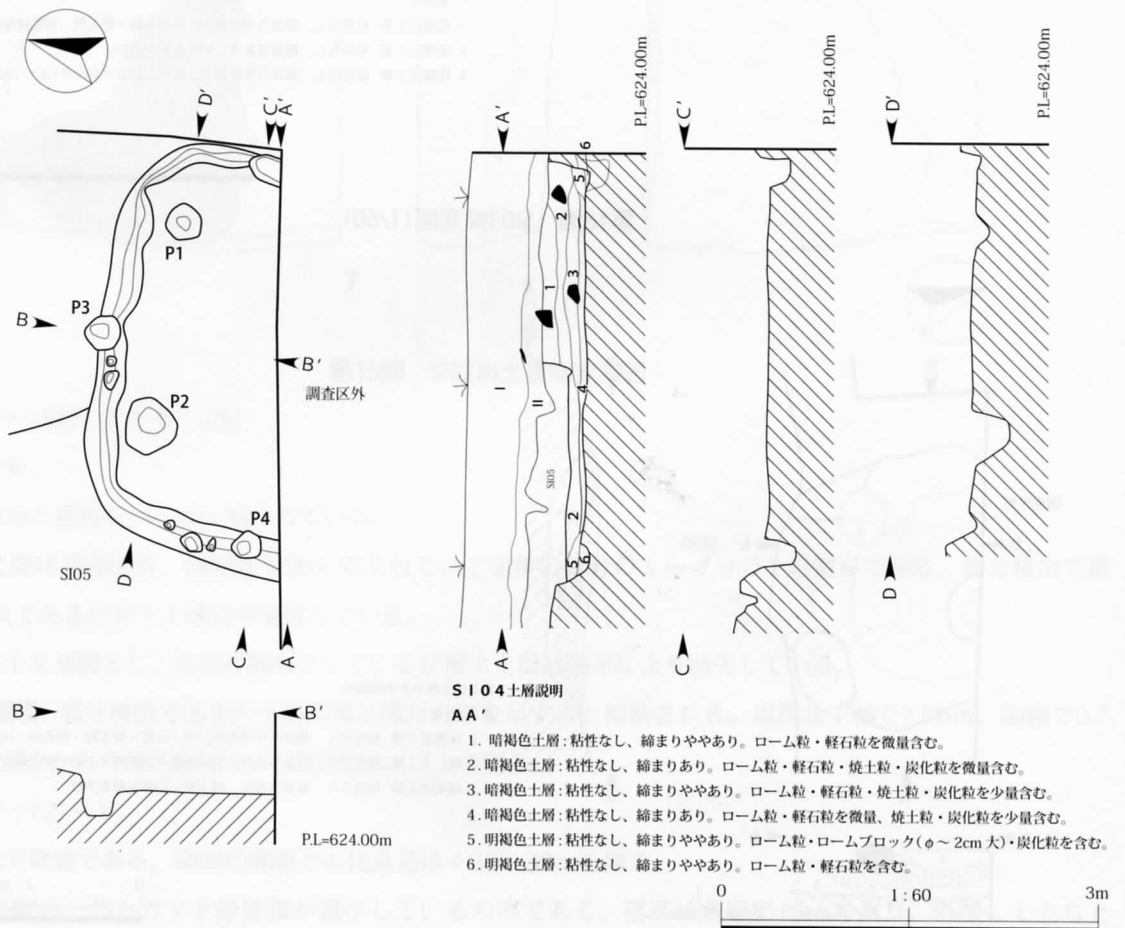


第18図 SI03出土遺物実測図

SI04 (第19~22図、第5表/P L 7・15)

位置 2区南東隅。

重複関係 SI05と重複し、これに切られている。



第19図 SI04実測図(1/60)

遺存状態 全体の約5分の2の検出で、遺存状態は良好である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 部分検出であるが平面形態は隅丸方形を呈すると推測される。規模は主軸で3.24m、副軸で1.42m以上、確認面からの深さは最深22cm、床面積3.2㎡以上を測る。

主軸方位 N-72°-E。

床面 直床式で全体的に軟弱である。東壁付近で若干の硬化面が認められた。SI05の床面との比高差は-10~37cmを測る。

壁・壁溝 壁は北壁のほか西壁の約半分、東壁の約3分の1が遺存しており、住居南半分は調査区外へ延びている。壁高は北壁で20cm、東西壁で24~25cmを測り、外傾して立ち上がっている。壁溝は重複部以外の検出された壁に沿って認められ、溝幅10~23cm、床面からの深さ5~8cmを測る。

柱穴 床面上にP1・P2、壁(周溝)にP3・P4が検出されている。平面形は楕円形~隅丸長形を基調とし、いずれも主柱穴といえる深さを有している。それぞれの規模を以下に記す。

カマド 未検出である。

その他の施設 なし。

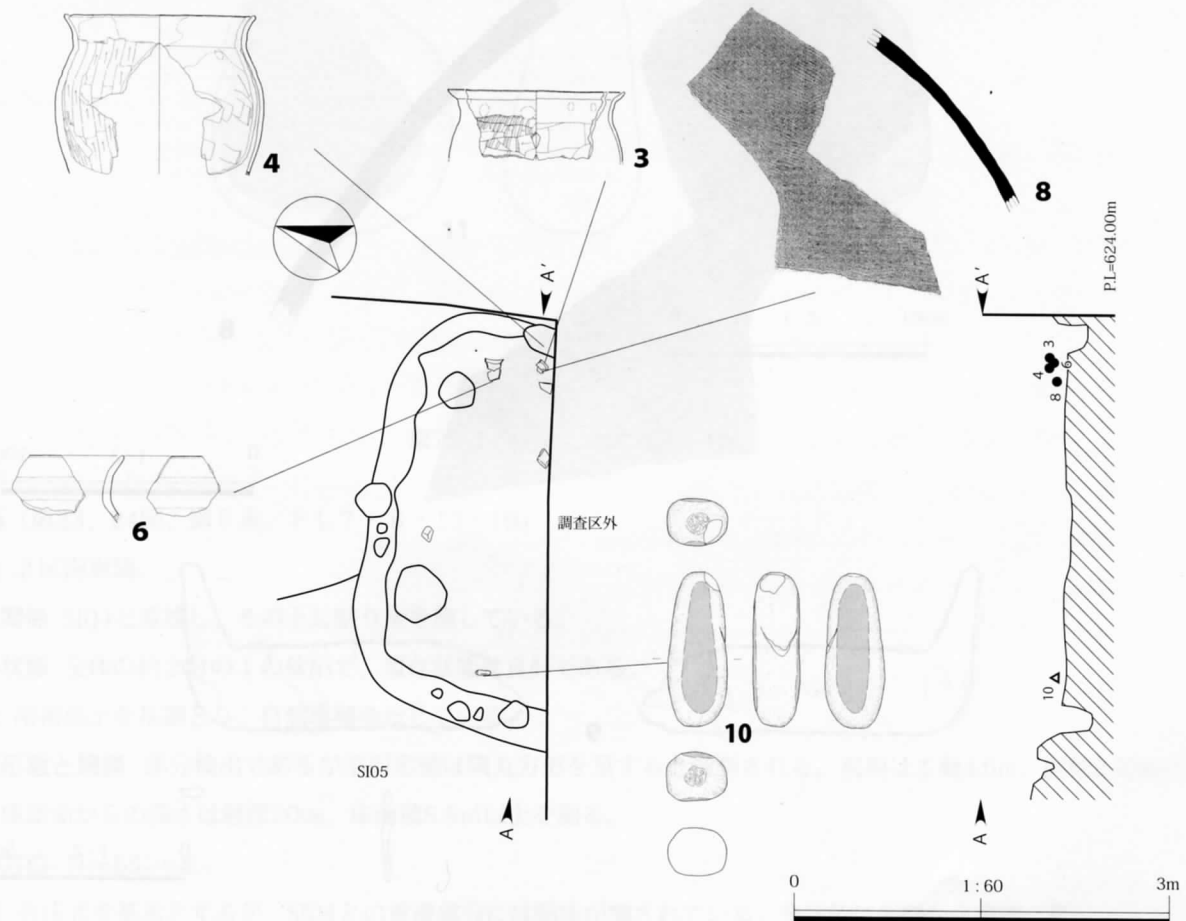
遺物検出状況 遺物は東壁付近で集中して検出された。

遺物 土師器甕4点、須恵器4点(杯2点・壺1点・甕1点)、鉄製品(苧引金具)1点、石器2点(磨石+敲石1点・磨石1点)を図示し得た。

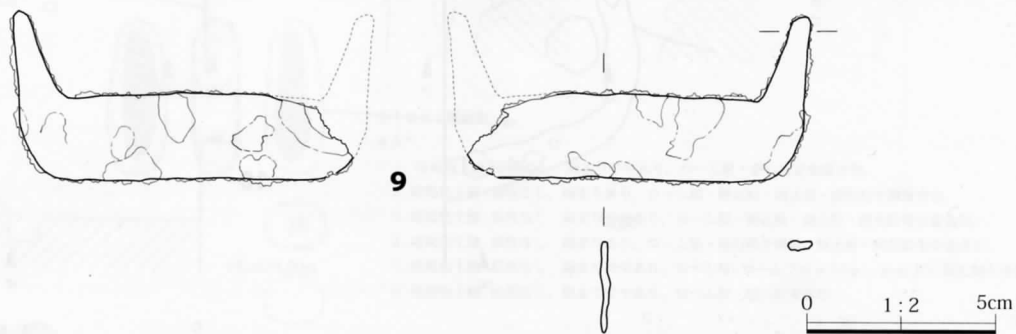
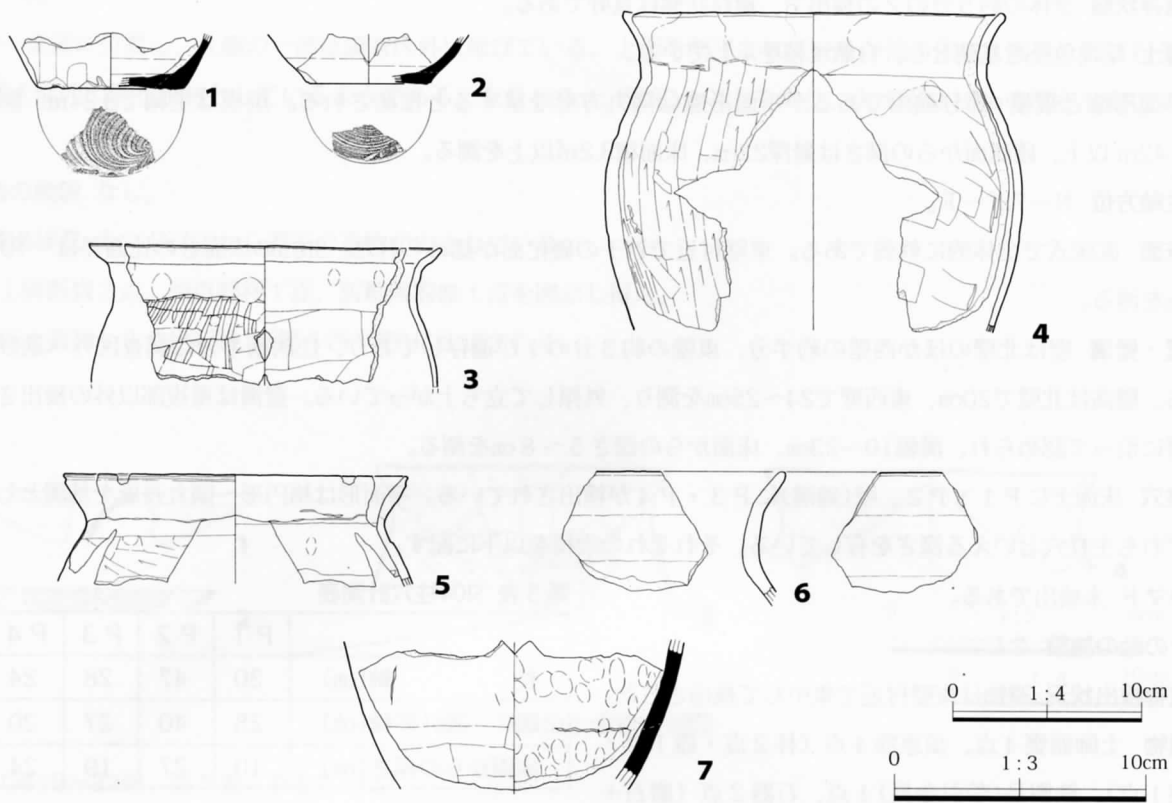
備考 出土遺物から9世紀後半(第3四半期)に比定される。

第5表 SI04柱穴計測表

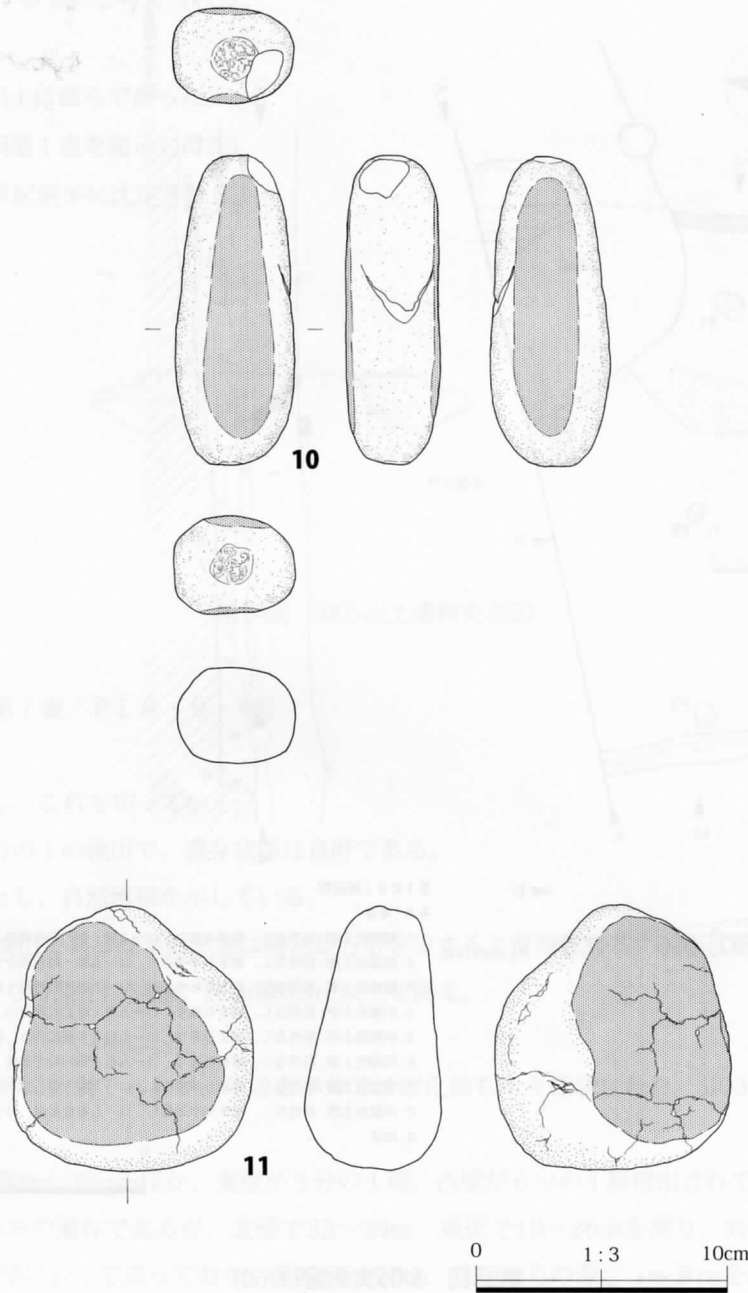
	P 1	P 2	P 3	P 4
長 軸(cm)	30	47	28	24
短 軸(cm)	28	40	27	20
床面からの深さ(cm)	10	27	19	24



第20図 SI04遺物出土状況図(1/60)



第21図 SI04出土遺物実測図1



第22図 SI04出土遺物実測図2

SI05 (第23、24図、第6表/PL 7・8・15・19)

位置 2区南東隅。

重複関係 SI04と重複し、その上に貼り床を施している。

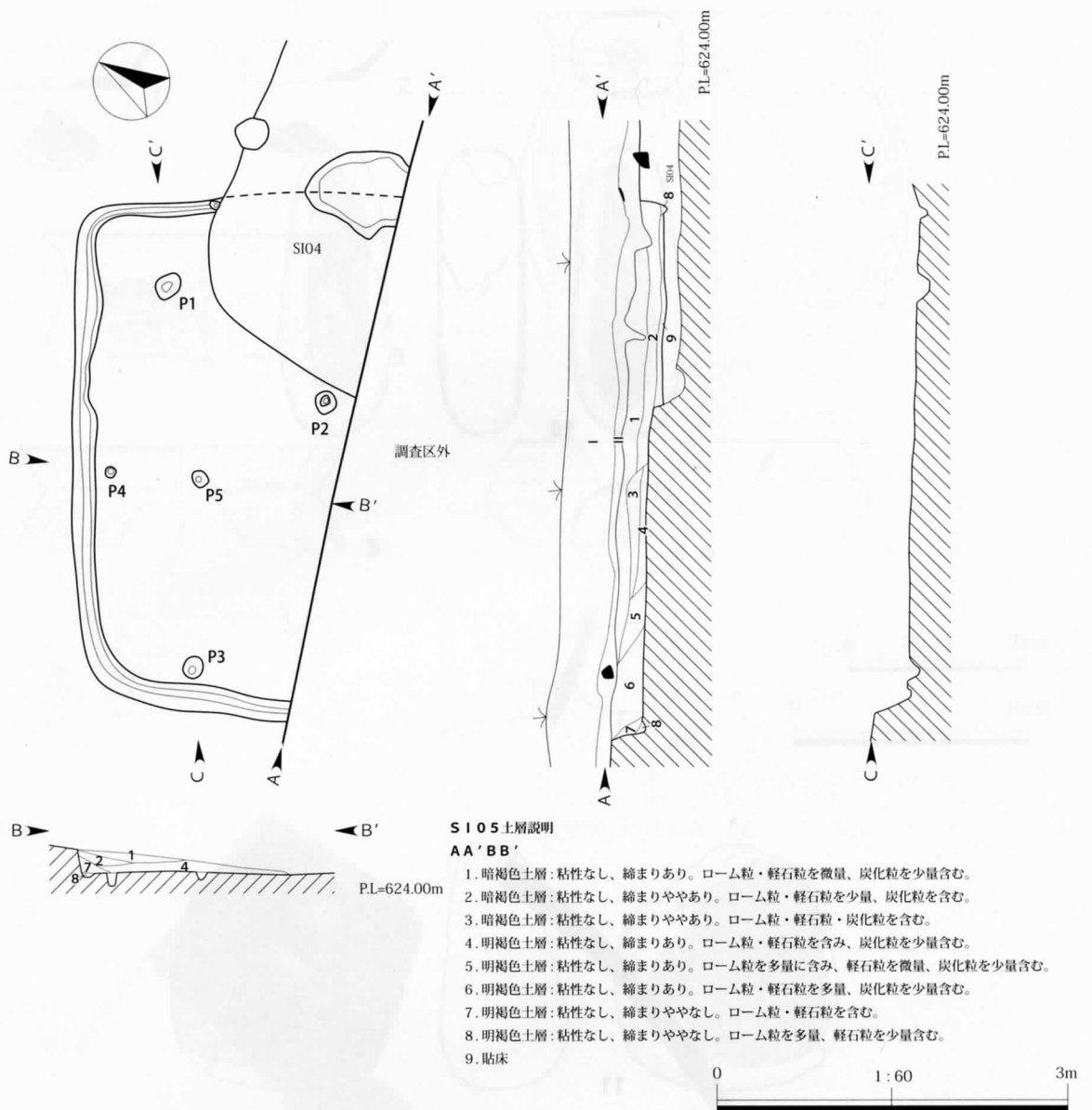
遺存状態 全体の約2分の1の検出で、遺存状態は良好である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 部分検出であるが平面形態は隅丸方形を呈すると推測される。規模は主軸4.6m、副軸2.32m以上、確認面からの深さは最深20cm、床面積8.5㎡以上を測る。

主軸方位 N-65°-E。

床面 直床式を基本とするが、SI04との重複部分には貼床が施されている。全体的に西側から東側へ緩やかに傾斜



第23図 SI05実測図(1/60)

している。SI04の床面との比高差は+10~37cmを測る。

壁・壁高 壁は北壁のほか東西壁の約半分が遺存しており、住居南半分は調査区外へ延びている。壁高は北壁で20cm、東西壁で24~25cmを測り、外傾して立ち上がっている。壁溝は重複部以外の検出された壁に沿って認められ、溝幅8~12cm、床面からの深さ4~8cmを測る。

柱穴 床面上でP1~P5まで確認されているが、いずれも支柱穴とするには掘り込みが浅い。平面形は円形~楕円形を基調とする。それぞれの規模を以下に記す。

カマド 明確には検出されなかったが、SI04床面に焼土を伴う浅い掘り込みが確認されており、本住居跡の東壁上に位置することから作り替え以前のカマドの焚き口の可能性が指摘できよう。作り替えたカマド自体は東壁の南

第6表 SI05柱穴計測表

		P1	P2	P3	P4	P5
長	軸(cm)	25	20	20	10	15
短	軸(cm)	20	18	18	10	12
床面からの深さ(cm)		10	15	8	11	13

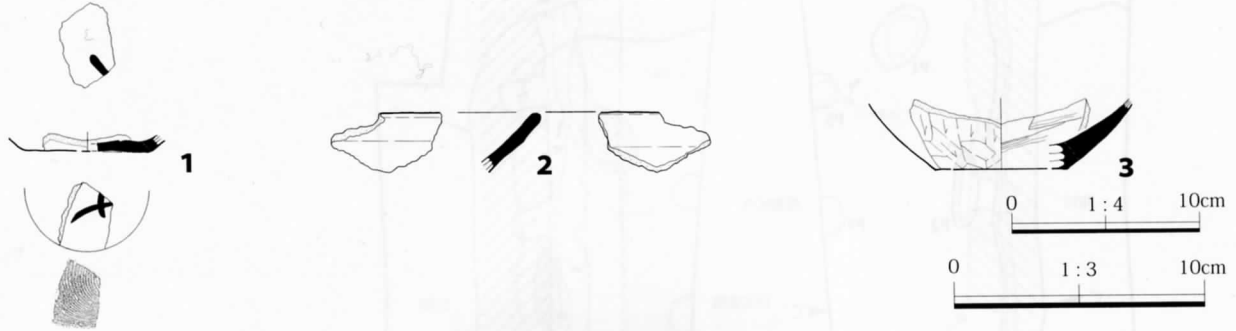
寄りの調査区外に存在するものと考えられる。

その他の施設 なし。

遺物検出状況 遺物の出土は疎らであった。

遺物 須恵器杯2点・羽釜1点を図示し得た。

備考 出土遺物から10世紀前半に比定される。



第24図 SI05出土遺物実測図

SI06 (第25~29図、第7表/P L 8・9・16)

位置 1区中央。

重複関係 SI03と重複し、これを切っている。

遺存状態 全体の約3分の1の検出で、遺存状態は良好である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 部分検出であるが平面形態は隅丸長方形を呈すると推測される。規模は現況で主軸5.72m、副軸1.72m以上、確認面からの深さは34cm、床面積6.3㎡以上を測る。

主軸方位 N-65°-E。

床面 直床式で、全体的に軟弱であるが、住居東半分では硬化面も所々確認された。SI03の床面との比高差は-35~39cmを測る。

壁・壁溝 壁は北壁が遺存しているほか、東壁が3分の1程、西壁が6分の1程検出されている。壁高は西壁は攪乱を被っており壁溝のみの遺存であるが、北壁で35~39cm、東壁で19~26cmを測り、外傾して立ち上がっている。壁溝は検出された壁に沿って巡っており、溝幅20~26cm、床面からの深さ3~8cmを測る。

柱穴 床面上に焼土ピットも含めてP1~P5まで、周溝内にP6・P7が確認されている。主柱穴P3~P5の3本で6本の配置と考えられる。平面形は楕円形~隅丸長形を基調とする。それぞれの規模を以下に記す。

カマド 未検出である。

第7表 SI06柱穴計測表

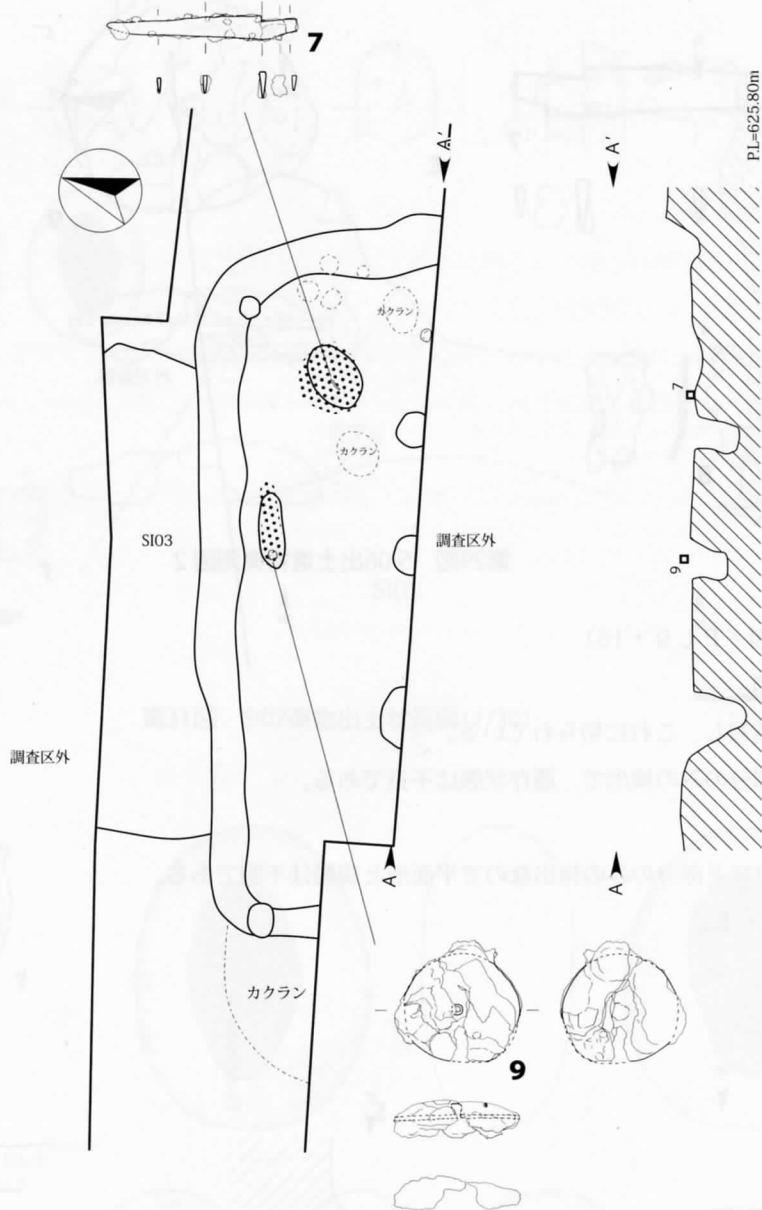
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
長 軸(cm)	56	60	28	30	50	28	18
短 軸(cm)	38	18	22+	18+	18+	20	16
床面からの深さ(cm)	10	5	36	28	40	10	16

その他の施設 なし。

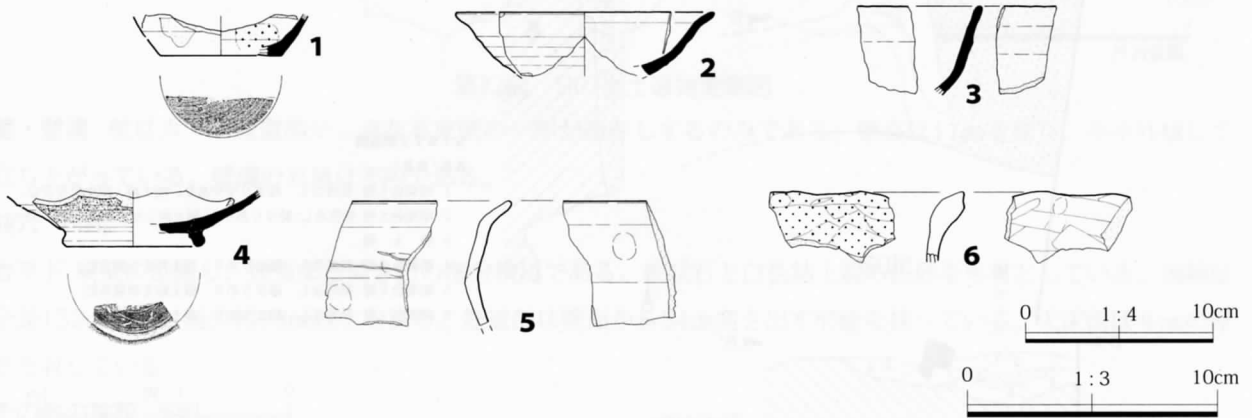
遺物検出状況 焼土ピットのP1・P2で鉄製品が出土している他は疎らな出土である。

遺物 土師器2点(甕1点・長胴甕(鉢?)1点)、須恵器3点(杯2点・碗1点)、灰釉陶器碗1点、鉄製品3点(刀子1点・紡錘車1点・鉄斧袋部?1点)を図示し得た。

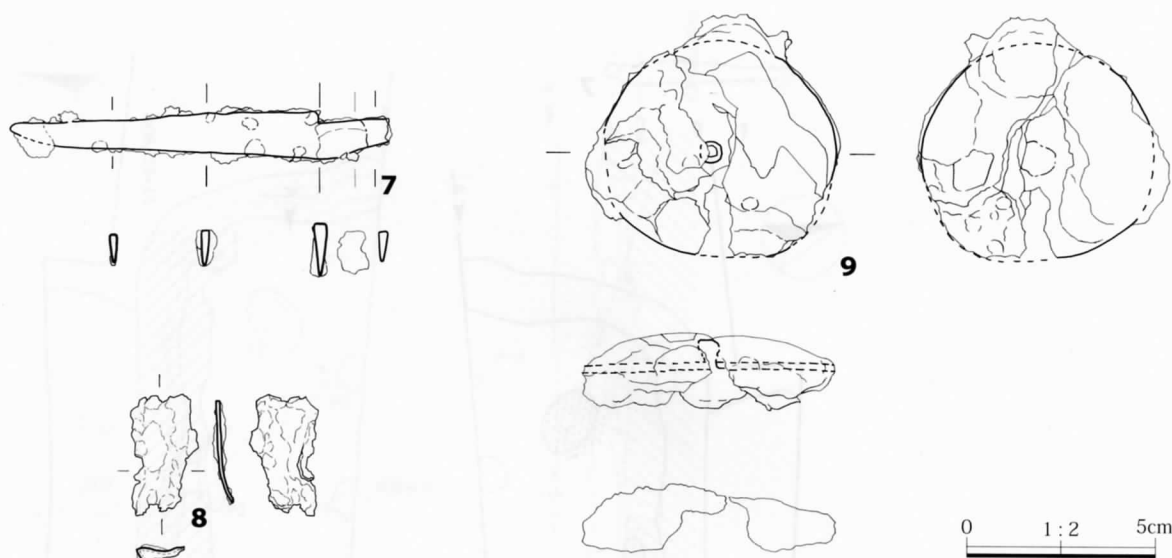
備考 本住居跡は部分検出でカマド等も明らかではないが、床面に焼土が確認されP1・P2とした焼土ピットから鉄製品が出土していることから、小鍛冶施設であった可能性が指摘できる。時期については出土遺物から9世紀後半(第4四半期)に比定される。



第27図 SI06遺物出土状況図(1/60)



第28図 SI06出土遺物実測図1



第29図 SI06出土遺物実測図2

SI07 (第30~32図 / P L 9・16)

位置 2区中央北側。

重複関係 SI02と重複し、これに切られている。

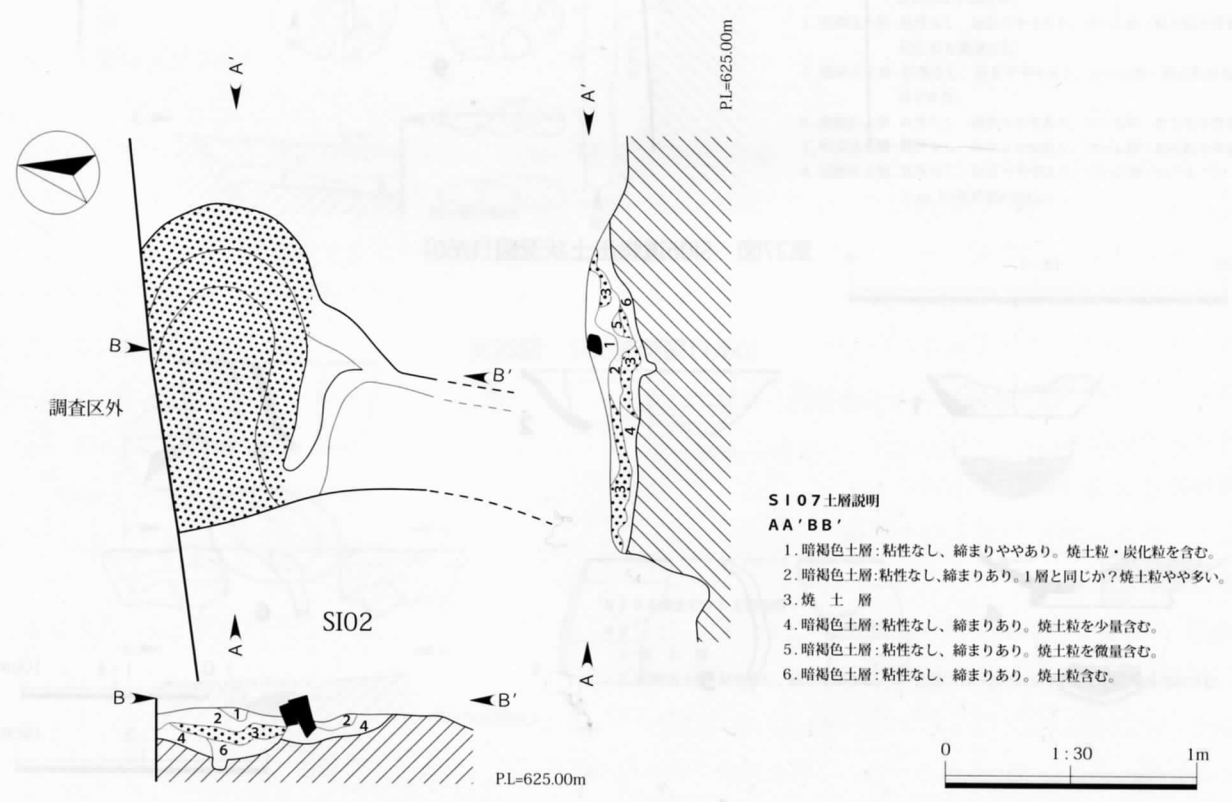
遺存状態 カマド部分のみの検出で、遺存状態は不良である。

覆土 不明。

平面形態と規模 カマド部分のみの検出なので平面形と規模は不明である。

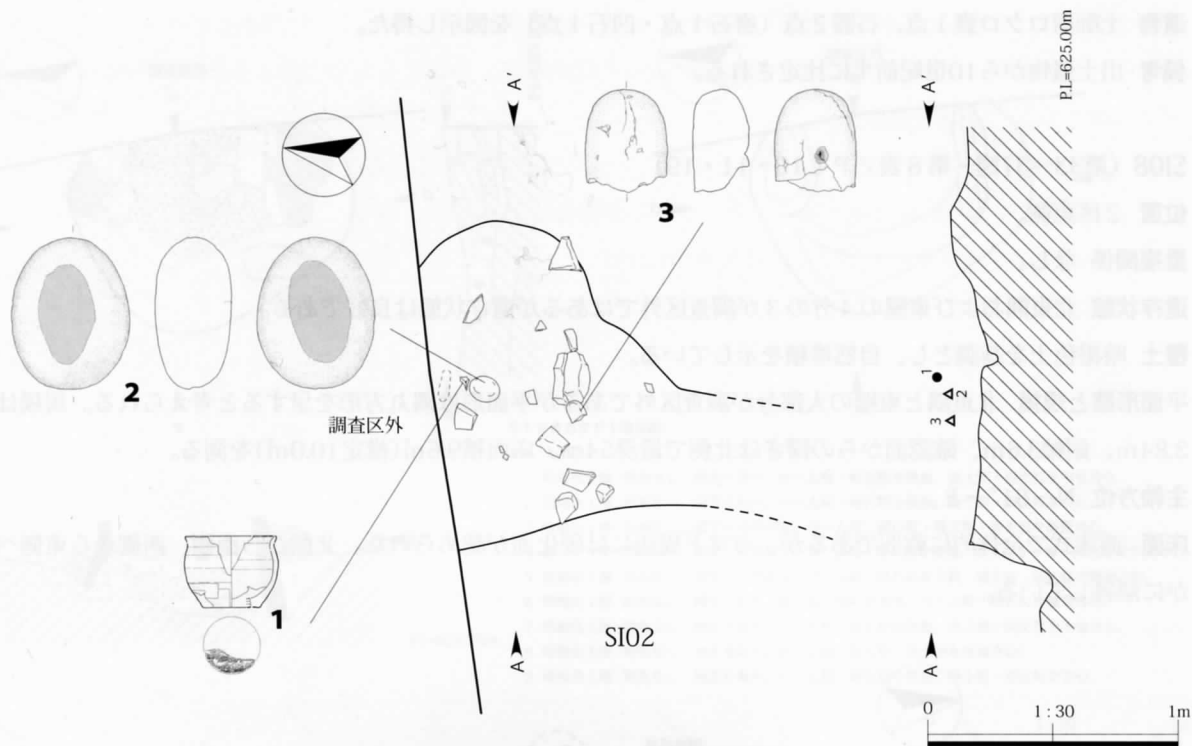
主軸方位 N-65°-E。

床面 不明。

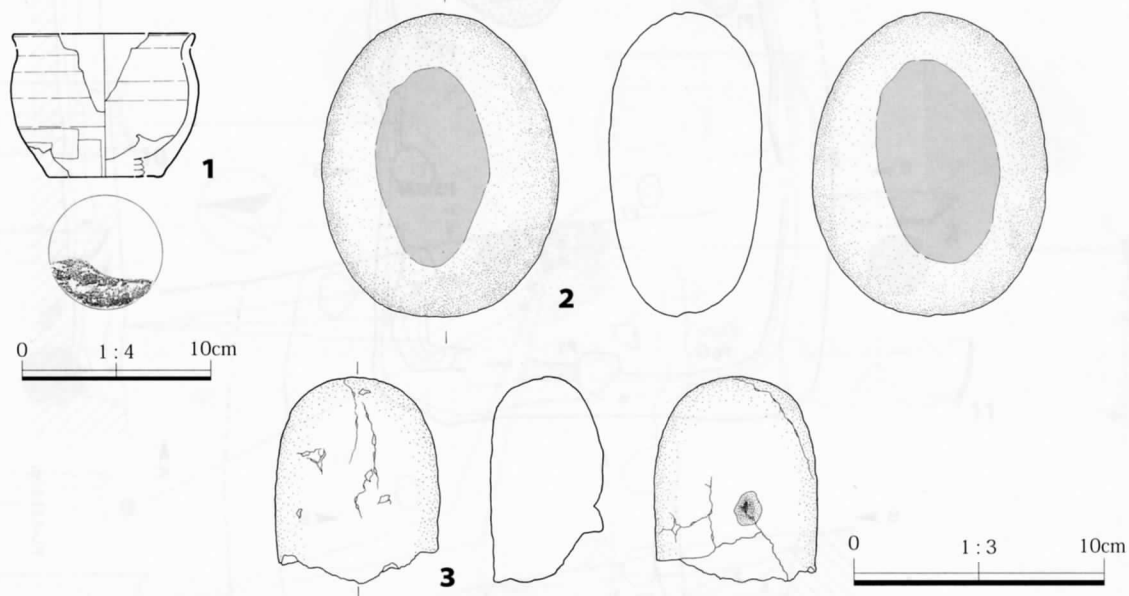


- SI07土層説明
AA'BB'
1. 暗褐色土層: 粘性なし、縮まりややあり。焼土粒・炭化粒を含む。
 2. 暗褐色土層: 粘性なし、縮まりあり。1層と同じか? 焼土粒やや多い。
 3. 焼土層
 4. 暗褐色土層: 粘性なし、縮まりあり。焼土粒を少量含む。
 5. 暗褐色土層: 粘性なし、縮まりあり。焼土粒を微量含む。
 6. 暗褐色土層: 粘性なし、縮まりあり。焼土粒含む。

第30図 SI07実測図(1/30)



第31図 SI07遺物出土状況図(1/30)



第32図 SI07出土遺物実測図

壁・壁溝 壁はカマド煙道部から連なる東壁の一部が遺存しするのみである。壁高は11cmを測り、やや外傾して立ち上がっている。壁溝の有無は不明である。

柱穴 不明。

カマド 東壁に位置し、煙道部と焚き口の部分検出である。板状石と白色粘土混の山砂を用材としている。規模は全長132cm以上、最大幅98cm以上を測る。煙道部は壁面から54cm突き出す形態を採っている。火床面は8cmの厚さを有している。

その他の施設 不明。

遺物検出状況 カマド部分で数点の遺物が出土している。

遺物 土師器ロクロ甕1点、石器2点（磨石1点・凹石1点）を図示し得た。

備考 出土遺物から10世紀前半に比定される。

SI08（第33～37図、第8表／P L 10・11・19）

位置 2区東側。

重複関係 なし。

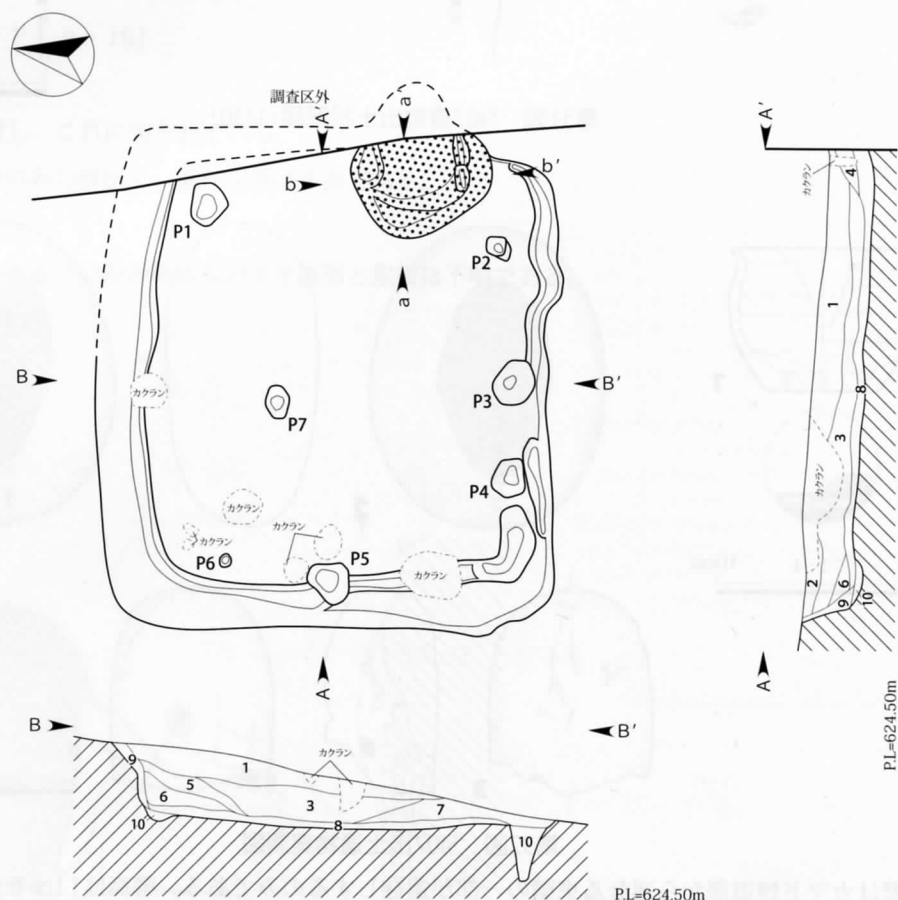
遺存状態 北東隅および東壁の4分の3が調査区外ではあるが遺存状態は良好である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 北東隅と東壁の大部分が調査区外であるが平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は主軸3.84m、副軸3.6m、確認面からの深さは北側で最深54cm、床面積9.6㎡（推定10.0㎡）を測る。

主軸方位 N-81°-E。

床面 直床式で全体的に軟弱であるが、カマド周辺には硬化面が認められた。北側から南側、西側から東側へ緩やかに傾斜している。

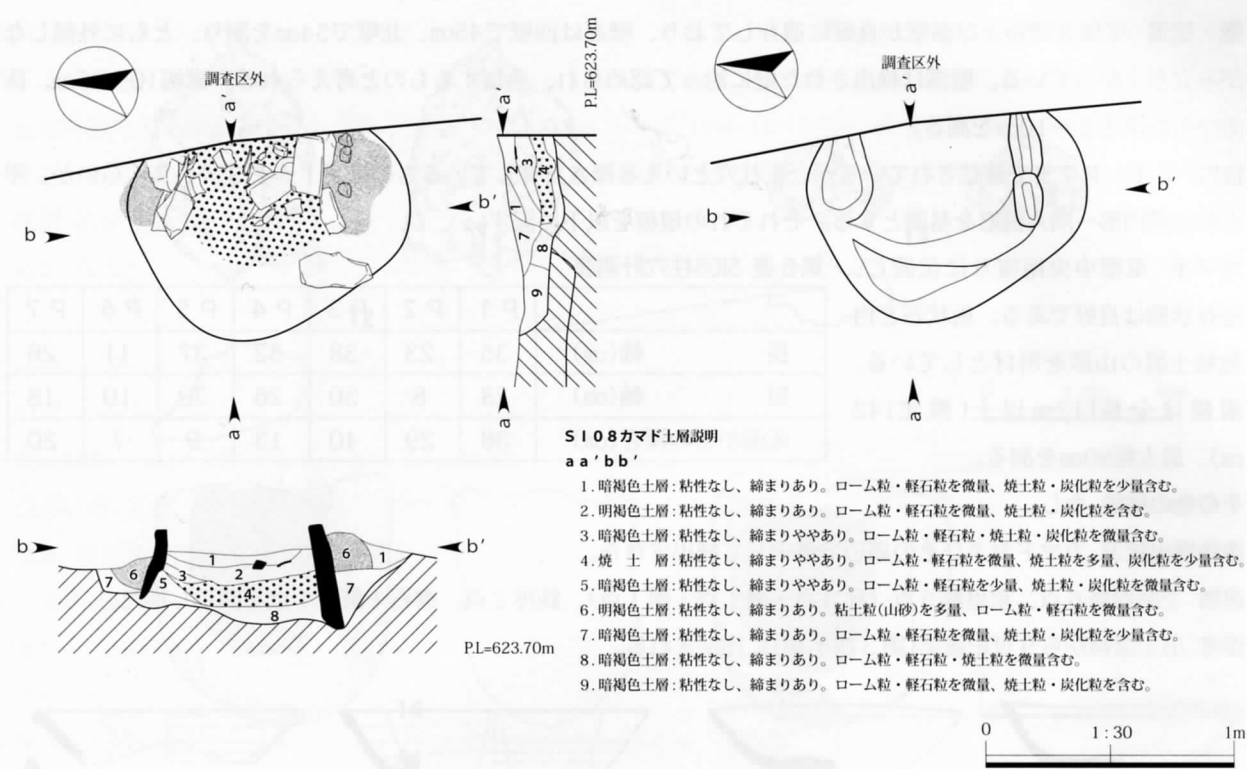


SI08土層説明

AA'BB'

1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒・焼土粒を少量、炭化材を含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒を微量、軽石粒(テフラ?)を少量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒・焼土粒を少量、炭化材を多量に含む。
4. 明褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒(山砂?)を多量に含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒を含み、炭化粒・焼土粒・軽石粒を少量含む。
6. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・炭化粒・焼土粒・軽石粒を少量含む。
7. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・焼土粒を微量、軽石粒・炭化粒を少量含む。
8. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒・ロームブロック(φ~1cm大)を含み、炭化材を多く含む。
9. 暗褐色土層：粘性なし、締まりなし。ローム粒・軽石粒を含む。
10. 明褐色土層：粘性なし、締まりなし。ローム粒・ロームブロック(φ~1cm大)を含む。

第33図 SI08実測図(1/60)

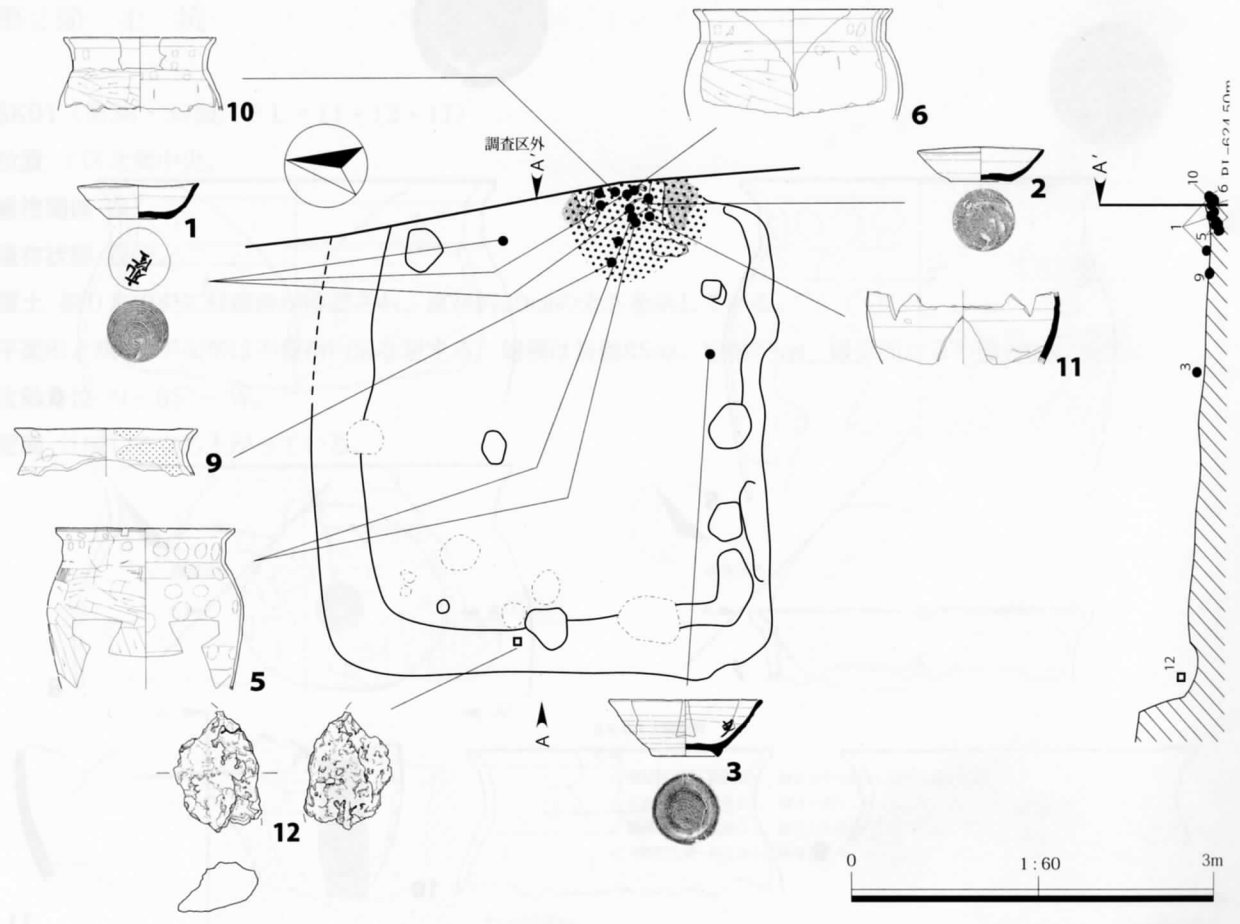


S108カマド土層説明

a a' b b'

1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を微量、焼土粒・炭化粒を少量含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を微量、焼土粒・炭化粒を含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒・焼土粒・炭化粒を微量含む。
4. 焼土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を微量、焼土粒を多量、炭化粒を少量含む。
5. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を少量、焼土粒・炭化粒を微量含む。
6. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。粘土粒(山砂)を多量、ローム粒・軽石粒を微量含む。
7. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を微量、焼土粒・炭化粒を少量含む。
8. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒・焼土粒を微量含む。
9. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を微量、焼土粒・炭化粒を含む。

第34図 S108カマド実測図(1/30)



第35図 S108遺物出土状況図(1/60)

壁・壁溝 壁は北壁および西壁が良好に遺存しており、壁高は西壁で45cm、北壁で54cmを測り、ともに外傾しながら立ち上がっている。壁溝は検出された壁に沿って認められ、全周するものと考えられる。溝幅10~25cm、床面からの深さ2~10cmを測る。

柱穴 P1~P7まで確認されているが、支柱穴といえる深さを有しているものはP1~P3・P7くらいか。平面形は楕円形~隅丸長形を基調とする。それぞれの規模を以下に記す。

カマド 東壁中央南寄りに位置し、第8表 SI08柱穴計測表

遺存状態は良好である。板状石と白色粘土混の山砂を用材としている。規模は全長112cm以上(推定142cm)、最大幅80cmを測る。

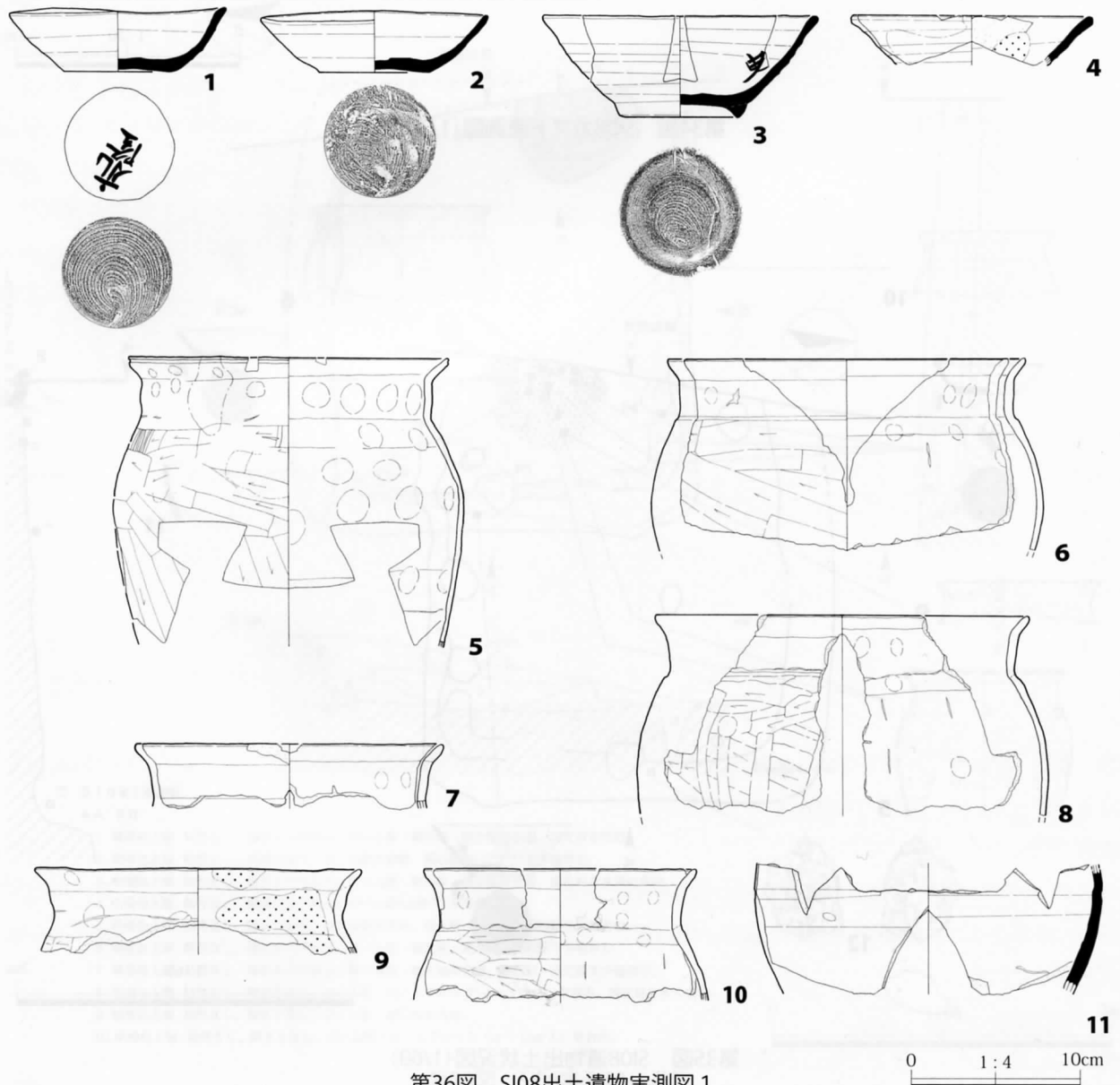
	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
長 軸(cm)	35	23	38	32	37	11	26
短 軸(cm)	28	8	30	26	30	10	18
床面からの深さ(cm)	36	29	40	13	9	7	20

その他の施設 なし。

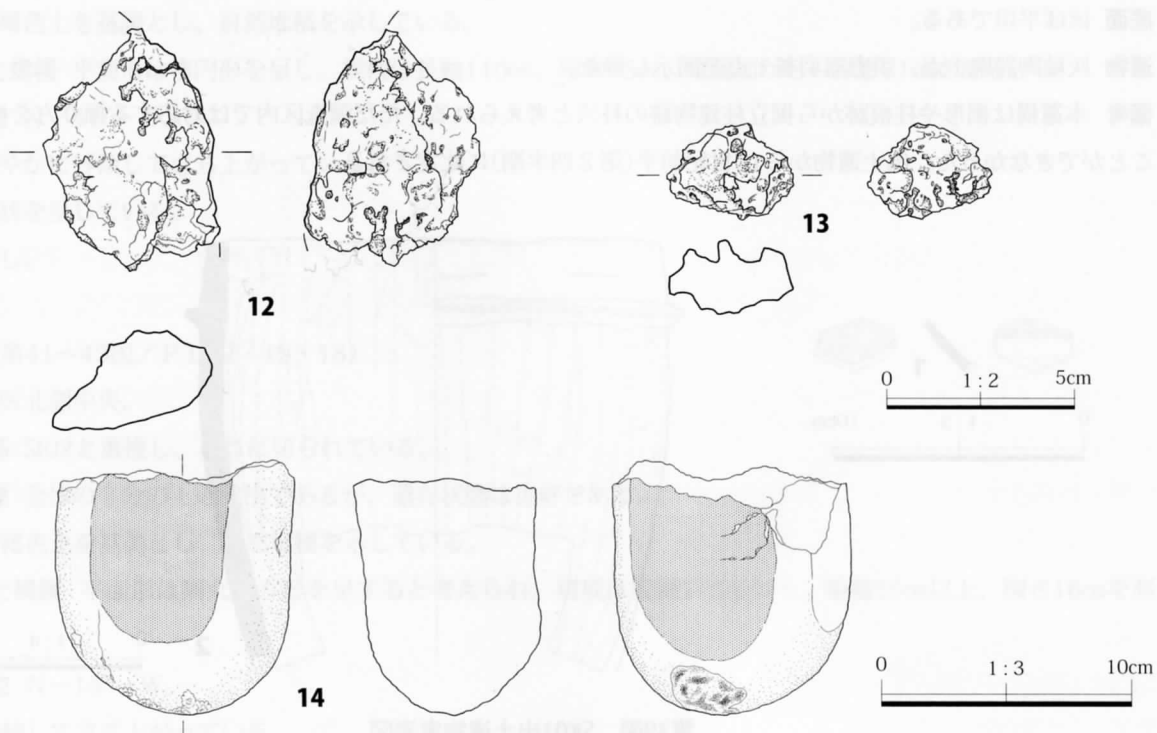
遺物検出状況 カマドおよびその周辺で集中して検出された。

遺物 土師器甕6点、須恵器5点(杯3点・椀1点・壺1点)、鉄滓2点、磨石+敲石1点を図示し得た。

備考 出土遺物から9世紀後半(第3四半期)に比定される。



第36図 SI08出土遺物実測図1



第37図 SI08出土遺物実測図 2

第2節 土 坑

SK01 (第38・39図/P L・11・12・17)

位置 1区北側中央。

重複関係 なし。

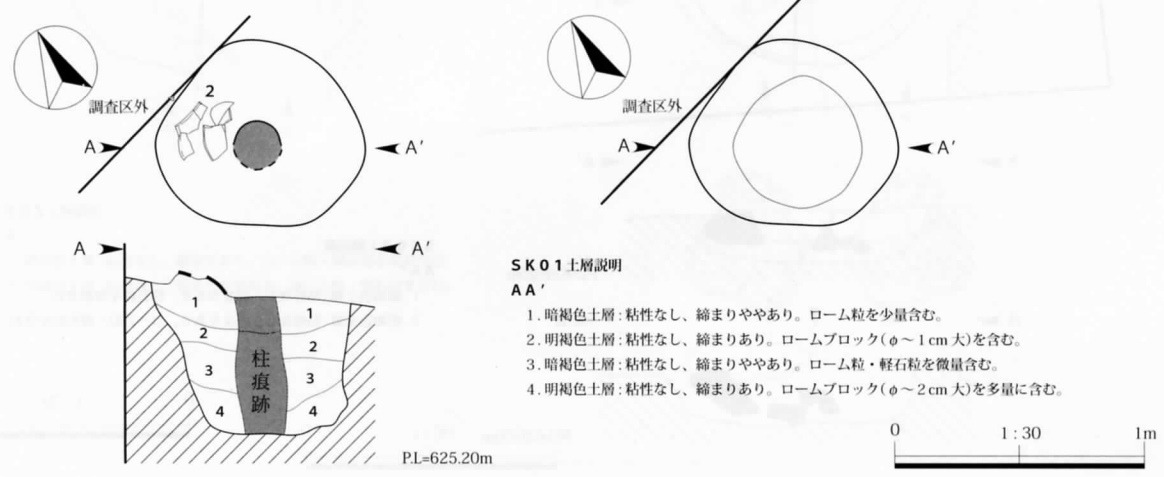
遺存状態 良好。

覆土 掘り方中央に柱痕跡が確認され、直径約20cmの太さを示している。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸85cm、短軸75cm、確認面からの深さ55cmを測る。

主軸方位 N-65°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

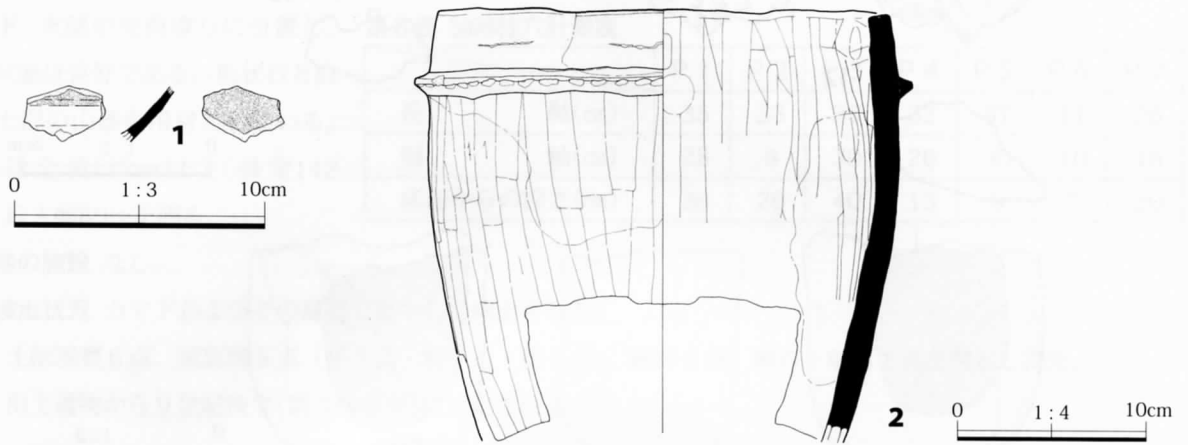


第38図 SK01実測図(1/30)

底面 ほぼ平坦である。

遺物 灰釉陶器碗 1点、須恵器羽釜 1点を図示し得た。

備考 本遺構は掘形や柱痕跡から掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。ただ調査区内では対応する掘り方を検出することができなかった。出土遺物から10世紀前半(第2四半期)に比定される。



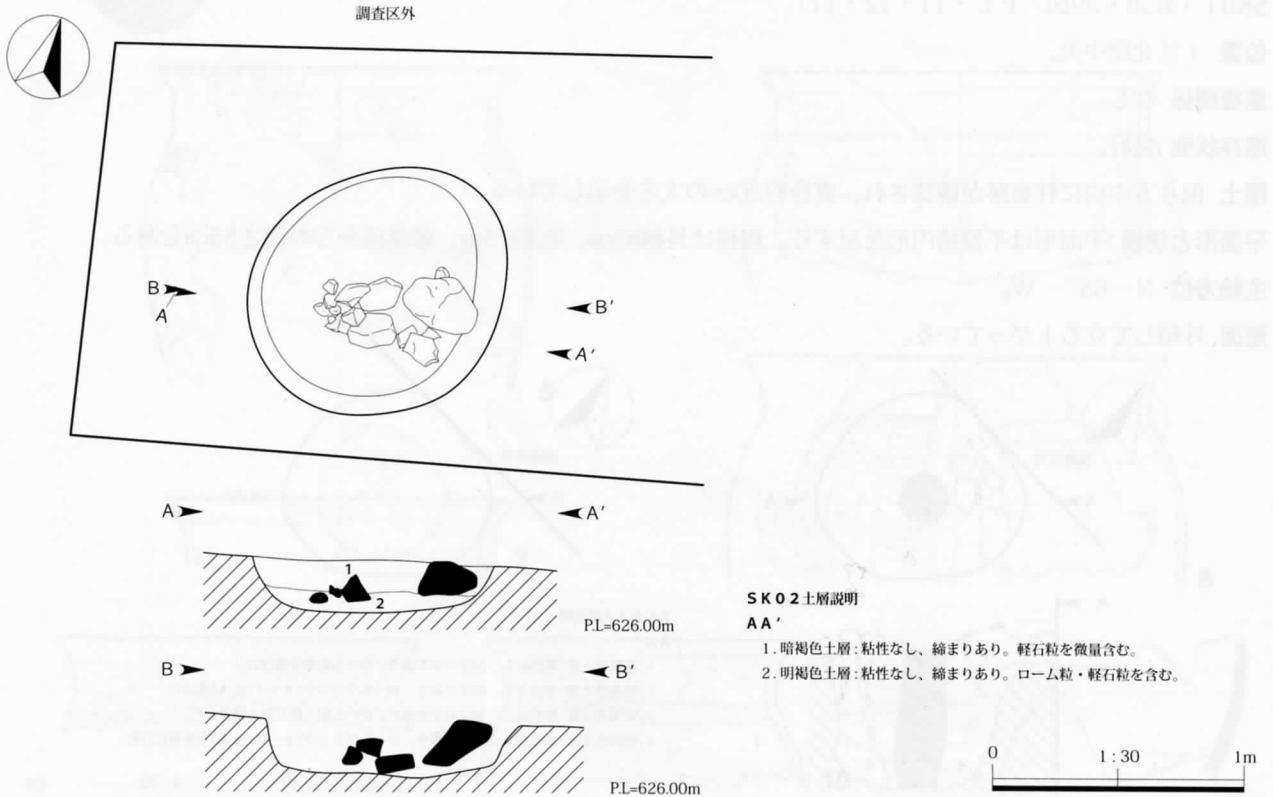
第39図 SK01出土遺物実測図

SK02 (第40図/P L 11・12)

位置 2区西側。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。



第40図 SK02実測図(1/30)

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈し、規模は長軸110cm、短軸95cm、確認面からの深さ21cmを測る。

主軸方位 N-41°-E。

壁面 緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 なし。

SK03 (第41~43図/PL12・13・18)

位置 1区北側中央。

重複関係 SI02と重複し、これに切られている。

遺存状態 全体の2分の1の検出であるが、遺存状態は良好である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、規模は長軸115cm以上、短軸56cm以上、深さ16cmを測る。

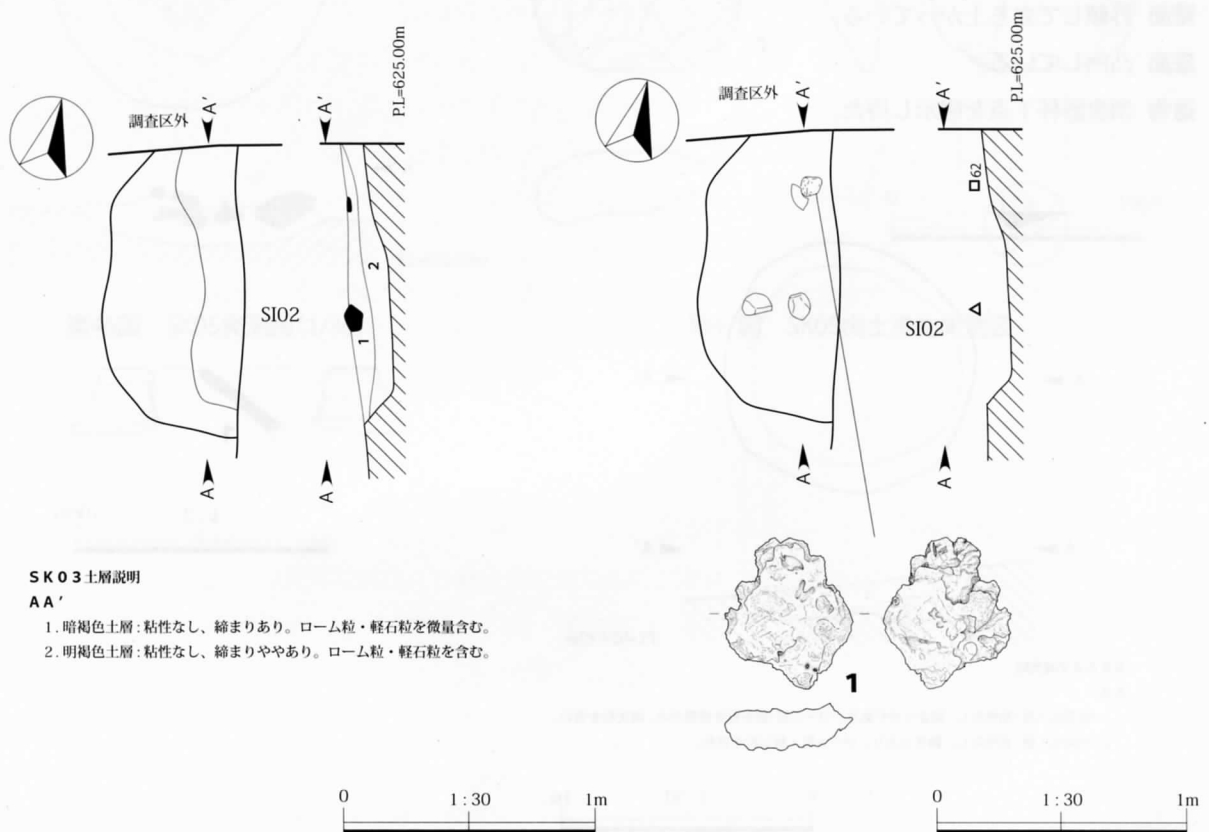
主軸方位 N-15°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

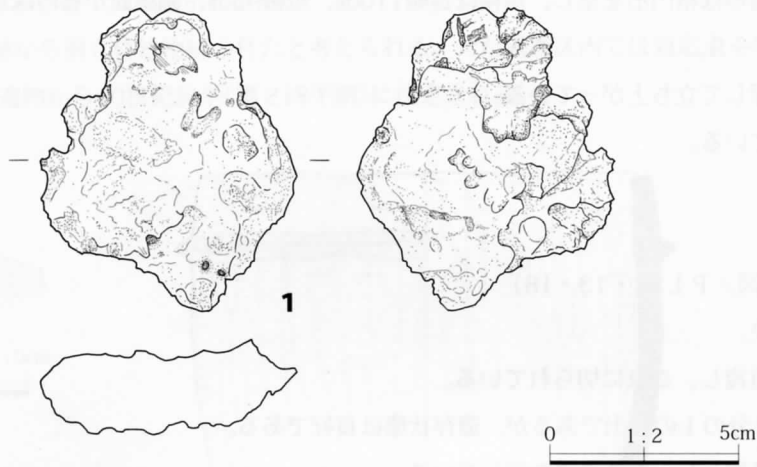
遺物 鉄滓1点を図示し得た。

備考 鉄滓に接続するかたちで羽口の先端部分と考えられる灰色の土塊が扇形に確認された。また被熱を受け、煤(あるいは滓)が付着した礫も出土しており、鍛冶関連遺構であろう。時期については重複関係から10世紀前半以前に比定される。



第41図 SK03実測図(1/30)

第42図 SK03遺物出土状況図(1/30)



第43図 SK03出土遺物実測図

SK04 (第44・45図/P L 13・18)

位置 2区南西側。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

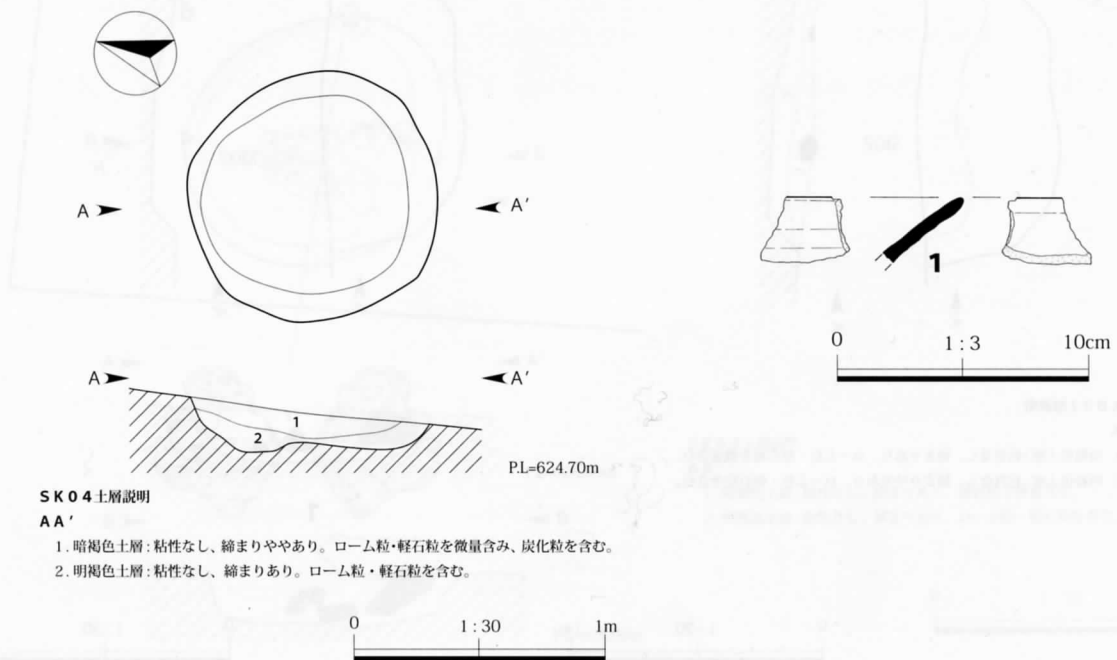
平面形と規模 平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径98~100cm、深さ18cmを測る。

主軸方位 N-17°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 凸凹している。

遺物 須恵器杯1点を図示し得た。



SK04土層説明

AA'

1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を微量含み、炭化粒を含む。
2. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を含む。

第44図 SK04実測図(1/30)

第45図 SK04出土遺物実測図

SK05 (第46・47図/P L 13・18)

位置 2区北東側。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土の単層である。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸110cm、短軸98cm、深さ20cmを測る。

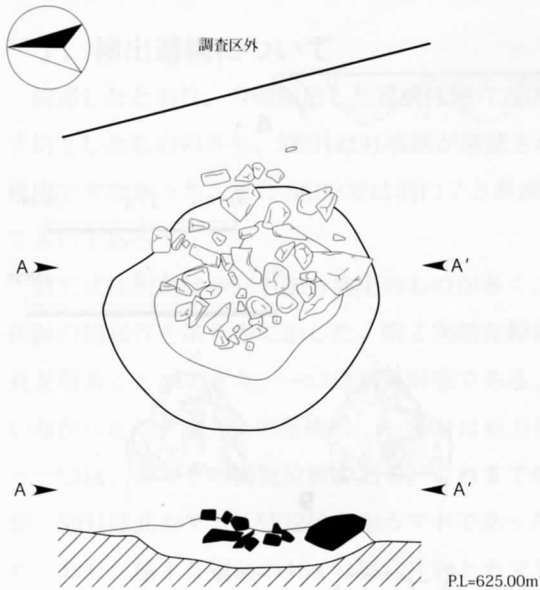
主軸方位 N-2°-W。

壁面 緩やかに外傾して立ち上がっている。

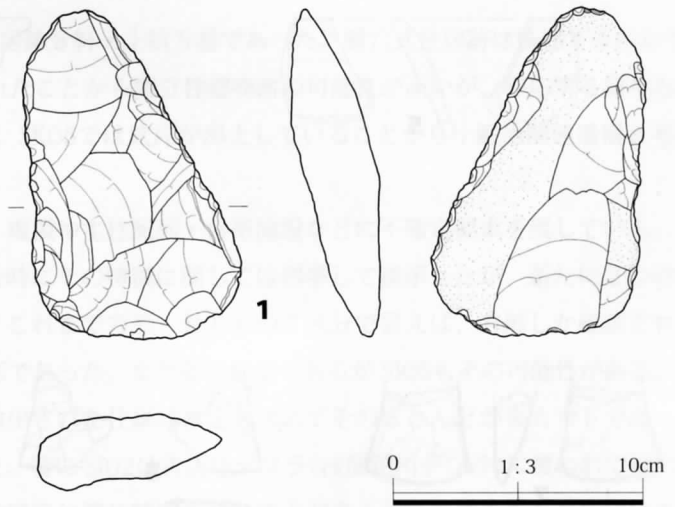
底面 皿状を呈している。

遺物 打製石斧1点を図示し得た。

備考 上面には角礫を集石しており、その隙間からは細かな鉄片が出土している。このことから本遺構は小鍛冶関連遺構の可能性が高いといえよう。



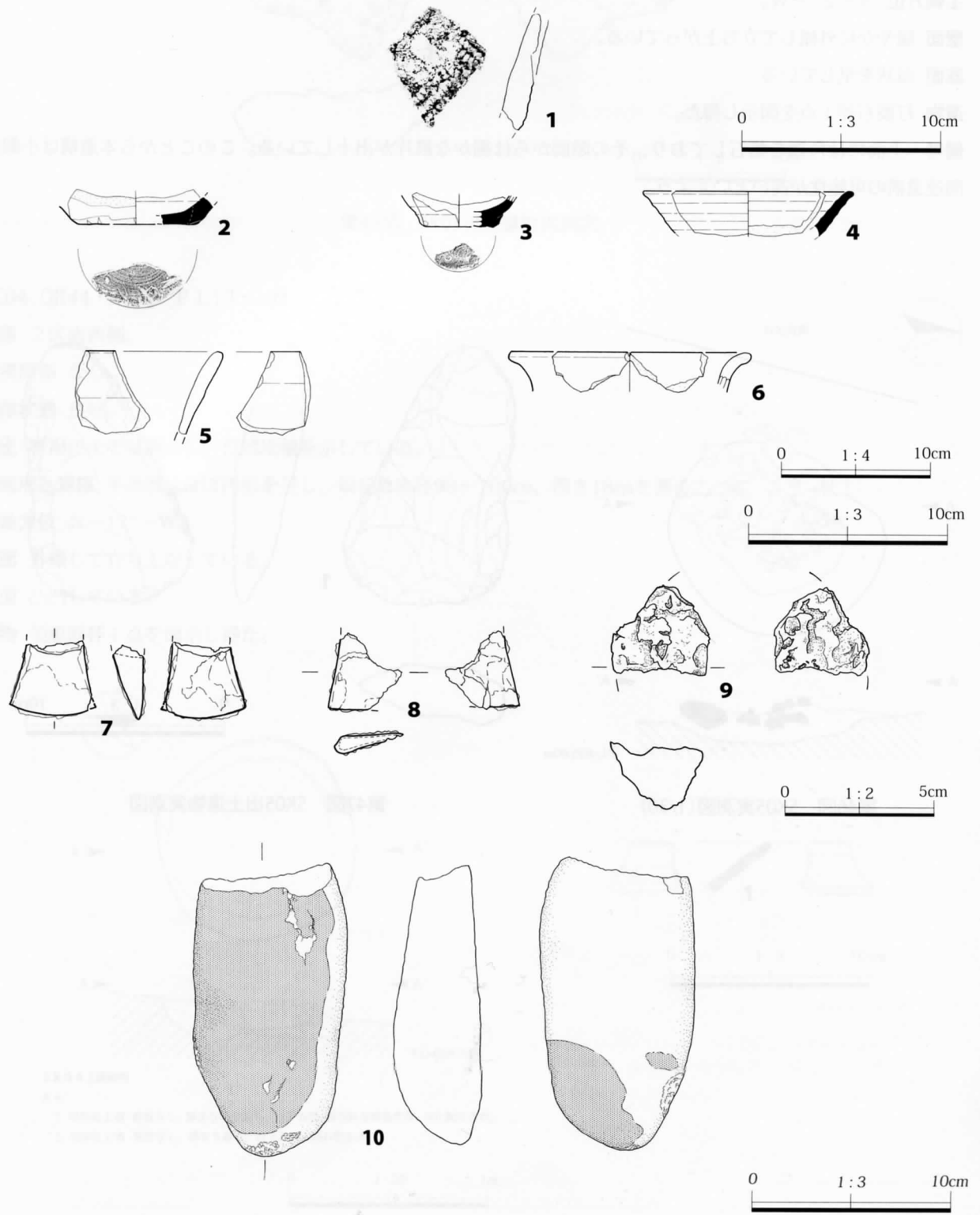
第46図 SK05実測図(1/30)



第47図 SK05出土遺物実測図

第3節 遺構外出土遺物

ここでは調査区表土及び遺構内の流れ込み遺物、サブトレ出土遺物を一括して取り扱う。遺構外出土遺物は平安時代のもものがほとんどだが、縄文時代前期前半土器片を1点含んでおり、周辺に当該期の集落の存在を推測させる。



第48図 遺構外出土遺物実測図

第4章 調査の成果と課題

はじめに

今回の調査は仮設ゲートボール場造成に先立つもので削平される箇所274㎡の調査であった。検出された遺構は平安時代住居跡8軒と土坑5基で、時期不明のものを除くと平安時代に帰属するものに限定された。近接する第2次調査区の調査成果⁽¹⁾と併せると平安時代住居は14軒(建て替えを含む)となり、本遺跡範囲内でも押手沢右岸沿いの本調査区周辺にまとまって占地している状況が明らかとなった。集落の継続時期も現時点では9世紀後半～10世紀前半の約100年間に限定され、この傾向は吾妻西部地域の当該期集落の特徴でもある⁽²⁾。本来ならば周辺地域の当該期集落と比較する要素を抽出して本遺跡の特徴を明らかにしたいところであるが、検出軒数に比して住居跡全体を把握できたものは意外と少なく細かな検討をするには曖昧な部分が未だ多いことや、近々に周辺町道の拡幅工事が予定されており今後も調査地点が増えることを勘案して、ここでは今回の調査における所見を述べてまとめとしたい。

1. 検出遺構について

前述したとおり、今回検出した遺構は竪穴式住居跡8軒・土坑5基であった。竪穴式住居跡は後述するとして、土坑としたもののうち、SK01は柱痕跡が確認されたことから掘立柱建物跡の可能性が高いが、呼応する掘り方は検出できなかった。またSK03では羽口?と鉄滓、SK05では鉄片が出土していることから小鍛冶関連遺構と考えてよいであろう。

竪穴式住居跡は今回も部分検出のものが多く、規模や支柱配列・付帯施設などに不確定要素を残している。住居跡の諸属性を第9表に示した。第2次調査報告時にその特徴に関しては列挙して提示したが、新たに2つの知見を得ることができた。一つは平面形態である。これまで方形・長方形の2区分で言えば、方形しか確認されていなかったが、唯一全形を検出したSI01は長方形であった。また部分検出であるがSI06もその可能性がある。もう一つは、カマドの構築位置である。これまで検出された住居は推定も含めてそのほとんどが東カマドであったが、SI01は北カマド、SI02は東南カマドであった。特にSI02は青灰色テフラ(浅間粕川テフラ)に覆われて検出されており、楡木Ⅱ遺跡の46a号竪穴住居とカマド構築位置や時期など共通点が多く認められることが指摘できよう⁽³⁾。出土遺物から前者が9世紀第3四半期、後者が10世紀第1四半期に比定され⁽⁴⁾、9世紀後半代は東カマド主体で北カマドも存在し、10世紀前半代にも東カマドが主体だが、東南カマドが出現するという大まかな方向性を把握することができよう。

2. 出土遺物について

土師器・須恵器に関しては、内黒土器・コ字甕(ロクロ甕)・鉢などが土師器で、その他が須恵器という捉え方が妥当である。須恵器は還元焰焼成に比して酸化焰焼成のものが主体である。内黒土器の中ではSI01で出土したヘラミガキ調整後に黒色処理を施された高台付の皿(第11図3)が県内平野部では見受けられず、類例は長野県域に見出すことができた⁽⁵⁾。また、いわゆるコ字甕が盛行する時期であるが、SI04ではコ字甕と併せて縦位ケズリ調整の甕(第21図4)が出土しており、在地的な類型として捉えられるかもしれない⁽⁶⁾。墨書土器は第10表に示したが、4点5例が出土しており、そのうち判読可能なのは2点である。いずれも2文字表記で「由人」は人名、「永隆」は人名とも吉祥的な文言とも解釈が可能であろう⁽⁷⁾。

灰釉陶器に関しては、3点のみの出土でその内訳は椀2点と皿1点である。窯式期が判別可能なものはそのう

第9表 林宮原遺跡Ⅷ住居跡諸属性

< >推定値 () 残存値

遺構名	長軸方向	規模 (m)				主柱 配置	カマド		周溝	付帯施設	遺物					時期
		長軸長	短軸長	壁残高	面積 (㎡)		位置	構築方法			灰釉	墨書	羽釜	鉄製品	鉄滓	
SI01	N-19-W	5.58	4.10	0.20	18.10	2本?	北	石・粘土	○	貯蔵穴	○	○	×	×	○	9世紀第3
SI02	N-17-W	3.42	<3.2>	0.58	<6.9>	2本?	東南	石・粘土	○	?	×	×	×	×	○	10世紀第1
SI03	N-72-E	3.66	(0.7~0.9)	0.15	(2.60)	?	東	石・粘土	○	?	○	×	×	×	×	9世紀第3
SI04	N-72-E	3.24	(1.40)	0.25	(3.20)	4本か	東か	石・粘土	○	?	×	×	×	○	×	9世紀第3
SI05	N-65-E	4.60	(2.32)	0.25	(8.50)	?	東か	石・粘土	○	?	×	○	○	×	×	10世紀前半
SI06	N-65-E	5.72	(1.72)	0.39	(6.30)	6本か	東か	石・粘土	○	?	×	×	×	○	×	9世紀第4
SI07	N-65-E	-	-	0.11	-	?	東	石・粘土	?	?	×	×	×	×	×	10世紀前半
SI08	N-81-E	3.84	3.60	0.54	<10.0>	4本?	東	石・粘土	○	-	×	○	×	×	○	9世紀第3

第10表 林宮原遺跡Ⅷ出土墨書土器一覧

No.	出土遺構(挿図番号)	器種	文字記入部位・方向	釈文	備考
1	SI01(第11図7)	須恵器・杯	体部外面	□	破片、判読不能
2	SI05(第24図1)	須恵器・杯	底部外面 底部内面	□ □	破片、判読不能
3	SI08(第36図1)	須恵器・杯	底部外面	永隆	
4	SI08(第36図3)	須恵器・椀	体部内面・正位	由人	

ちの2点でSI01で虎溪山1号窯式期(第11図8)、SI06で大原2号窯式期のもの(第29図4)が確認されている⁽⁸⁾。出土した住居跡と灰釉陶器の年代は、出土した他の遺物からSI01が9世紀第3四半期、SI06が9世紀第4四半期に比定され、前者に齟齬が見られる。SI01は平面図をみると後世の攪乱を被っており、灰釉陶器は混入したものと考えられよう。

鉄製品に関してはSI06で刀子(第29図7)・袋状鉄斧の袋部(第29図8)・紡錘車の紡輪部(第29図9)、SI04で苧引金具(第21図9)が出土しているほか、袋状と考えられる鉄斧(第48図7・8)が遺構外で出土している。この袋状鉄斧はSI06出土の袋部と同一個体の可能性を残している。苧引金具は調査段階では用途不明であったが、併行して整理作業を進めている三平I遺跡で同じ形態の鉄製品が出土していることに気付いた⁽⁹⁾。このことから管見の報告書でこの鉄製品の類例を調べていくと、苧引金具は麻の表皮を剥ぐ紡錘具として位置づけられており、県内平野部では見受けられず、長野県全域～山梨県北部にかけて広く分布していること、時期的には7世紀後半から12世紀前半まで出土が認められ、9世紀後半に出土数のピークを迎えることが明らかにされている⁽¹⁰⁾。本遺跡出土例はこの分布域の北東縁に位置づけられ、群馬県域では初例であろう。

3. まとめ

今回の調査で、小鍛冶に関連すると考えられる土坑が検出され、住居内からも鉄製品や鉄滓の出土が認められることから、本遺跡の集落内で小鍛冶を行っていることがほぼ明確となった。しかし、現時点でその素材となる鉄をどこで精錬していたのか未だ不明と言わざるを得ない状況である⁽¹¹⁾。

また、県内平野部では見受けられない2点の遺物が住居内で出土したことは、大きな成果といえるだろう。一つは苧引金具である。この金具が出土したことによって、本遺跡の集落を営んでいた集団が麻の栽培・収穫から麻布生産までの一連の作業を生業の一つとして行っていたことが推測される。もう一つはSI01で出土した内黒処理を施された皿である。これら2点の遺物はともに長野県域との共通性を持っており、本地域との深い関係を窺わせる資料といえよう。この関係は本地域の原始古代の遺物、特に縄文土器から垣間見られた大きな特徴であり⁽¹²⁾、平安時代においても同様であることが今回初めて明らかとなった。

吾妻郡域は名勝吾妻峽を境にして東部と西部に分けられるが、長野原町の属する吾妻西部地域では、弥生時代後期～9世紀初頭まで古墳時代後期初頭を挟んで原始古代における空白時期が2度存在する。この空白時期をど

のように理解するかは本町の古代史を考える上で大きな課題である。中央集権的な社会動向から地理的に隔絶された地域で、そのような趨勢とは少なくとも直接的ではなく、間接的關係にあったということであろう。本遺跡でも第2次調査で5世紀末～6世紀初頭の住居跡が1軒検出されているが、その後は空白時期が続き、9世紀第3四半期になって突如集落が出現することになる。この現象に関しては、律令制崩壊期以降の新たな開発を目的としたもので、その開発の担い手として地理的要因から吾妻郡域の郡司層や富豪層を想定する考えが提示されているが⁽¹²⁾、出土遺物から長野県域からの集団の流入も想定され得るのではないだろうか。

本地域は八ッ場ダムあるいはそれに関連した生活再建事業により、当該期集落の調査事例は今後も増加することが予想され、本地域の当該期集落の様相を把握することが第一であるが、それとともに、土師器・須恵器も含めた当該期遺物の他地域（特に長野県域）との比較・検討が急務であろう。

最後に、本書を作成するにあたり、多くの方々・関係団体にご指導・ご協力を賜った。末筆ながら心から感謝申し上げる次第である。

註

- (1) 長野原町教育委員会 2004『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
- (2) 神谷佳明氏は榎木Ⅱ遺跡と上ノ平Ⅰ遺跡出土の灰釉陶器を検討する中で、吾妻郡西部地域における古代集落の竪穴式住居の時期にも触れ、榎木Ⅱ遺跡、向原遺跡で9世紀前半から出現し、長野原一本松遺跡で11世紀までの住居が検出されていること、そのほとんどの遺跡が9世紀後半から10世紀前半までの存続期間であることを指摘した。また灰釉陶器の出土量から集落内の格差にも触れ、9世紀後半代には格差が見られないが10世紀前半代に吾妻川左岸の集落が再編成されてまとまった集落が形成され、集落内でも灰釉陶器の保有量に大きな差が見られるようになることから集落内に貧富の差が生じたことによるものと推察している。

神谷佳明 2008「第4章第4節 榎木Ⅱ遺跡出土の灰釉陶器について」『榎木Ⅱ遺跡（1）平安時代・中近世編』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省

2008「第3章第1節 上ノ平Ⅰ遺跡出土の灰釉陶器について」『上ノ平Ⅰ遺跡（1）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第23集（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省
- (3) 46号竪穴住居は立て替えが想定されabに分けられている。特徴的な遺物として「三家」や「長」などの墨書土器、大原2号窯式の灰釉陶器が出土している。

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『榎木Ⅱ遺跡（1）平安時代・中近世編』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
- (4) 神谷佳明氏（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）の御教示による。神谷氏には出土土器全般を実見していただき、灰釉陶器の窯式の同定や全体的な編年観を教えていただいた。
- (5) 長野県域の当該期土器群は以下の報告書を参考にした。

長野県埋蔵文化財センター 2000『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書 28 一更埴市内その7 更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）-総集編-』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 54

佐久市教育委員会 2005『長土呂遺跡群 聖原』第5分冊 佐久市埋蔵文化財調査報告書第126集
- (6) 中沢悟氏（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）の御教示による。
- (7) 高島英之氏（群馬県教育委員会）の御教示による。
- (8) 註4と同じ。
- (9) 概要報告のみで未報告である。SX01とした平安時代の遺構から出土している。

長野原町教育委員会 2010「1.三平Ⅰ遺跡」『町内遺跡Ⅸ』長野原町埋蔵文化財調査報告第19集
- (10) 長野県域での出土事例が目立ち、いずれ集成しようと考えてた矢先に、原明芳氏（長野県立歴史館）により集成・分析がされていることを知った。また同書では山梨県域の古代生業に関して岡野秀典（中央市役所）・末木健（中央市豊富郷土資料館）両氏により検討がなされており、

芋引金具の分布の中心である長野県域では見られないが、分布周縁地域である山梨県域で穂摘み具とされる手鎌が出土していることが興味深い。このことから芋引金具と手鎌はほぼ同規模で類似した使われ方をしていたかもしれないとの印象をもった。麻布生産は他地域でも行われていたであろうし、それに代わるものとして手鎌が想定されるのではないだろうか。手鎌は芋引金具と対照的に全国に広く分布しているようである。このことに関して末木氏がすでに指摘しており、芋引金具を手鎌としての利用実験をして収穫用具として問題がないことや形態分類などが行われていることを後で知った。本地域では手鎌として報告されていないが、楡木Ⅱ遺跡24号竪穴住居で出土しており、芋引金具の分布域の周縁地域として山梨県域との共通性が看取された。

原 明芳 2011「長野県の古代生業」『一般社団法人日本考古学協会2011年度栃木大会研究発表資料集』日本考古学協会2011年度栃木大会
実行委員会

岡野秀典・末木健 2011「長野県の古代生業」『一般社団法人日本考古学協会2011年度栃木大会研究発表資料集』日本考古学協会2011年度
栃木大会実行委員会

末木 健 2011「甲斐国出土の芋引金具について」『山梨県考古学協会誌』第20号 山梨県考古学協会

- (11) 今年度から3年間調査・整理、1年間報告書作成の合計4年間計画で町営林地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が開始された。今年調査された上原Ⅲ遺跡では、試掘調査で羽口・鉄滓が出土しており、製鉄関連遺構群の検出が期待されていたが、鍛冶工房と考えられる遺構の検出に留まった。ただし、床面直上の覆土からは鍛造剥片や粒状滓・砂鉄等が検出されており、鍛冶工房でどの工程まで行っていたのか興味深いところである。また続けて調査している中棚Ⅰ遺跡においても当該期集落が検出されている。
- (12) 本書第2章第2節で触れているが、特に縄文時代前期初頭・中期後半～後期前葉の遺物を整理する中で、これまでも浅間山を取り巻く地域で情報の共有が確認されている。その後も縄文時代晩期末の「女鳥羽川式」や「氷式突帯壺」、弥生時代中期前半の「中部高地系突帯文壺形土器」なども同様に長野県域の強い影響が看取され、この現象はそれぞれの背景は異なるものの本地域の地域色といってよいであろう。
- (13) 註2と同じ。

第11表 林宮原遺跡Ⅷ出土遺物観察表

S101出土遺物観察表

図版NO.	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特徴(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
11-1	土師器・杯	4.2/〈14.2〉/〈5.4〉	ロクロ整形。外面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部は持ち手へラ削り。	酸化焼、良好	角四石・赤色粒	明褐/黒	25%残存。外面に火だすまの痕跡あり。 カマド・P2
11-2	土師器・杯	4.2/13.6/7.0	左回転ロクロ整形。外面はロクロナデで底部付近は持ち手へラケズリ調整後ナデ。内面はロクロ非常に弱く平滑な器面である。見込み部分に黒色処理が施されている。底部は回転へラ削り。	酸化焼、良好	角四石・長石・赤色粒	明褐/明褐	口縁部60%残存。底部完存。外面に粘土質の付着あり。 カマド
11-3	土師器・皿	(13.6)/1.9/—	ロクロ整形。外面はロクロ非常に弱く平滑。内面は横位へラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部が欠損しているが、高台が貼付されていたと考えられる。	酸化焼、良好	角四石・白色粒、赤色粒	橙/黒	20%残存。 貯蔵穴
11-4	須恵器・杯	3.85/〈14.4〉/〈8.0〉	右回転ロクロ整形。内外面ともロクロナデ調整。底部は回転糸切り。	還元焼、良好	白色粒、黒色粒	灰黄/灰黄	25%残存。内面・底部に煤付着。 カマド・貯蔵穴
11-5	須恵器・杯	3.4/〈14.4〉/〈7.0〉	ロクロ整形。内外面とも弱いロクロ。底部は回転糸切りで穿孔のような削り方をしている。	還元焼、良好	長石	灰黄/灰黄	30~45%残存。外面に黒斑。内面に煤付着。 カマド
11-6	須恵器・碗	(3.2)/—/7.8	右回転ロクロ整形。内外面ともロクロナデ調整。底部は回転糸切り後に高台貼付。貼付時に周辺を横位ナデ。	還元焼、良好	長石・黒色粒	褐灰/褐灰	右部60%残存。 下層
11-7	須恵器・杯	(2.5)/—/—	ロクロ整形。内外面ともロクロナデ。外面に墨書あり。	還元焼、良好	角四石・長石	灰黄/灰黄	破片資料(口縁部~体部) 推形
11-8	灰釉陶器・椀	(2.5)/—/—	ロクロ整形。口縁部は僅かに外反する。内外面ともロクロナデ調整で施釉(刷毛掛?)。	還元焼、良好	角四石	灰白/灰白	破片資料(口縁部~体部) 覆土 虎渓山11号窯式。
11-9	須恵器・壺	(3.5)/〈12.8〉/—	ロクロ整形。受口状口縁。内外面ともロクロナデ調整で自然釉が凝らに見られる。	還元焼、堅緻	角四石・白色粒	灰/灰	口縁部25%残存。 床直
12-10	土師器・甕	(11.1)/〈18.4〉/—	コ字口縁。口縁部上位は外反し、下位は内傾気味に直立する。肩部の強りは強く大きく膨らむ。口縁部外面は横位へラナデ調整で指頭圧痕・輪積痕を残す。体部外面は横位~斜位のヘラケズリで炭化物の付着が見られる。内面は横位へラナデ調整で指頭圧痕・輪積痕を残す。	酸化焼、良好	長石	明赤褐/明赤褐	口縁部35%・体部5%残存。 貯蔵穴
12-11	須恵器・甕か	(6.0)/—/—	体部から直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。外面は横位~斜位へラケズリ、内面は横位へラケズリでもに煤の付着あり。	良好	角四石・長石	黒褐/灰黄褐	破片資料(口縁部) 覆土
12-12	中世陶器・甕	(8.8)/—/〈14.4〉	輪積み整形後に、外面はロクロないし回転台ナデ。内面は斜位へラナデ。内外面ともに施釉が認められる。	還元焼、堅緻	黒色粒、角四石、白色粒・長石	黒/褐灰	体部~底部25%残存。 カマド・P2
12-13	鉄滓	長(6.4)/幅(3.8)/厚(3.15)	重量52.7g。極形滓。	—	—	—	20%残存。 覆土
12-14	石器・凹石+磨石	長11.8/幅9.0/厚6.8	重量811.6g。	—	粗粒輝石安山岩	—	50%ほど残存か。 覆土
12-15	石器・台石	長24.4/幅19.2/厚4.6	重量8890g。煤の付着あり。	—	粗粒輝石安山岩	—	完存。 床直

S102出土遺物観察表

図版NO.	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特徴(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
15-1	土師器・椀	3.9/〈13.0〉/〈6.0〉	ロクロ整形。内外面ともロクロナデ調整で、内面は横位~斜位へラナデ。高台は低い。	酸化焼、良好	角四石・長石・赤色粒	赤褐/赤褐	10%残存。外面に黒斑あり。 P3
15-2	須恵器・壺	(1.9)/〈4.4〉/—	小瓶。長頸。外面は回転へラケズリ、内面は横位ナデ。	還元焼、堅緻	角四石	黒褐/黒褐	口縁部~頸部25%残存。 覆土
15-3	須恵器・壺	(4.8)/—/—	内外面ともロクロナデ調整。	還元焼、良好	長石	灰白/褐灰	破片資料(口縁部) サブトレ
15-4	土師器・甕	(2.4)/—/—	口縁部上位は直立気味にやや外傾して開き、下位は内積する。内外面とも横位ナデ調整。	酸化焼、良好	角四石	明赤褐/明赤褐	破片資料(口縁部) カマド

標図NO.	図版NO.	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特微(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
15-5	15	鍔尊	長(2.9)/幅(3.2)/厚(1.2)	重量19.2g。椀形尊。	—	—	—	20%残存。 サブトレ
15-6	15	石器・磨石	長9.2/幅8.1/厚4.7	重量372g。裏面はボロボロ。	—	石英閃緑岩	—	50%残存。 覆土
15-7	15	石器・台石	長21.4/幅18.0/厚7.7	重量10610g。表面に研磨面あり。	—	粗粒輝石安山岩	—	完存。 床直

S103出土遺物観察表

標図NO.	図版NO.	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特微(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
18-1	15	須臾器・椀	(1.85) / (1.96) / —	ロクロ整形。器壁薄く、大きく外反する。内外面ともロクロナデ調整。	還元焰・堅緻	黒色粒	褐灰/褐灰	破片資料(口縁部) 覆土
18-2	15	灰軸陶器・皿	(1.1) / (1.25) / —	折縁皿。ロクロ整形。外面はロクロナデ、内面は横位ヘラナデ。内外面ともに施釉(刷毛掛け)。	還元焰・堅緻	灰黄/灰黄	灰黄/灰黄	口縁部10%残存。 覆土
18-3	15	土師器・甕	(7.4) / (15.4) / —	コ字口縁。口縁部上位は外反し、下位は外傾気味に直立する。肩部の張りは弱い。口縁部外面は横位ヘラナデ調整で指頭圧痕を留め、工具痕が認められる。外部外面は横位ヘラケズリで炭化物の付着が見られる。内面は口縁部が横位ヘラナデ調整。底部が刷毛状工具による横位ナデ調整で指頭圧痕を残す。	酸化焰・良好	角四石・長石	赤褐/明赤褐	口縁部25%・体部10%残存。 カマド
18-4	15	土師器・甕	(5.3) / (17.4) / —	コ字口縁。口縁部上位は外反し、下位は直立する。肩部の張りは強い。口縁部外面は横位ヘラナデ調整で指頭圧痕を残す。外部外面は横位ヘラケズリ。内面は口縁部が横位、体部が斜位のヘラナデ調整。	酸化焰・良好	長石・赤色粒	赤褐/赤褐	口縁部25%残存。 覆土

S104出土遺物観察表

標図NO.	図版NO.	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特微(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
21-1	15	須臾器・杯	(2.9) / — / (7.8)	右回転ロクロ整形。外面はロクロナデ調整後に横位ナデ。粘土のはみ出しが認められる。内面はロクロナデ。底部は回転糸切り。	還元焰・良好	長石・角四石	褐/褐	底部25%残存。 覆土
21-2	15	須臾器・杯	(2.6) / — / (6.6)	ロクロ整形。内外面ともにロクロナデ調整。底部は回転糸切り。内面はアハタ共割離顕著。	還元焰・堅緻	黒色粒	褐灰/褐灰	底部20%残存。 覆土
21-3	15	土師器・甕	(7.3) / (18.6) / —	コ字口縁。口縁部上位は外反し、下位は外傾気味に直立する。肩部の張りは弱い。口縁部外面は横位ナデ調整で指頭圧痕を残す。外部外面は横位ヘラケズリ調整で指頭圧痕を留め、内面は斜位ヘラナデ。	酸化焰・良好	角四石・長石・赤色粒	赤褐/赤褐	口縁部上半部15%残存。 下層
21-4	15	土師器・甕	(16.8) / (20.0) / —	在地系。器壁が厚い。口縁部上位は外反し、下位はやや外傾して立つ。口縁部内外面は横位ナデ調整だが、口縁部下位・体部にかけては横位ヘラケズリ調整が施される。内面は口縁部と体部の境に稜を有し、体部内面は斜位ヘラナデ調整で指頭圧痕・工具痕が僅かに残る。	酸化焰・良好	角四石・長石	褐/褐	25%残存。口縁部～体部上半部外面に稜の付着あり。 下層
21-5	15	土師器・甕	(5.8) / (18.2) / —	コ字口縁。口縁部上位は外反し、口唇部に明確な凹線部を認める。下位は内傾して立つ。肩部の張りはやや強い。口縁部内外面は横位ナデ調整で指頭圧痕を残す。外部外面は横位ヘラケズリで指頭圧痕を残す。内面は横位ヘラナデ。	還元焰・良好	角四石・長石	明褐/明褐	口縁部25%残存。 覆土
21-6	15	土師器・甕	(4.75) / — / —	コ字口縁。口縁部上位は外反し、下位は外傾気味に直立する。内外面ともに横位ナデ調整。	還元焰・良好	長石・赤色粒	褐/褐	破片資料(口縁部) 下層
21-7	15	須臾器・壺	(7.7) / — / —	外面は横位ヘラナデ、内面は横位ナデで指頭圧痕・輪積痕を残す。	還元焰・堅緻	長石・白色粒・赤色粒	褐灰/褐	体部下半15%残存。 覆土
21-8	15	須臾器・甕	(14.4) / — / —	大形。外面は平行タキ目で上位に自然釉が認められる。内面は上位が斜位ヘラナデ、下位が指頭圧痕。	還元焰・堅緻	白色粒・角四石	オリーブ黒/灰	破片資料(体部) 床直
21-9	15	鉄製品・字引金具	幅(9.1) / 高さ4.45 / 厚0.25	重量19g。復原幅9.8mm。カスガイ形を呈する。サビによる膨れが見られるもの、原形は保たれている。	—	—	—	片方の差し込み部欠損。 覆土

押図NO. 図版NO.	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備 考
22-10	石器・磨石・磨石	長12.4/幅4.8/厚3.8	重量402g。こも礫石の可能性あり。	-	石英閃緑岩	-	完存。
22-11	石器・磨石	長10.5/幅9.4/厚5.5	重量769g。	-	粗粒輝石安山岩	-	完存。

S105出土遺物観察表

押図NO. 図版NO.	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備 考
24-1	須臾器・杯	(0.9)/-/ (6.6)	ロクロ整形。見込み・底面に墨書あり。内外面ともロクロナデ調整。底面回転糸切り。	還元焼・良好	黒色粒	黄灰/黄灰	底部10%残存。
24-2	須臾器・杯	(3.05)/-/ -	内外面ともロクロナデ調整。	還元焼・良好	長石・角閃石	黄灰/黄灰	破片資料(口縁部)
24-3	土師器・甕	(3.7)/-/ (7.0)	外面は鎌首へ斜位ヘラケズリ、内面は刷毛状工具による斜位ナデ、底部はヘラケズリ。	酸化焼・良好	角閃石・長石・赤色粒	黒褐/黄褐	底部20%残存。

S106出土遺物観察表

押図NO. 図版NO.	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備 考
28-1	須臾器・杯	(2.1)/-/ (6.4)	ロクロ整形。内外面ともロクロナデ調整。底面回転糸切り。	還元焼・良好	赤色粒・角閃石	赤い赤褐/赤い赤褐	底部30%残存。内面に墨付着。
28-2	須臾器・杯	(3.3)/ (13.6) / -	ロクロ整形。体部は丸立ち上がり、口縁部は外反して開く。内外面ともロクロナデ調整。	還元焼・良好	白色粒・黒色粒	黄灰/灰黄	口縁部10%残存。
28-3	須臾器・椀	(3.7)/-/ -	ロクロ整形。内外面ともロクロナデ調整。	還元焼・堅緻	長石・砂礫	灰/灰	破片資料(口縁部~体部)
28-4	灰釉陶器・椀	(2.6)/-/ (7.0)	ロクロ整形。外面はロクロナデ、内面はロクロナデ調整後に傾位ヘラナデ。底部は回転糸切り後に黒白貼付。貼付時に周辺を傾位ナデ。内外面に施釉(滑牙掛け)。	還元焼・堅緻	黒色粒	灰白/灰白	体部~底部25%残存。大部2号窯式。
28-5	土師器・甕	(4.9)/-/ -	コ字口縁裏。口縁部上位は強く外反し、下位は外傾して立つ。内外面とも傾位ナデ調整で指面圧痕を残す。	酸化焼・良好	角閃石	赤褐/赤褐	破片資料(口縁部)
28-6	土師器・長脚罐小	(2.8)/-/ -	外面は傾位~斜位ヘラケズリ、内面は傾位ヘラナデで指面圧痕を残す。外面は吸炭のため黒光りしている。器種は特定できないが縁の可能性もある。	酸化焼・良好	角閃石	黒/灰黄褐	破片資料(口縁部)
29-7	鉄製品・刀子	長(10.15)/身幅1.3/榫厚0.3	重量9g。平造り、上部片削(榫間)の類である。サビによる膨れが著しい。	-	-	-	刃身部完存。基部途中折れ。
29-9	鉄製品・動産車	径5.8~6.0/軸径0.2/厚0.2	重量51g。サビによる膨れが著しい。中心部に軸らしきものが現る。但し反対側には見られませんが、中心部は変色している。	-	-	-	紡輪部のみ完存。
29-8	鉄製品・鉄弁袋部小	長(3.2)/幅(1.8)/厚(0.1)	重量3.7g。鉄弁の袋部か。	-	-	-	完存。

S107出土遺物観察表

押図NO. 図版NO.	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備 考
32-1	土師器・甕	7.55/ (9.6) / (6.0)	ロクロ整形。小形。口徑を体部最大径が若干上回る。内外面ともロクロナデ調整で底面はナデ。	酸化焼・良好	角閃石・長石・赤色粒	橙/橙	口縁~体部40%・底部10%残存。
32-2	石器・磨石	長12.0/幅9.4/厚6.05	重量1003g。円形。	-	粗粒輝石安山岩	-	完存。
32-3	石器・凹石	長(8.2)/幅6.5/厚4.5	重量339g。	-	粗粒輝石安山岩	-	60%程度残存か。

S108出土遺物観察表

挿図NO. 図版NO.	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特徴	微(形態、手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
36-1	須恵器・杯	3.8/12.7/5.5	右回転口コ型。口縁部が歪む。内外面とも口コナナ字調整。底部は回転糸切り。底面に黒書あり。	還元焼、良好	角四石・石英	黄灰/黄灰	完存。	カマド
36-2	須恵器・杯	3.6/13.45/6.55	右回転口コ型。歪みの著しい。内外面口コナナ字調整。底部は回転糸切り。	還元焼、良好	長石・小礫	黄灰/にぶい黄	完存。	カマド
36-3	須恵器・椀	5.9/(16.0)/6.6	口コ型。内外面とも口コナナ字調整。底部は回転糸切り後に黄白貼付。貼付時に周辺を横位ナナ字調整。体部内面に黒書あり。	還元焼、良好	長石		口縁部10%・底部完存。	床直
36-4	須恵器・杯	(2.8)/(14.2)/-	口コ型。内外面口コナナ字調整。内外面に黒書あり。	還元焼、良好	長石	灰白/灰白	口縁部20%完存。	覆土
36-5	土師器・甕	(17.8)/(18.8)/-	コ字口縁。口縁部上位は強く外反し、下位はほぼ直立する。肩部の張り強く、体部は大きく膨らむ。口縁部内外面は横位ナナ字調整で指頭圧痕を現す。体部外面は横位～斜位ヘラケズリ、体部内面は横位ヘラナナ字調整で指頭圧痕を現す。	酸化焼、良好	角四石	にぶい赤褐/赤褐	口縁部25%・体部30%完存。	カマド
36-6	土師器・甕	(11.25)/(21.0)/-	コ字口縁。口縁部上位は外反し、下位はほぼ直立する。肩部の張りは強く、体部は大きく膨らむ。口縁部内外面は横位ナナ字調整で指頭圧痕を現す。体部外面は横位～斜位ヘラケズリ、体部内面は横位ヘラナナ字調整で指頭圧痕を現す。	酸化焼、良好	角四石・長石	暗赤褐/暗赤褐	口縁部10%・体部25%完存。	カマド
36-7	土師器・甕	(3.8)/(18.0)/-	コ字口縁。口縁部上位は外反し、下位は外傾しながら立つ。口縁部内外面は横位ナナ字調整で指頭圧痕を現す。	酸化焼、良好	角四石・白色粒	赤褐/赤褐	口縁部20%完存。	カマド
36-8	土師器・甕	(11.6)/(22.0)/-	コ字口縁。口縁部上位は緩やかに外反し、下位は外傾しながら立つ。肩部の張りはやや弱い。口縁部内外面は横位ナナ字調整で指頭圧痕を現す。体部外面は横位～斜位ヘラケズリ調整後に横位ヘラケズリ、体部内面は横位ヘラナナ字調整で指頭圧痕を現す。	酸化焼、良好	角四石・長石・赤色粒	暗赤褐/暗赤褐	口縁部5%・体部10%完存。	カマド
36-9	土師器・甕	(5.0)/(19.2)/-	コ字口縁。口縁部上位は緩やかに外反し、下位は外傾しながら立つ。口縁部内外面は横位ナナ字調整で指頭圧痕を現す。	酸化焼、良好	角四石・長石・白色粒	赤褐/赤褐	口縁部30%完存。口縁部内面に風付着。	床直
36-10	土師器・甕	(7.85)/(16.0)/-	コ字口縁。口縁部上位は外反し、下位は外傾しながら立つ。肩部の張りはやや強い。口縁部内外面は横位ナナ字調整で指頭圧痕を現す。体部外面は横位～斜位ヘラケズリ、体部内面は横位ヘラナナ字調整。	還元焼、良好	角四石	暗赤褐/暗赤褐	口縁部～体部20%完存。	カマド
36-11	須恵器・壺	(7.65)/-/	口コ型。口縁部内外面は横位ナナ字調整で指頭圧痕を現す。内外面ともヘラナナ字調整。	還元焼、良好	長石	黄灰/黄灰	体部下半20%完存。	カマド
37-12	鉄滓	長(6.3)/幅(4.7)/厚(2.6)	重層76.6g。楕円形。	-	-	-	-	覆土
37-13	鉄滓	長(2.1)/幅(3.4)/厚(3.0)	重層19.2g。楕円形。	-	-	-	-	床直
37-14	石器・磨石+砥石	長(9.5)/幅(9.5)/厚(7.2)	重層107.2g。	-	-	粗粒輝石安山岩	残存率50%	覆土

SK01出土遺物観察表

挿図NO. 図版NO.	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特徴	微(形態、手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
39-1	灰釉陶器・椀	(2.65)/-/	内外面とも口コナナ字調整で施釉。	還元焼、良好	黒色粒	灰白/灰白	破片資料(体部)	
39-2	須恵器・羽釜	(22.7)/23.8/-	月夜野型羽釜。口縁部は内傾し、口唇部は中央が僅かに凹状となる。頸は断面台形を呈し、やや踵に貼付されている。口縁部外面は横位ナナ字調整で輪痕を現し、頸には指頭圧痕を現す。体部外面は横位ヘラケズリ。内面は横位～斜位ヘラナナ字調整で指頭圧痕を僅かに現す。内外面とも炭化物の付着が見られる。	酸化焼、良好	角四石・長石	明褐/褐	口縁～体部30%完存。	

SK03出土遺物観察表

挿図NO. 図版NO.	器種	法量 器高/口径/底径 (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備 考
43-1	鉄滓	長8.0/幅6.8/厚3.0	重量92g。楕形滓。	—	—	—	完存。

SK04出土遺物観察表

挿図NO. 図版NO.	器種	法量 器高/口径/底径 (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備 考
45-1	須臾器・杯	(2.6)/—/—	内外面ともにロクロナデ調整。	還元焼・良好	長石・黒色粒	黄灰/黄灰	破片資料(口縁部~体部)

SK05出土遺物観察表

挿図NO. 図版NO.	器種	法量 器高/口径/底径 (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備 考
47-1	石器・打製石斧	長13.05/幅8.15/厚3.5	重量31.2g。中央部は粗く削り、縁辺の刃部を細かく調整している。	—	粗粒輝石安山岩	—	完存。

遺構外出土遺物観察表

挿図NO. 図版NO.	器種	法量 器高/口径/底径 (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備 考
48-1	縄文土器・深鉢	(5.8)/—/—	羽状縄文系土器。外面はL・R・R上縄文を羽状に順位施文。内面は順位ナデ。	良好	角閃石・長石・繊維	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色	破片資料(体部) 縄文時代前期前半。 S101階置穴
48-2	須臾器・杯	(2.3)/—/ (7.8)	ロクロ整形。内外面ともにロクロナデ調整。底部は回転糸切り。はみ出した粘土を雑に処理している。工具痕顕著。	酸化焼・良好	角閃石	にぶい濁/にぶい濁	底部25%残存。 調査区
48-3	須臾器・杯	(2.05)/—/ (5.0)	右回転ロクロ整形。内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。糸切り時にはみ出した粘土を底部外面に貼付している。	還元焼・良好	白色粒	灰黄/灰黄	底部20%残存。 調査区
48-4	須臾器・杯	(4.0)/ (14.0)/ —	ロクロ整形。内外面ともにロクロナデ調整。	還元焼・良好	長石・黒色粒	黄灰/黄灰	口縁部10%残存。 調査区
48-5	土師器・壺小	(4.15)/—/—	ロクロ整形。縁やかに外反しなから開く口縁。口唇部面取り。内外面ともにロクロナデ調整。	酸化焼・良好	角閃石・長石・赤色粒	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	破片資料(口縁部) 調査区
48-6	土師器・壺小	(2.65)/ (16.0)/ —	外反しなから大きく開く口縁。内外面ともに順位ナデ調整。	酸化焼・良好	角閃石	明褐色/明褐色	破片資料(口縁部) 調査区
48-7	鉄製品・鉄斧	長(2.6)/幅(2.9)/厚(0.3)	重量25.5g。袋状鉄斧と考えられる。8と同一個体。	—	—	—	刃部完存。 調査区
48-8	鉄製品・鉄斧袋部小	長(2.7)/幅(2.57)/厚(0.7)	重量3.0g。袋状鉄斧の袋部と考えられる。7と同一個体。	—	—	—	袋部60%残存。 調査区
48-9	鉄滓	長(3.0)/幅(3.2)/厚(2.2)	重量26.9g。楕形滓。	—	—	—	20%残存。 調査区
48-10	石器・磨石・砥石	長14.7/幅7.8/厚さ4.4	重量760g。	—	粗粒輝石安山岩	—	80%残存。 調査区

Year	Month	Day	Event	Location	Notes
1971	10	10
1971	10	11
1971	10	12
1971	10	13
1971	10	14
1971	10	15
1971	10	16
1971	10	17
1971	10	18
1971	10	19
1971	10	20
1971	10	21
1971	10	22
1971	10	23
1971	10	24
1971	10	25
1971	10	26
1971	10	27
1971	10	28
1971	10	29
1971	10	30
1971	10	31
1971	11	1
1971	11	2
1971	11	3
1971	11	4
1971	11	5
1971	11	6
1971	11	7
1971	11	8
1971	11	9
1971	11	10
1971	11	11
1971	11	12
1971	11	13
1971	11	14
1971	11	15
1971	11	16
1971	11	17
1971	11	18
1971	11	19
1971	11	20
1971	11	21
1971	11	22
1971	11	23
1971	11	24
1971	11	25
1971	11	26
1971	11	27
1971	11	28
1971	11	29
1971	11	30
1971	12	1
1971	12	2
1971	12	3
1971	12	4
1971	12	5
1971	12	6
1971	12	7
1971	12	8
1971	12	9
1971	12	10
1971	12	11
1971	12	12
1971	12	13
1971	12	14
1971	12	15
1971	12	16
1971	12	17
1971	12	18
1971	12	19
1971	12	20
1971	12	21
1971	12	22
1971	12	23
1971	12	24
1971	12	25
1971	12	26
1971	12	27
1971	12	28
1971	12	29
1971	12	30
1971	12	31

1971

写真図版



1. 1区全景 (西から)



2. 1区全景 (東から)



3. 2区全景 (東から)



1. 2区全景 (西から)



2. 2区西側近景 (南東から)



3. 2区中央近景 (南から)



4. 2区東側近景 (南西から)



5. 2区試掘調査風景 (北西から)



1. SI01 (南から)



2. SI01 遺物出土状況 (南から)



3. SI01 貯蔵穴周辺遺物出土状況 (南から)



4. SI01 カマド (南から)



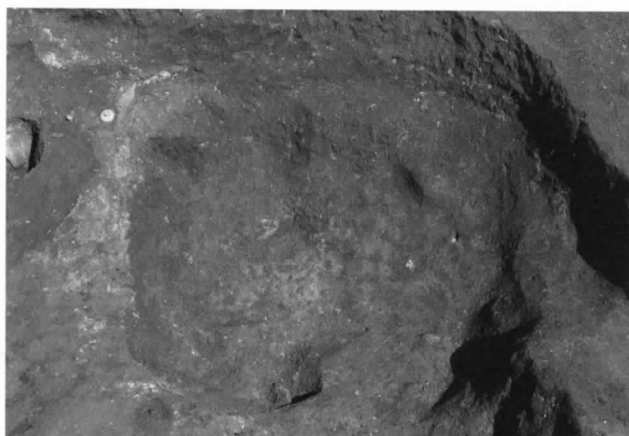
5. SI01 カマド断ち割り状況 (南から)



1. SI01 カマド掘り方 (南から)



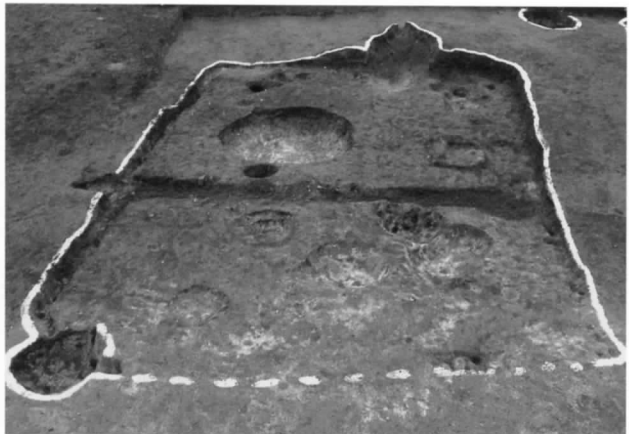
2. SI01 カマド遺物出土状況 (南から)



3. SI01 貯蔵穴 (南から)



4. SI01 貯蔵穴半截状況 (南から)



5. SI01 掘り方 (南から)



6. SI01 カマド掘り方ベルト設定状況 (南から)



7. SI01 床下土坑半截状況 (南から)



8. SI01 床下焼土 (南から)



1. SI02 (西から)



2. SI02 (南から)



3. SI02 検出状況〔浅間粕川テフラ検出状況〕(南から)



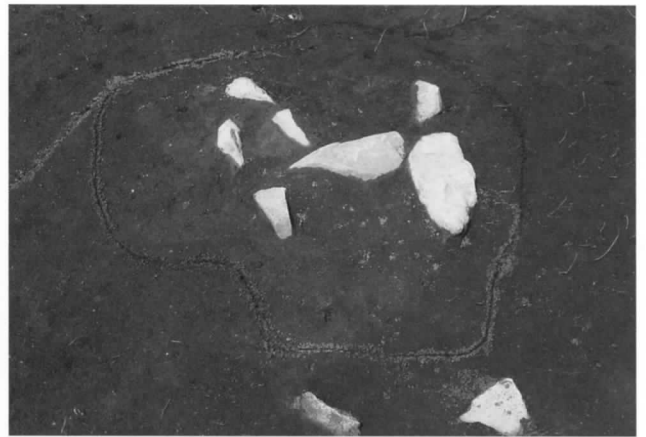
4. SI02 南北セクション (西から)



5. SI02 東西セクション (南から)



1. SI02 カマド (北西から)



2. SI02 カマド検出状況 1 (南東から)



3. SI02 カマド検出状況 2 (北西から)



4. SI02 カマド掘り方 (北西から)



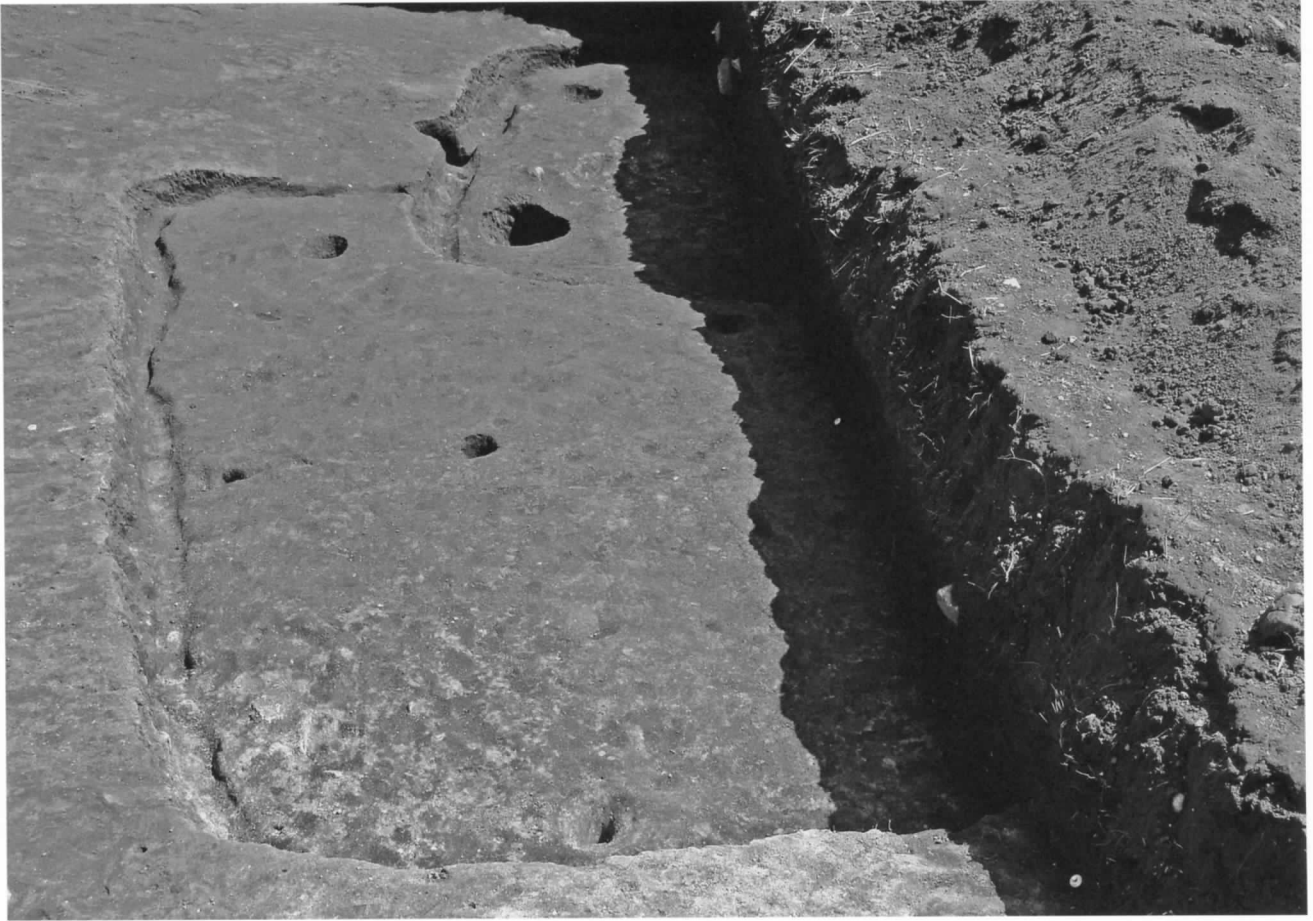
5. SI03 (西から)



6. SI03 セクション (南から)



7. SI03 カマド (西から)



1. SI04・05 (西から)



2. SI04 (北から)



3. SI04 (西から)



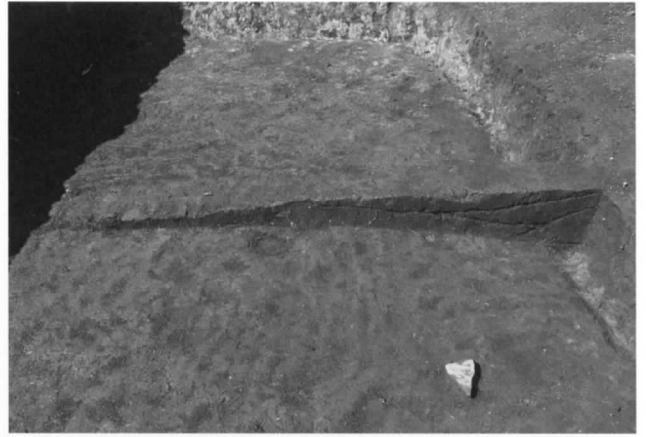
4. SI04 遺物出土状況 1 (北から)



5. SI04 遺物出土状況 2 (北西から)



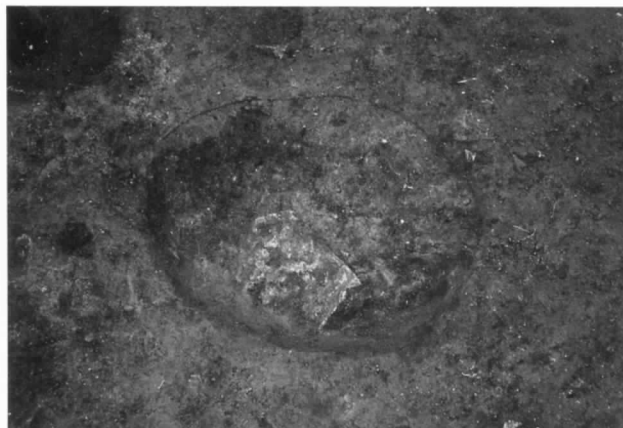
1. SI05 (東から)



2. SI05 南北セクション (東から)



3. SI06 (西から)



4. SI06 焼土ピット P1 (南東から)



5. SI06 焼土ピット P1 半截状況 (南東から)



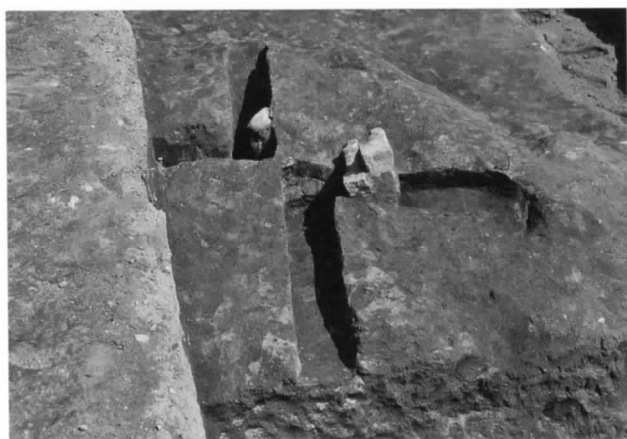
1. SI06 遺物出土状況〔小刀〕(北東から)



2. SI06 遺物出土状況〔紡錘車〕(南から)



3. SI07 (西から)



4. SI07 カマド断ち割り状況 (西から)



5. SI07 カマド遺物出土状況 (西から)



1. SI08 (西から)



2. SI08 カマド (西から)



3. SI08 カマド断ち割り状況 (西から)



4. SI08 北ベルト (西から)



5. SI08 南ベルト (西から)



1. SI08 遺物出土状況 1 (西から)



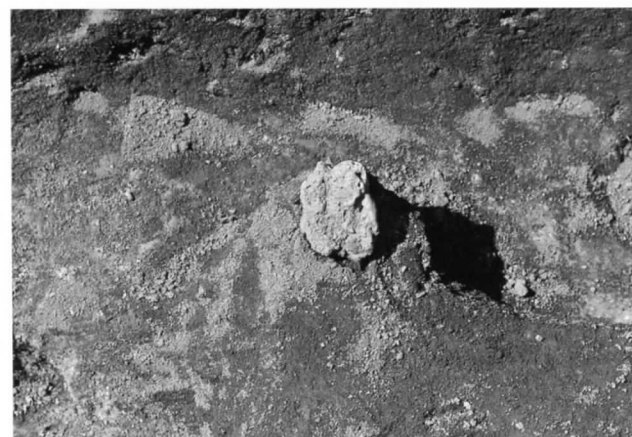
2. SI08 遺物出土状況 3 (西から)



3. SI08 遺物出土状況 4 (西から)



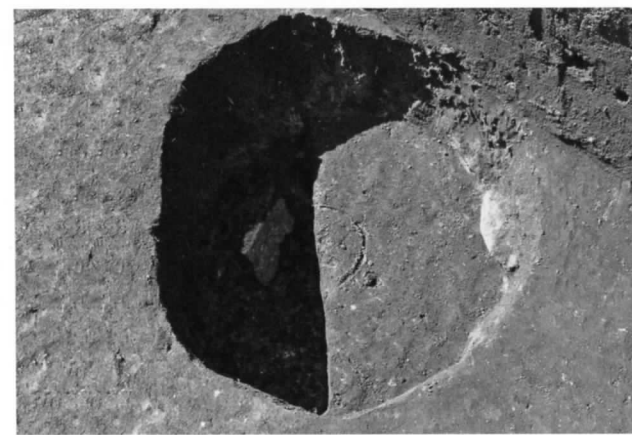
4. SI08 カマド遺物出土状況 (西から)



5. SI08 遺物出土状況 2 [鉄滓] (東から)



6. SK01 (南西から)



7. SK01 柱痕跡検出状況 (南東から)



8. SK01 半載状況 (南西から)



1. SK01 遺物出土状況〔羽釜〕(南から)



2. SK02 (南から)



3. SK02 半截状況 (南から)



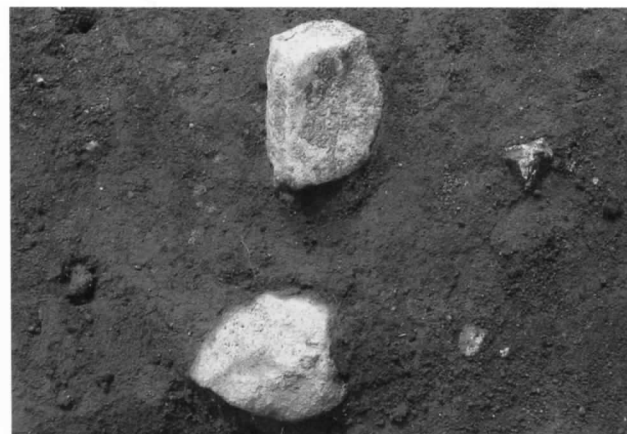
4. SK03 (東から)



5. SK03 セクション (東から)



6. SK03 遺物出土状況 (東から)



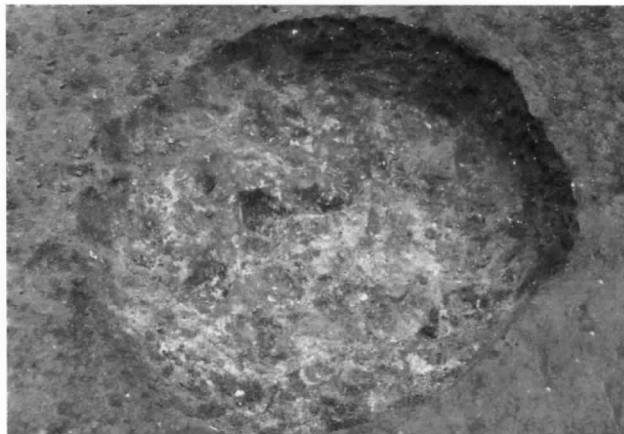
7. SK03 遺物出土状況〔滓付着礫〕(東から)



8. SK03 遺物出土状況〔羽口か〕(東から)



1. SK03 遺物出土状況〔鉄滓〕（東から）



2. SK04（東から）



3. SK04 半截状況（東から）



4. SK05（西から）



5. SK05 半截状況（西から）



6. SK05 検出状況（北西から）



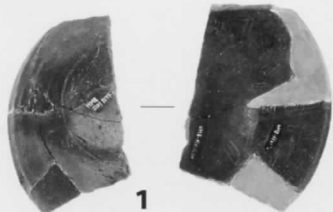
7. 調査前風景（北西から）



8. 調査前風景2（北東から）

SI01 出土遺物

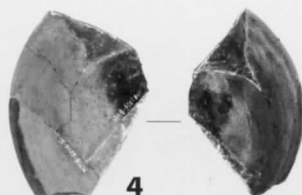
SI01



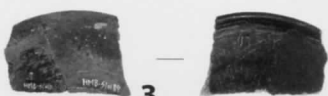
1



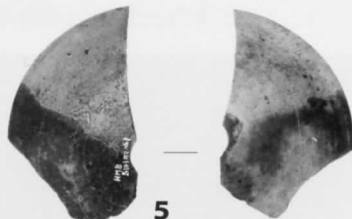
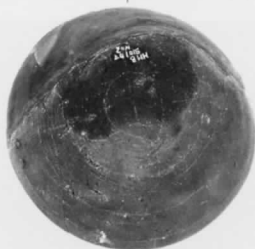
2



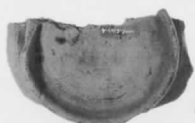
4



3



5



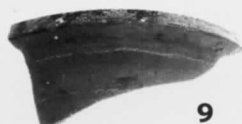
6



7



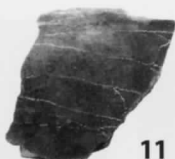
8



9



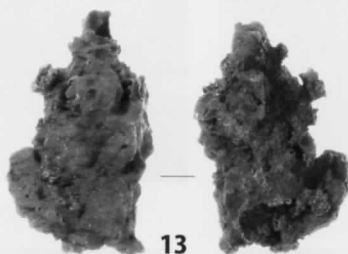
10



11



12



13

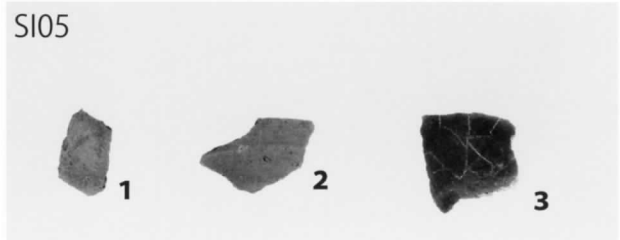
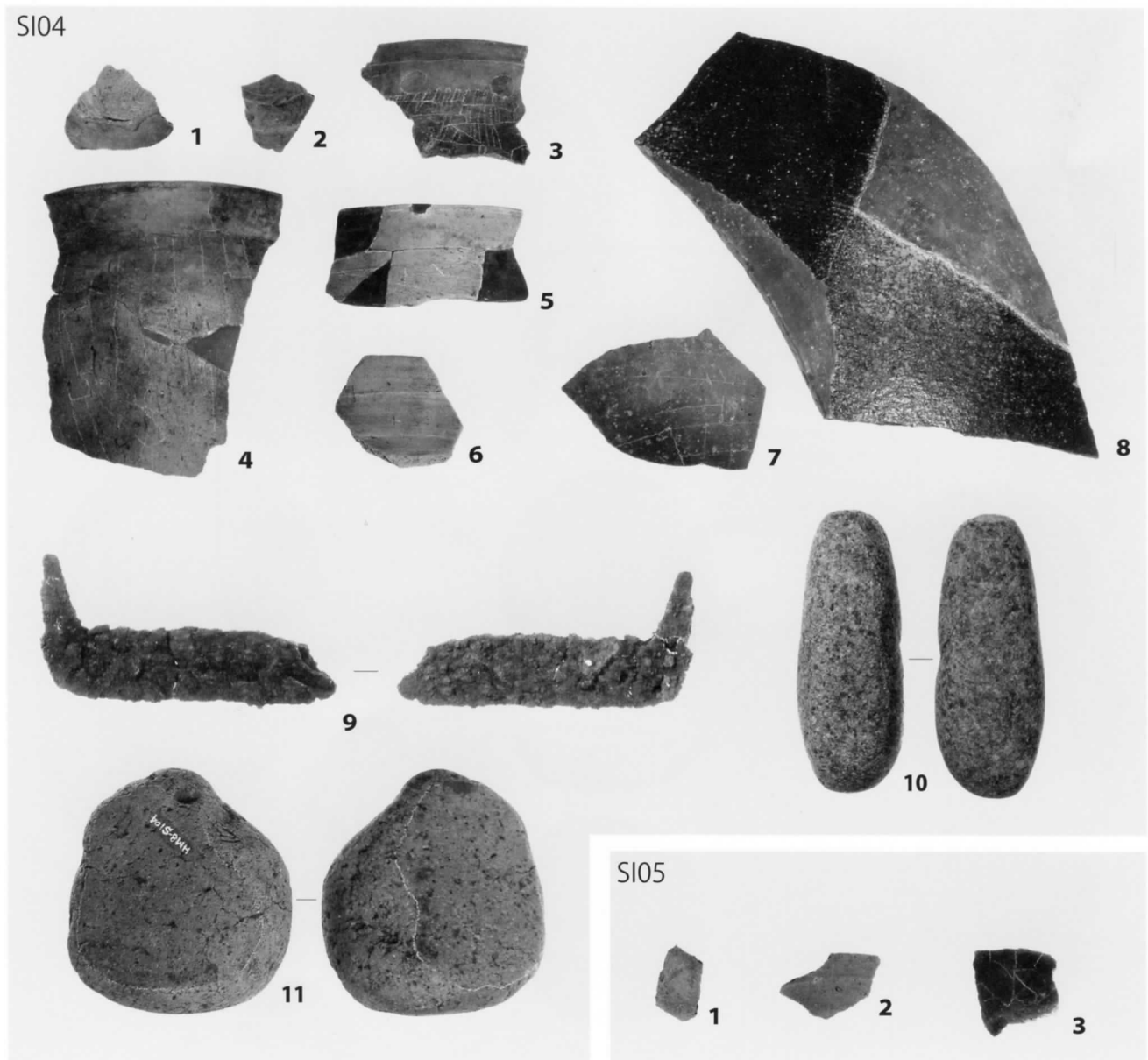
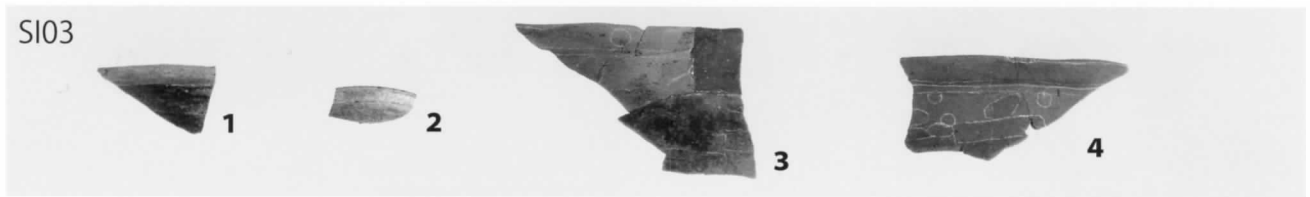
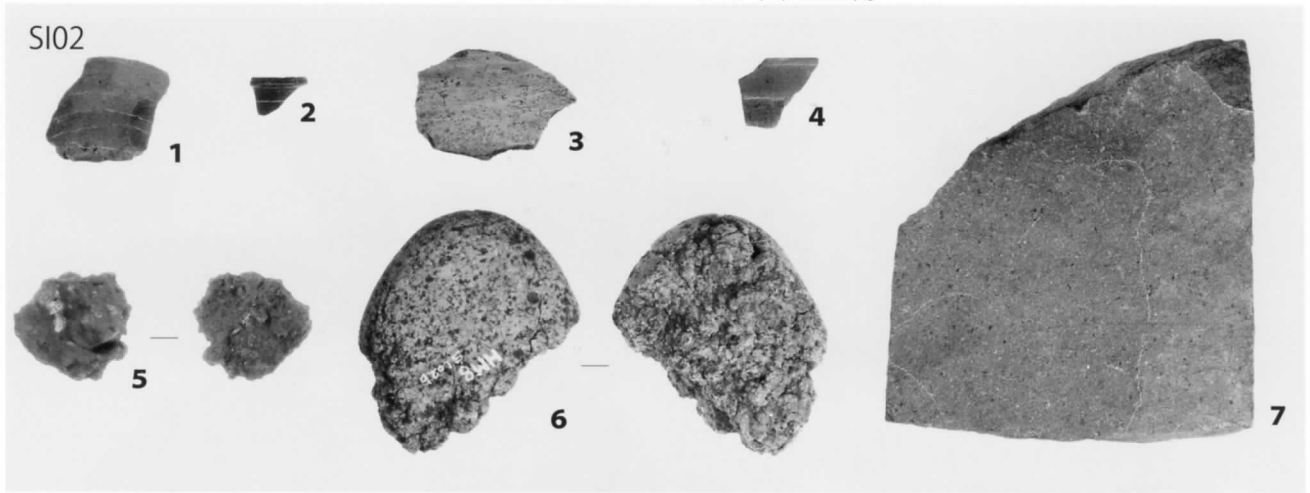


14

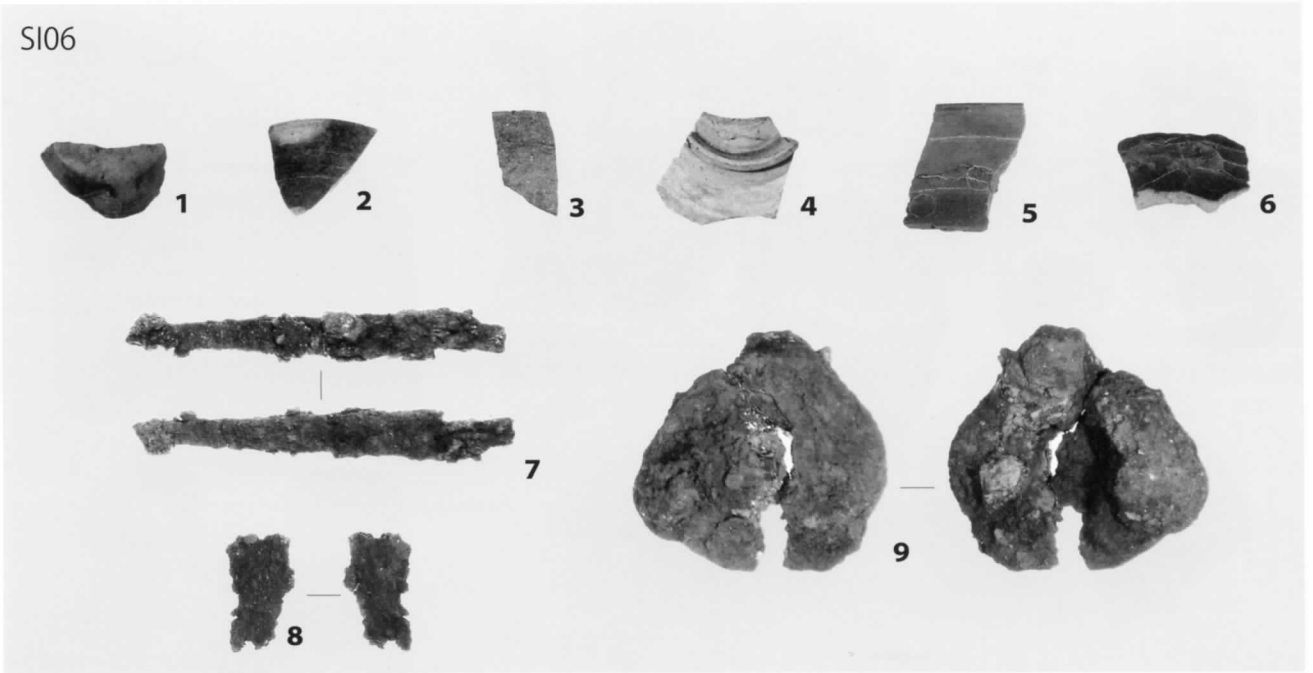


15

SI02 · SI03 · SI04 · SI05 出土遺物



SI06



SI07

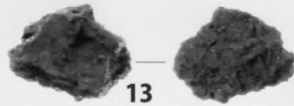
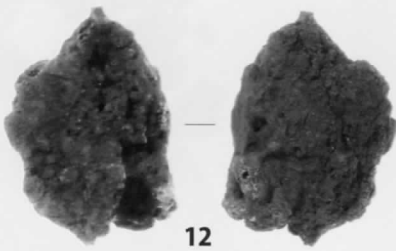
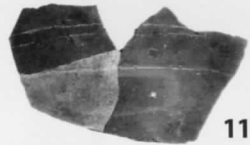
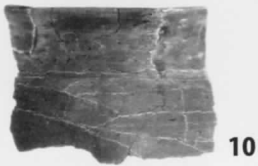
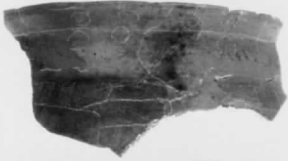


SI08



SI08・SK01 出土遺物

SI08

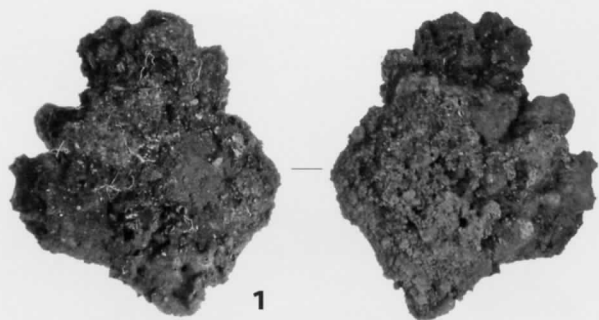


SK01

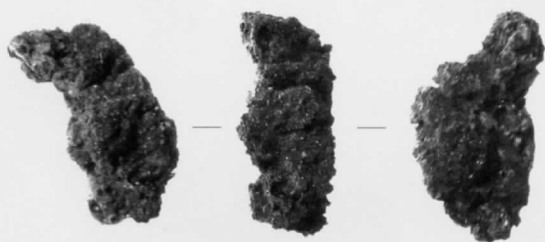


SK03・SK04・SK05・遺構外出土遺物

SK03



滓付着礫

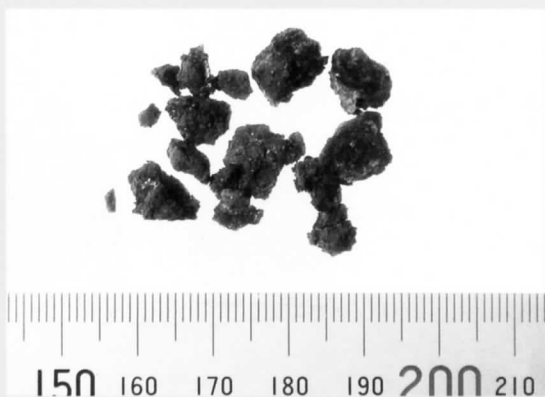


羽口片か

SK04

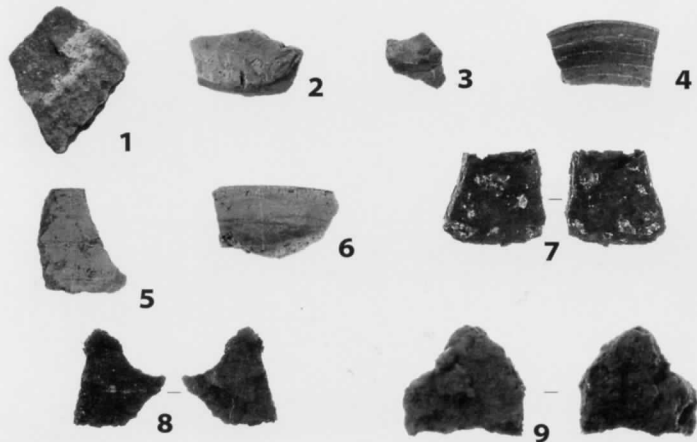


SK05



出土鉄片

遺構外



墨書土器拡大写真



1. 第36図1「永隆」



2. 第36図3「由人」



3. 第24図1(底部外面)「□」



4. 第24図1(底部内面)「□」



5. 第11図7(体部内面)「□」

報告書抄録

ふりがな	はやしみやはらいせきはち							
書名	林宮原遺跡Ⅷ							
副書名	仮設ゲートボール場造成に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	長野原町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	富田孝彦							
編集機関	長野原町教育委員会							
所在地	〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町与喜屋174 TEL 0279-82-4517							
発行年月日	西暦2011年12月22日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
林中原Ⅰ遺跡	群馬県吾妻郡長野原町大字林	10424	48	363230 (363241)	1384047 (1384035)	20080901 ～ 20080918	274	仮設ゲートボール場造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
林宮原遺跡	集落跡	平安時代		住居跡 土坑	8軒 5基	土師器・須恵器・ 灰釉陶器・鉄製品・ 鉄滓・石器・縄文 土器		長野県域との交流を示す資料が出土
要約	<p>本遺跡は吾妻川左岸の最上段丘上の南向き緩斜面に位置する。標高は626m前後である。平安時代竪穴住居跡8軒、土坑5基が検出された。住居跡は北カマドのSI01、東南カマドのSI02の他は東カマドで、出土遺物から前者が9世紀第3四半期、後者が10世紀第1四半期に比定されることから9世紀後半代は東カマド主体で北カマドが存在し、10世紀代にも東カマドが主体だが東南カマドが出現するという大まかな方向性が把握された。因みに東南カマドをもつSI02は青灰色テフラ(浅間粕川テフラ)に覆われて検出されている。土坑のうちSK01は柱痕跡が確認されたことから掘立柱建物跡の可能性が高く、SK03・05は羽口や鉄滓・鉄片の出土から小鍛冶関連遺構と考えられ、集落内で小鍛冶を行っていたことがほぼ明確になった。出土遺物では県内平野部では出土事例の確認できない2点の遺物が住居内から出土した。苧引金具と内黒処理を施された高台付皿である。前者から集落内で麻の栽培・収穫から麻布の生産までを生業の一つとして行っていたことが推測され、いずれも長野県域との交流を示す資料と判断された。</p>							

林宮原遺跡Ⅷ

— 仮設ゲートボール場造成に伴う発掘調査報告書 —

平成23年12月19日 印刷

平成23年12月22日 発行

発行 群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174

TEL 0279 (82) 4517 FAX 0279 (82) 4519

印刷 朝日印刷工業株式会社

